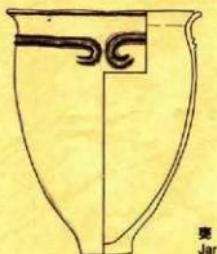


福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告

雀 屋 8

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第747集



壺
Jar

2003

福岡市教育委員会

『雀居8』正誤表

頁	行	Fig.	誤(新体文字は修正指示)	正(大文字が修正部分)
II	16		(動植物) 1/2である。	16 (動植物)、骨肉製品1/2である。
III	下2	Fig. 353 SS02		挿入 Fig. 353 SS02, SS03
	下1	Fig. 354 SS03		訂正 Fig. 354 SS04
4	17		CD化した。	挿入 CD-R化した。
5	Fig. 5		タイトルの下に「赤線は下面水田を示す」の文字を挿入	
6	下8	SF068、061~085の		SF068、SF081~SF085の
	下5	SF083~085の		SF083~SF085の
9	12	SF081~085の		SF081~SF085の
	21	SF081~085の		SF081~SF085の
11	Fig. 14		スケールの下に挿入	(17~20はS=1/2)
13	Fig. 18	置物番号「26」右の木綿の右下に「27」の文字を挿入		
14	Fig. 19	置物番号「29」を「31」に訂正		
17	Fig. 24	スケールの下に挿入 (縮尺1/2・1/4)		(11~14はS=1/2) (縮尺1/2・1/4)
24	下4	タイプ註1		削除
	Fig. 34	置物番号「36」を「28」に訂正		
25	Fig. 35	スケールの下に挿入		(1はS=1/2)
26	Fig. 36	置物番号「26~24」下の土器の右下に「25」の文字を挿入		
30	Fig. 42	スケールの下に挿入		(6はS=1/2)
	Fig. 43	置物番号「15」の脚部透かし孔内部を網ナシに訂正		
34	8	SW01~03が古墳時代		SW01~SW03が古墳時代
		SW04~07が弥生時代		SW04~SW07が弥生時代
35	Fig. 56	スケールの下に挿入		(3はS=1/2)
38	Fig. 59	置物番号「22」を「29」に訂正		
折り込み	Fig. 97	水桶番号に置換番号を挿入		22(SW02) 11(SW04) 12(SW04)
74	Fig. 110	置物番号「40」を「148」に訂正		
75	Fig. 111	置物番号「58」の復原面図を水桶品と同じ黒い縦罫に訂正		
82	Fig. 121	各復原面の右側レベル線線上に「H=4.70m」の文字を挿入 (回右側) 第11次調査		第12次調査
110	Fig. 164	[国中央右] 1号土塁墓		削正 SH01
112	Fig. 169	スケールの下に挿入		(8はS=1/2)
116	Fig. 175	置物番号「1」の裏面の数字を削除		
117	Fig. 177	スケールの下に挿入		(12はS=1/2)
119	Fig. 183			(2はS=1/2)
125	Fig. 203	タイトルの下に「赤線は振り下げの途中を示す」の文字を挿入		
12	caで			削正 caで
134	Fig. 214	置物番号「57」を「58」に訂正		
135	Fig. 217	スケールの下に挿入		(4~5はS=1/2)
141	Fig. 229			(29はS=1/2)
2	Fig. 230	SW01~03の		SW01~SW03の
3	Fig. 231	SW04~07の		SW04~SW07の
186	Fig. 260	スケールの下に挿入		(15~16はS=1/2)
186	17	18行目以下を詰める		
186	Fig. 273	置物番号「63」右の土器の右下に「64」の文字を挿入		
174	Fig. 284	置物番号「142」の新面図に新番号を挿入		
182	Fig. 293	置物番号「5」内、右上隅のアミを網ナシに訂正		
4	11(P70~71 折り込み)は			削正 11(P62~63 折り込み)は
188	下5	「北九州市長岡遺跡」以下の文書を改行		
		12は整行		挿入 12(P62~63 折り込み)は整行
219	下2	O28グリッドで検出		O28グリッドで検出
2	Fig. 353	5号円形溝SS05		削正 4号円形溝SS04
3	Fig. 354	SS05は		SS04は
221	Fig. 353	Fig. 353 SS02		挿入 Fig. 353 SS02+SS03
	Fig. 354	Fig. 354 SS03		削正 Fig. 354 SS04

福岡市博多区

雀居8

雀居遺跡第12次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第747集



遺跡名	雀居遺跡 第12次調査	所 在 地	福岡市博多区大字雀居正フリ川		
調査番号	9715 遺跡略号	SAS-12	開発面積	31,000m ²	
調査対象面積	5,800m ²	調査面積	5,800m ² × 3面	調査期日	970508～980325

平成15年

福岡市教育委員会

序

九州の北端部に位置し、海に開かれた福岡市は、古くよりアジア大陸や半島の先進文化の門戸として、わが国の歴史上重要な役割を果たしてきました。市内には対外交流を示す遺跡が多く点在し、なかでも博多区板付遺跡はわが国における種作発祥の地として、また中央区福岡城内にある鴻臚館跡は、奈良～平安時代の迎賓館として有名です。

現在の福岡市のゲートウェイは、博多港と福岡空港です。福岡空港は、国内32都市、海外21都市との路線を有し、全国第3位の乗降客数を誇っています。さらに航空需要が予想されることから、運輸省（現国土交通省）は、福岡空港西側整備を進めることになりました。福岡市教育委員会では、この建設工事に先立って空港西側の地下に眠っている雀居遺跡の発掘調査を平成3年から着手し、平成10年第13次調査まで実施しました。各次調査とも新しい知見が掘り出され、考古学会だけでなく歴史ファンの注目を集めました。市民の高い関心に応えて福岡市埋蔵文化財センターと福岡市博物館で雀居遺跡に関する展示会を開催しました。

本書は、雀居遺跡第12次調査の報告書です。重要な構造や遺物を発見しましたが、中でも弥生時代から古墳時代の多様な木製品が出土し、当時の農作業の様子や木工、建築技術を具体的に理解することができるようになりました。

調査から整理、報告に至るまで、運輸省第四港湾建設局（現国土交通省九州地方整備局）、特に福岡空港関係者の皆様にはご協力をいただきました。また発掘作業員、整理作業員をはじめとする数多くの方々からもご協力、ご指導をいただきました。心から感謝申し上げます。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、さらに学術研究の資料としても活用いただければ幸いです。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生



Fig.1 空から見た福岡市

例　言・凡　例

1. 本書は、国土交通省九州地方整備局（旧運輸省第四港湾建設局）による福岡空港内西側整備の建設工事に先だって実施した博多区雀居遺跡第12次調査の報告書である。

2. 検出遺構は、次のようなローマ字をつけ、遺物を取り上げている。本報告書では、遺構の内容が分かるように遺構名称とローマ字2文字の記号（遺構名英文の略号ではない）とを併記して第1号 井戸SE01、第3号土壙SK003のように表し、各遺構番号は、各次で完結させている。なお各遺構図は、次のような縮尺で統一している。

竪穴住居跡SC (1/60)　掘立柱建物跡SB (1/60)　土壙SK (1/40)　ピットSP (1/40)
 井戸SE (1/40)　甕棺墓SN (1/20)　木棺墓SA (1/20)　土壙墓SH (1/20)
 溝SD (1/40)　窪地(凹地)SW (1/100)　上器窪SJ (1/80)　土壙群SG (1/40)
 方形周溝SR (1/60)　円形溝SS (1/40)　水田跡SF (1/400)　杭列SX (1/40)
 流路SL (1/100)

3. 本書に掲載している地図、遺構図は、すべて磁北（真北より西に6度20分偏っている）のである。またグリッドの緯線は磁北より59度西に偏っている。

4. 遺物のうち石製品、木製品等については、遺物実測図の断面に網かけをしている。また実測図の基本縮尺は、土器、上製品、木製品1/4、石製品、土製品（紡錘車）1/2である。また、木製品については測定数値（単位mm）を図に記入している。なお、出土遺構や遺構面ごとに通し番号としているが、各次に渡っての通し番号にはなっていない。

5. 実測した遺物についてはすべてを掲載したが、個別記述については十分でない。この欠を補うために観察表を別冊にしている。また、人類学、昆虫学、動物学など関連科学分野の先生方にも分析、研究をお願いし、その結果を別冊に収録している。

6. 遺構・遺物撮影、原稿執筆、割付、編集は、主に力武が当たり、古墳時代土師器については、西堂将夫調査員が担当した。発掘現場での遺構実測から資料整理の遺物実測、分類、登録、さらに報告書作成のトレースなどの各作業については、主に瀬戸啓治、北村幸子、羽方誠、境聰子、野田和美、西堂将夫調査員と分担して行った。また石製品の実測、作図、及び土器割付図のトレース業務のうち一部を外部委託した。

7. 木製品、漆製品、金属器、およびガラス製品など特殊遺物については、保存処理やクリーニング、分析などを福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏と片多雅樹嘱託員にお願いした。

8. 英文要約の作成は林田憲三氏にお願いした。

9. 今回の発掘調査で得た出土遺物、実測図や写真などの記録類は、福岡市埋蔵文化財センター（福岡市博多区井相田2-1-9 ☎092-571-2921）に収蔵、保管する。誰もが検索し実見することが出来るので学術研究だけでなく、学校教育や生涯学習など多方面での活用を期待している。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査にいたるまで	1
第2節 発掘調査の組織と構成	1
第2章 発掘調査の記録	4
第1節 調査の概要	4
第2節 グリッド設定と基本層序	4
第3節 第I面（古代～中世）の調査	5
1. 水田跡 (SF)	5
第4節 第II面（弥生時代後期～古墳時代前期）の調査	18
1. 遷構検出面の遺物	19
2. 土器溜 (SJ)	22
3. 窓穴住居跡 (SC)	28
4. 土 壁 (SK)、ピット (SP)	30
5. 凹 地 (SW)	34
6. 方形周溝 (SR)	81
第5節 第III面（弥生時代中期～後期）の調査	85
1. 土層群 (SG)	85
2. 遷構検出面の遺物	88
3. 土 壁 (SK)、ピット (SP)	110
4. 土壌墓 (SH)	149
5. 凹 地 (SW)	151
6. 杭 列 (SX)	218
第6節 第IV面（弥生時代早期～前期）の調査	219
1. 円形溝 (SS)	219
第3章 おわりに	222
1. 小 結	222

12次挿図目次

Fig. 1	空から見た福岡市	I	Fig.39	SC01実測図 (縮尺1/60)	28
Fig. 2	周辺の遺跡分布図 (縮尺1/25,000)	2	Fig.40	SC01全景 (北より)	29
Fig. 3	空から見た福岡空港	3	Fig.41	SC01の遺物	29
Fig. 4	土層柱状図	4	Fig.42	SC01の遺物 (縮尺1/4・1/2)	30
Fig. 5	水田跡全体図	5	Fig.43	SP0001の遺物 (縮尺1/4)	30
Fig. 6	1区下水面田跡実測図 (縮尺1/400)	6	Fig.44	SP0001の遺物出土状況	30
Fig. 7	水田跡と流路 (北西より)	7	Fig.45	SK030実測図 (縮尺1/40)	31
Fig. 8	2区水田跡 (北西より)	7	Fig.46	SK030の遺物 (縮尺1/4)	31
Fig. 9	1区水田跡 (南東より)	8	Fig.47	SP0158の遺物 (縮尺1/4)	31
Fig.10	1区下面水田跡と土手	9	Fig.48	作業風景	31
Fig.11	1区水田跡土手の断面	9	Fig.49	SP0485の遺物 (縮尺1/4)	32
Fig.12	北折張区の畦畔断面	10	Fig.50	SP0485の遺物	32
Fig.13	4区水田跡 (北西から)	10	Fig.51	SP0436の遺物 (縮尺1/4)	33
Fig.14	上面水田の遺物 (縮尺1/4・1/2)	11	Fig.52	SP0436の遺物	33
Fig.15	上面水田の遺物 (縮尺1/4)	12	Fig.53	SW01実測図 (縮尺1/100)	34
Fig.16	上面水田の遺物	12	Fig.54	SW01 (南より)	35
Fig.17	上面水田の遺物	12	Fig.55	SW01 (東より)	35
Fig.18	上面水田の遺物 (縮尺1/4)	13	Fig.56	SW01の遺物 (縮尺1/4・1/2)	36
Fig.19	上面水田の遺物	14	Fig.57	SW01の遺物	37
Fig.20	上面水田の遺物	15	Fig.58	SW01の遺物 (縮尺1/2)	38
Fig.21	上面水田の遺物 (縮尺1/4)	15	Fig.59	SW01の遺物	38
Fig.22	足跡	16	Fig.60	SW01の遺物	39
Fig.23	人形の出土状況	16	Fig.61	SW01の遺物 (縮尺1/4)	39
Fig.24	下面水田の遺物 (縮尺1/2・1/4)	17	Fig.62	SW01の遺物	39
Fig.25	下面水田の遺物	17	Fig.63	SW01の遺物	40
Fig.26	第Ⅱ面検出作業	18	Fig.64	SA01の遺物 (縮尺1/4)	41
Fig.27	第Ⅱ面検出作業	18	Fig.65	SW01の遺物	42
Fig.28	第Ⅱ面遺構検出面の遺物 (縮尺1/4)	19	Fig.66	木製品の出土状況	42
Fig.29	第Ⅱ面遺構検出面の遺物	19	Fig.67	木製品の出土状況	42
Fig.30	第Ⅱ面遺構検出面の遺物 (縮尺1/4)	20	Fig.68	SW01の遺物	43
Fig.31	SJ01検出作業	22	Fig.69	SW01の遺物 (縮尺1/4)	43
Fig.32	第Ⅱ面遺構分布図 (縮尺1/400)	23	Fig.70	SW01の遺物	44
Fig.33	SJ01の実測作業	23	Fig.71	SW01の遺物 (縮尺1/4)	45
Fig.34	SJ01の遺物	24	Fig.72	作業風景	46
Fig.35	SJ01の遺物 (縮尺1/4・1/2)	25	Fig.73	SW02実測図 (縮尺1/100)	46
Fig.36	SJ01の遺物 (縮尺1/4)	26	Fig.74	木製品の出土状況	47
Fig.37	SJ01の遺物 (縮尺1/4)	27	Fig.75	SW02の遺物 (縮尺1/4)	48
Fig.38	SC01検出作業	28	Fig.76	SW02の遺物 (縮尺1/4)	49

Fig.77	SW02の遺物	49
Fig.78	SW02の遺物（縮尺1/4）	50
Fig.79	SW02の遺物	51
Fig.80	SW02の遺物（縮尺1/4）	52
Fig.81	SW02の遺物（縮尺1/2）	53
Fig.82	SW02の遺物	54
Fig.83	木製品の出土状況	54
Fig.84	木製品の出土状況	54
Fig.85	木製品の出土状況	54
Fig.86	木製品の出土状況	54
Fig.87	SW02の遺物（縮尺1/4）	55
Fig.88	SW02の遺物	56
Fig.89	SW02の遺物（縮尺1/4）	57
Fig.90	SW02の遺物	58
Fig.91	SW02の遺物（縮尺1/4）	59
Fig.92	SW02の遺物	59
Fig.93	SW02の遺物（縮尺1/4）	60
Fig.94	SW02の遺物	61
Fig.95	SW02の遺物（縮尺1/4）	62
Fig.96	SW02・SW04の遺物（縮尺1/4）…折込	
Fig.97	SW02・SW04の遺物	折込
Fig.98	SW02の遺物	63
Fig.99	SW02の遺物（縮尺1/4）	64
Fig.100	SW02の遺物	65
Fig.101	SW02の遺物（縮尺1/4）	66
Fig.102	SW02の遺物（縮尺1/4）	67
Fig.103	SW02の遺物	68
Fig.104	SW02の遺物（縮尺1/4）	69
Fig.105	SW02の遺物	70
Fig.106	SW02の遺物（縮尺1/4）	70
Fig.107	SW02の遺物（縮尺1/4）	71
Fig.108	SW02の遺物	72
Fig.109	SW02の遺物（縮尺1/4）	73
Fig.110	SW02の遺物（縮尺1/4）	74
Fig.111	SW02の遺物（縮尺1/4）	75
Fig.112	SW02の遺物	76
Fig.113	SW02の遺物（縮尺1/4）	77
Fig.114	SW03の遺物（縮尺1/4）	78
Fig.115	SW03実測図（縮尺1/100）	78
Fig.116	SW03の遺物（縮尺1/4）	79
Fig.117	SW03の遺物	79
Fig.118	SW03の遺物（縮尺1/4）	80
Fig.119	SR01土器出土状況	81
Fig.120	SR01（北西から）	81
Fig.121	SR01実測図（縮尺1/60）	82
Fig.122	SR01（北西から）	83
Fig.123	SR01の遺物	83
Fig.124	SR01の遺物（縮尺1/4）	84
Fig.125	第Ⅲ面の検出作業	85
Fig.126	第Ⅲ面遺構分布図（縮尺1/500）	85
Fig.127	遺物検出作業	86
Fig.128	SG01の遺物	86
Fig.129	SG01の遺物（縮尺1/4）	86
Fig.130	SG02の遺物（縮尺1/4）	87
Fig.131	SG02の遺物	87
Fig.132	SG02の遺物	88
Fig.133	SG02の遺物（縮尺1/2）	88
Fig.134	第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/4）	89
Fig.135	第Ⅲ面遺構検出面の遺物	90
Fig.136	第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/4）	90
Fig.137	第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/4-1/2）	91
Fig.138	第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/2）	92
Fig.139	第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/2）	93
Fig.140	第Ⅲ面遺構検出面の遺物	93
Fig.141	第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/2）	93
Fig.142	第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/2）	94
Fig.143	第Ⅲ面遺構検出面の遺物	95
Fig.144	第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/2）	96
Fig.145	第Ⅲ面遺構検出面の遺物	96
Fig.146	第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/2）	97
Fig.147	第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/2）	98
Fig.148	第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/2）	99
Fig.149	第Ⅲ面遺構検出面の遺物	99
Fig.150	第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/2）	100
Fig.151	第Ⅲ面遺構検出面の遺物	101
Fig.152	第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/2）	101
Fig.153	第Ⅲ面遺構検出面の遺物	102
Fig.154	第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/2）	103
Fig.155	第Ⅲ面遺構検出面の遺物	104
Fig.156	第Ⅲ面遺構後表面の遺物（縮尺1/2）	105

Fig.157 第Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/4・1/2) …… 106	Fig.197 SK019実測図(縮尺1/40) …… 123
Fig.158 第Ⅳ面遺構検出面の遺物 …… 107	Fig.198 SK019の遺物(縮尺1/4) …… 123
Fig.159 第Ⅴ面遺構検出面の遺物(縮尺1/2) …… 108	Fig.199 SK021実測図(縮尺1/40) …… 123
Fig.160 第Ⅵ面遺構検出面の遺物(縮尺1/2) …… 109	Fig.200 SK021の遺物 …… 124
Fig.161 第Ⅶ面遺構検出面の遺物 …… 109	Fig.201 SK021の遺物(縮尺1/4) …… 124
Fig.162 第Ⅷ面遺構検出面の遺物(縮尺1/2) …… 109	Fig.202 SK024 …… 124
Fig.163 SK001 …… 110	Fig.203 SK024実測図(縮尺1/40) …… 125
Fig.164 土壌分布図(縮尺1/500) …… 110	Fig.204 SK024の遺物(縮尺1/4) …… 126
Fig.165 SK001上層(縮尺1/40) …… 111	Fig.205 SK024の遺物 …… 127
Fig.166 SK001の遺物(縮尺1/4) …… 111	Fig.206 SK024の遺物(縮尺1/4) …… 128
Fig.167 SK002実測図(縮尺1/40) …… 112	Fig.207 遺物出土状況 …… 129
Fig.168 SK002の遺物 …… 112	Fig.208 SK024の遺物 …… 129
Fig.169 SK002の遺物(縮尺1/4・1/2) …… 112	Fig.209 SK024の遺物(縮尺1/4) …… 130
Fig.170 SK003・SK004実測図(縮尺1/40) …… 113	Fig.210 SK024の遺物(縮尺1/4) …… 131
Fig.171 SK003の遺物(縮尺1/4) …… 114	Fig.211 SK024の遺物 …… 131
Fig.172 SK004の遺物(縮尺1/4・1/2) …… 114	Fig.212 SK024の遺物(縮尺1/4・1/2) …… 132
Fig.173 SK005実測図(縮尺1/40) …… 115	Fig.213 SK024の遺物 …… 133
Fig.174 発掘作業風景 …… 115	Fig.214 SK024の遺物(縮尺1/2) …… 134
Fig.175 SK005の遺物(縮尺1/4) …… 116	Fig.215 SK024遺物出土状況 …… 134
Fig.176 SK006実測図(縮尺1/40) …… 116	Fig.216 SK026の遺物(縮尺1/4・1/2) …… 134
Fig.177 SK006の遺物(縮尺1/4・1/2) …… 117	Fig.217 SK028の遺物(縮尺1/4・1/2) …… 135
Fig.178 SK006の遺物(縮尺1/4) …… 118	Fig.218 SK029の遺物(縮尺1/4・1/2) …… 136
Fig.179 SK006の遺物 …… 118	Fig.219 SK031実測図(縮尺1/40) …… 137
Fig.180 SK007実測図(縮尺1/40) …… 119	Fig.220 発掘作業風景(北拡張区) …… 137
Fig.181 SK007の遺物(縮尺1/4) …… 119	Fig.221 SK031の遺物(縮尺1/4) …… 137
Fig.182 SK008実測図(縮尺1/40) …… 119	Fig.222 SK032実測図(縮尺1/40) …… 138
Fig.183 SK008の遺物(縮尺1/4・1/2) …… 119	Fig.223 SK032の遺物(縮尺1/4) …… 138
Fig.184 SK009実測図(縮尺1/40) …… 120	Fig.224 SK032の遺物 …… 138
Fig.185 SK009の遺物 …… 120	Fig.225 SK035実測図(縮尺1/40) …… 139
Fig.186 SK009の遺物(縮尺1/4・1/2) …… 120	Fig.226 SK035の遺物出土状況 …… 139
Fig.187 SK011実測図(縮尺1/40) …… 121	Fig.227 SK035の遺物(縮尺1/4) …… 140
Fig.188 SK011の遺物(縮尺1/4) …… 121	Fig.228 SK035の遺物 …… 140
Fig.189 SK012実測図(縮尺1/40) …… 121	Fig.229 SK035の遺物(縮尺1/4・1/2) …… 141
Fig.190 SK012の遺物(縮尺1/4) …… 121	Fig.230 SK036実測図(縮尺1/40) …… 142
Fig.191 SK013の遺物(縮尺1/4) …… 121	Fig.231 SK036の遺物(縮尺1/4・1/2) …… 142
Fig.192 SK014実測図(縮尺1/40) …… 122	Fig.232 SK036の遺物 …… 142
Fig.193 SK014の遺物(縮尺1/4) …… 122	Fig.233 SP0253実測図(縮尺1/40) …… 142
Fig.194 SK016の遺物(縮尺1/4) …… 122	Fig.234 SP0253の遺物(縮尺1/4) …… 143
Fig.195 SK017の遺物(縮尺1/4) …… 122	Fig.235 SP0264実測図(縮尺1/40) …… 143
Fig.196 SK018の遺物(縮尺1/4) …… 122	Fig.236 SP0264 …… 143

Fig.237 SP0264の遺物 (縮尺1/4・1/2)	144	Fig.277 SW04の遺物	169
Fig.238 SP0264の遺物	144	Fig.278 SW04の遺物 (縮尺1/4)	170
Fig.239 SP0241実測図 (縮尺1/40)	145	Fig.279 SW04の遺物	171
Fig.240 SP0542実測図 (縮尺1/40)	145	Fig.280 SW04の遺物 (縮尺1/4)	171
Fig.241 SP0038実測図 (縮尺1/40)	145	Fig.281 SW04の遺物 (縮尺1/4・1/8)	172
Fig.242 SP0520実測図 (縮尺1/40)	145	Fig.282 SW04の遺物 (縮尺1/4)	173
Fig.243 ピットの遺物 (縮尺1/4・1/2)	145	Fig.283 SW04の遺物	173
Fig.244 ピットの遺物	146	Fig.284 SW04の遺物 (縮尺1/4)	174
Fig.245 ピットの遺物 (縮尺1/4・1/2)	146	Fig.285 SW04の遺物 (縮尺1/4)	175
Fig.246 ピットの遺物 (縮尺1/4)	147	Fig.286 SW04の遺物 (縮尺1/4・1/2)	175
Fig.247 ピットの遺物	148	Fig.287 SW04の遺物 (縮尺1/2)	176
Fig.248 堆積層、木棺墓、土壙墓分布図(縮尺1/400)	149	Fig.288 SW04の遺物 (縮尺1/2)	177
Fig.249 SH01実測図 (縮尺1/10)	150	Fig.289 SW04の遺物 (縮尺1/2)	178
Fig.250 人骨の検出作業	150	Fig.290 SW04の遺物	179
Fig.251 SH01人骨出土状況	150	Fig.291 SW04の遺物	180
Fig.252 地面分布図 (縮尺1/400)	151	Fig.292 SW04の遺物 (縮尺1/4)	181
Fig.253 SW04実測図 (縮尺1/100)	152	Fig.293 SW04の遺物 (縮尺1/4)	182
Fig.254 SW04 (北西から)	153	Fig.294 SW04の遺物	183
Fig.255 SW04 (北西から)	153	Fig.295 木製品の出土状況	183
Fig.256 実測作業	154	Fig.296 SW04の遺物 (縮尺1/4)	184
Fig.257 西岸土層断面	154	Fig.297 SW04の遺物	184
Fig.258 遺物取り上げ作業	154	Fig.298 木製品の出土状況	185
Fig.259 南端の遺物出土状況	154	Fig.299 木製品の出土状況	185
Fig.260 SW04上部の遺物 (縮尺1/4・1/2)	155	Fig.300 SW04の遺物 (縮尺1/4)	186
Fig.261 SW04上部の遺物	156	Fig.301 SW04の遺物	187
Fig.262 SW04の遺物 (縮尺1/4)	157	Fig.302 SW04の遺物 (縮尺1/4)	188
Fig.263 SW04の遺物 (縮尺1/4)	158	Fig.303 SW04の遺物	188
Fig.264 SW04の遺物 (縮尺1/4)	159	Fig.304 SW04の遺物 (縮尺1/4)	189
Fig.265 SW04の遺物 (縮尺1/4)	160	Fig.305 SW04の遺物	190
Fig.266 遺物出土状況	161	Fig.306 SW04の遺物 (縮尺1/4)	191
Fig.267 SW04の遺物	161	Fig.307 SW04の遺物 (縮尺1/4)	192
Fig.268 SW04の遺物 (縮尺1/4)	162	Fig.308 SW04の遺物	192
Fig.269 SW04の遺物 (縮尺1/4)	163	Fig.309 SW04の遺物 (縮尺1/4)	193
Fig.270 SW04の遺物 (縮尺1/4)	164	Fig.310 SW04の遺物 (縮尺1/4)	194
Fig.271 SW04の遺物 (縮尺1/4)	164	Fig.311 SW04の遺物	195
Fig.272 SW04の遺物 (縮尺1/4)	165	Fig.312 SW04の遺物 (縮尺1/4)	196
Fig.273 SW04の遺物 (縮尺1/4)	166	Fig.313 SW04の遺物 (縮尺1/4)	197
Fig.274 SW04の遺物	166	Fig.314 SW04の遺物 (縮尺1/4)	198
Fig.275 SW04の遺物 (縮尺1/4)	167	Fig.315 SW04の遺物	198
Fig.276 SW04の遺物 (縮尺1/4)	168	Fig.316 SW04の遺物	199

Fig.317 SW04の遺物 (縮尺1/4)	200
Fig.318 SW05実測図 (縮尺1/100)	201
Fig.319 SW05 (東から)	201
Fig.320 SW05の遺物	202
Fig.321 SW05の遺物 (縮尺1/4)	202
Fig.322 SW05の遺物 (縮尺1/4)	203
Fig.323 SW05の遺物 (縮尺1/2)	203
Fig.324 SW05の遺物 (縮尺1/4)	204
Fig.325 SW05の遺物 (縮尺1/4)	205
Fig.326 SW05の遺物	205
Fig.327 SW06実測図 (縮尺1/100)	206
Fig.328 白の出土状況	207
Fig.329 SW06 (東から)	207
Fig.330 SW06の遺物 (縮尺1/4)	208
Fig.331 SW06の遺物 (縮尺1/4)	209
Fig.332 SW06の遺物	209
Fig.333 SW06の遺物 (縮尺1/2)	210
Fig.334 SW06の遺物	210
Fig.335 SW06の遺物 (縮尺1/2)	211
Fig.336 SW06の遺物 (縮尺1/2)	212
Fig.337 SW06の遺物	213
Fig.338 SW06の遺物 (縮尺1/4)	214
Fig.339 SW06の遺物 (縮尺1/4)	215
Fig.340 SW07棟出作業 (南から)	216
Fig.341 SW07の遺物	216
Fig.342 SW07実測図 (縮尺1/100)	216
Fig.343 SW07の遺物 (縮尺1/4)	217
Fig.344 作業風景 (西から)	217
Fig.345 SX01杭列	218
Fig.346 SX01杭列断面	218
Fig.347 SX01杭列実測図 (縮尺1/40)	218
Fig.348 円形溝分布図 (縮尺1/300)	219
Fig.349 SS01実削図 (縮尺1/40)	219
Fig.350 SS02-SS03実削図 (縮尺1/40)	220
Fig.351 SS04実削図 (縮尺1/40)	220
Fig.352 SS01	221
Fig.353 SS02	221
Fig.354 SS03	221

第1章 はじめに

第1節 調査にいたるまで

昭和19年（1944）旧陸軍は、北部九州の防衛目的で席田（むしろだ）、月隈、上臼井と筑紫郡那珂町地区に渡る約254万m²で席田飛行場建設に着手した。昭和20年8月15日の終戦後、11月25日に米軍駐屯が接收し板付基地としてスタートする。翌昭和21年1月には月隈丘陵の山側部約82,500m²が航空機銃射演習用地として接收され、さらに翌昭和23年には約225万m²が給水タンク、弾薬庫として追加接收された。昭和26年（1951）には国内線が開設され民間飛行場となり、昭和47年（1972）3月31日に板付基地が返還されるまで長く米軍の基地として使用してきた。翌日の4月1日付けで福岡空港の供用開始が告示され今日に至っている。

アジアの玄関口としてますます役割が増している福岡空港は、博多港湾空港工事事務所平成12年資料によると航空路線網は国際線21都市、国内線32都市を結んでおり乗客数約1,970万人、航空機発着回数は139,950回に達している。さらに新福岡空港調査会によると2025年には発着回数は18万～19万回、乗客数は3,000万人を突破すると試算され、ここ数年で空港機能が飽和状態になると予想されることから、運輸省第四港湾建設局（現 国土交通省九州地方整備局）は国際線ターミナル、駐機場（エプロン）、国内、国際貨物などの各施設を空港西側に移動する「福岡空港西側整備」を計画した。この計画を受けて埋蔵文化財課では、平成3年（1991）6月15日～8月3日、西側全域において39か所の試掘トレンチ（全長3,250m）を設け遺跡の確認調査を行った。

この結果、整備計画予定地の3か所で遺構、遺物が集中することを確認し、字名から雀居遺跡群と名付けた。その後協議を重ね、乍次の計画を立て平成3年10月から発掘調査に着手し、平成10年第13次調査まで継続した。このうち国際線ターミナルの南側約300mのPOL（燃料タンク）用地では、平成8年から3か年に分けて約10,500m²を発掘調査することとした。第12次調査は、平成8年の第10次調査に引き続き、その西側約6,000m²を対象地として平成9年5月から11か月間で発掘することになった。

第2節 発掘調査の組織と構成

調査委託 運輸省第四港湾建設局（現 國土交通省九州地方整備局）

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 西嶋一郎

調査総括 福岡市教育委員会 埋蔵文化財課

課長 荒巻輝勝 調査第2係長 山口讓治

事前審査係 松村道博 田中壽夫 榎本義嗣 長家伸

調査庶務 小森彰 調査担当 力武卓治

発掘調査員 瀬戸啓治 北村幸子

発掘作業員 池田省三 池田福美 石屋四一 岩永嘉雄 梅崎元 浦伸英 江口毅保 櫻田信一

越智信孝 大谷政道 尾花憲吾 甲斐康完 蒲池雅徳 亀井薫 木原保生 堀篤史

川井田明 真田弘三 黒木良太郎 高着一夫 河野一 島津明男 白嶺元気

楠林司朗 古林茂夫 酒井次憲 志堂寺堂 柴田博 高崎卓浩 出上智雄 玉田重人

豊丸秀仁 中尾良藏 中川祥一 長野嘉一 野田淳一 西川謙 二宮白人 三浦力

野村道夫 羽岡正春 萩尾政士 早川章 平井武夫 脇坂勇 松永七郎 福田幹雄
 吹春憲治 別府俊美 前山正義 松永正義 安高精一 山田正治 吉田博明 吉住政光
 吉原琢 吉峰勤 阿部幸子 穴井加菜子 石川洋子 金子二三枝 伊藤美伸 石本理香
 岩本三恵子 江嶋ヒサ子 内山和子 大端由美子 古賀典子 川井田ムツ子 草場博子
 桑原美津子 小島キサ 小松富美 幸田信乃 世利陽子 渡川アキヨ 田原キヌエ
 塚本よし子 砧板春美 西山裕子 林田和子 西田文子 中川原美智子 福場真由美
 中野裕子 中村フミ子 鎌山治子 松浦滋子 林厚子 福田美星 松尾文江 藤原道子
 松岡芳枝 藤野トシ子 播磨千恵子 富田千栄子 水田ミヨ子 村田理恵 森田祐子
 持丸玲子 振川ゆかり 森教子 脇坂サツキ 渡辺淑子 安高久子

(九州大学) 金宰賛 大森円 益原祐介 (福岡大学) 羽方誠 (東京大学) 塚本浩司

田野裕之 (早稲田大学) 野口未幾 篠原律子 (沖縄国際大学) 繩田雅重

室内作業員 清水啓子 山野祥子 生垣綾子 桑野正子 市川緑 安部国恵 大神真理子

整理調査員 坂本幸子 境聰子 羽方誠 西堂将夫 野田和美

整埋作業員 池田由美 宮崎まり子 渡辺敦子 柴田志乃 生垣綾子 城後渡 藤元香子 岩隈香歌里

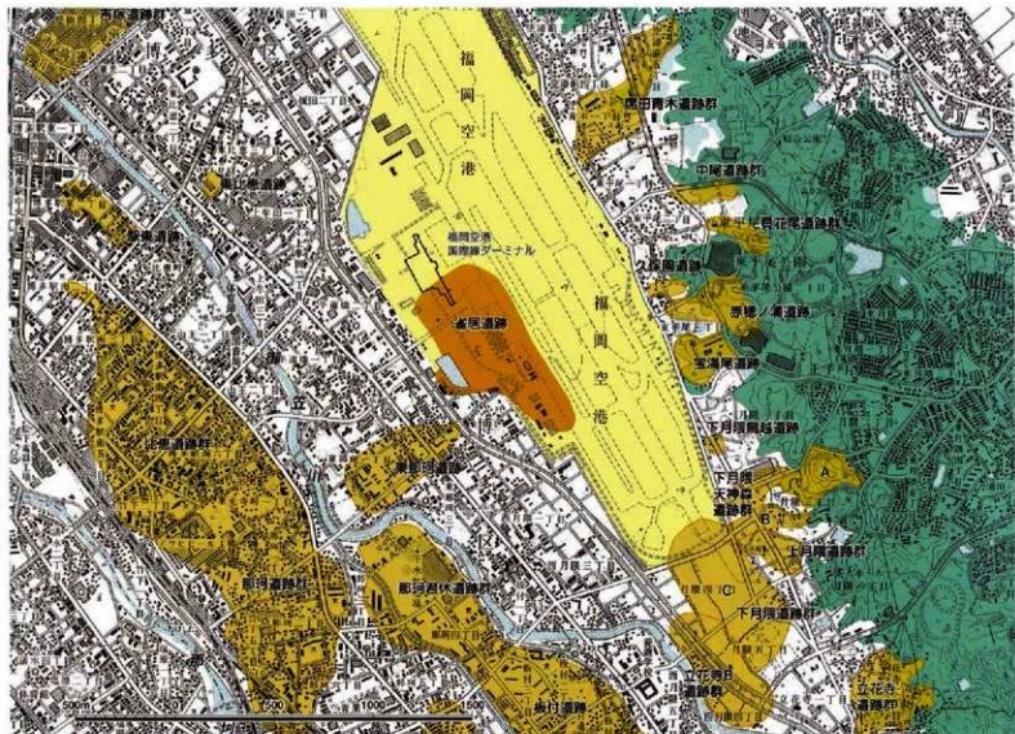


Fig.2 周辺の遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)



Fig.3 空から見た福岡空港

第2章 発掘調査の記録

第1節 調査の概要

第12次調査対象地の試掘は平成7年5月31日と6月21日の2日間実施し、この試掘所見を基に第4港湾建設局と協議を重ね、発掘対象面積、調査期間、予算などを決めた。この協議と並行して第7次、9次調査が実施されており、この調査成果を合わせて第10次の調査計画を立て、発掘の方法や確認すべき狙いを定めた。この間の経緯については第10次調査の報告書に記述している通りである。しかしながら細密な試掘調査を実施しても、実際の発掘調査では予想が外れる事もあれば、意外な遺構や遺物を検出、発見することもある。また長雨や日曜日、そして思わぬ潮水に発掘作業の中止を余儀なくされる事も起こる。このように予測できない状況下で当初の発掘目的を達成し、期日通りに調査完了するには、事前審査係や開発側など関係組織のバックアップと実際に発掘作業に従事する発掘作業員の協力なしにはとうてい不可能である。しかも発掘作業は埋蔵文化財の記録保存という目的が第一ではあるが、発掘作業員の安全衛生を確保、命を守ることが最優先である。働く条件が揃わざまに安全意識が欠如した環境下での発掘作業は、事故が多発するとともに学術的な水準が保てず、いたずらに遺跡を破壊、消滅するだけである。そこで絶えず発掘作業員と安全作業を確認しながら発掘の目的を追求するために、第10次調査から始めた「雀居遺跡週刊ニュース」発行を再開し、雀居遺跡の取り組みなど最新情報を関係者に配布、発信するようにした。今回報告書を発行するに当たり収集を仕直してCD化した。調査の経過、あるいは各遺構、遺物発見時の様子や問題点、さらに安全確保の実践などを記録している。調査概要については、週刊ニュースに譲りここでは略した。

第2節 グリッド設定と基本層序

第10次調査中に第11次調査として国際線ターミナル部の発掘調査を実施した。このため今回は次数が飛んで第12次になっているが、発掘区は第10次調査区の西側に当たる。このためグリッドは第7、9次調査からの5mグリッドを踏襲し、これまで検出した遺構の広がりや各遺構との関係が分かるようにした。ただし、起点となる第7次調査区からは遠く離れたアルファベット26文字を超えるという不都合も生じた。

基本層序は、発掘区が西側隣接地であることから大きな違いではなく、各遺構面の捉え方も共通している。ただ第III面の黒褐色粘質土、第IV面の青灰色粘質土は、調査区の南半分には見られない。従って遺構も希薄になり、自然作用でできた凹地が大部分を占める。生活空間から外れ、大量の不要遺物が廃棄され、豊富な水量に守られて多様な本製品が保存されていた。図示した柱状土層図はO34グリッド北壁で、自然流路東岸に当たり、水田跡の土手が観察できる。

- 土層名**
- 表土
 - アスファルト
 - パラス
 - 褐色砂質土
 - 黄褐色粘質土
 - 明褐色砂質土
 - 暗青灰色シルト
 - 浦灰色砂質土
 - 粗沙層
 - 明褐色粘質土
 - 明褐色粘質土(第I面)
 - 灰黒色粘質土(第II面)
 - 黒褐色粘質土(第III面)
 - 青灰色粘質土(第IV面)
 - 茶褐色砂質土

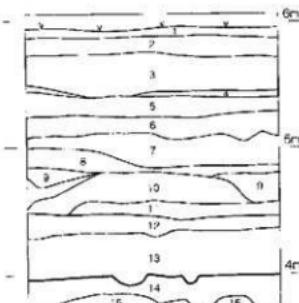
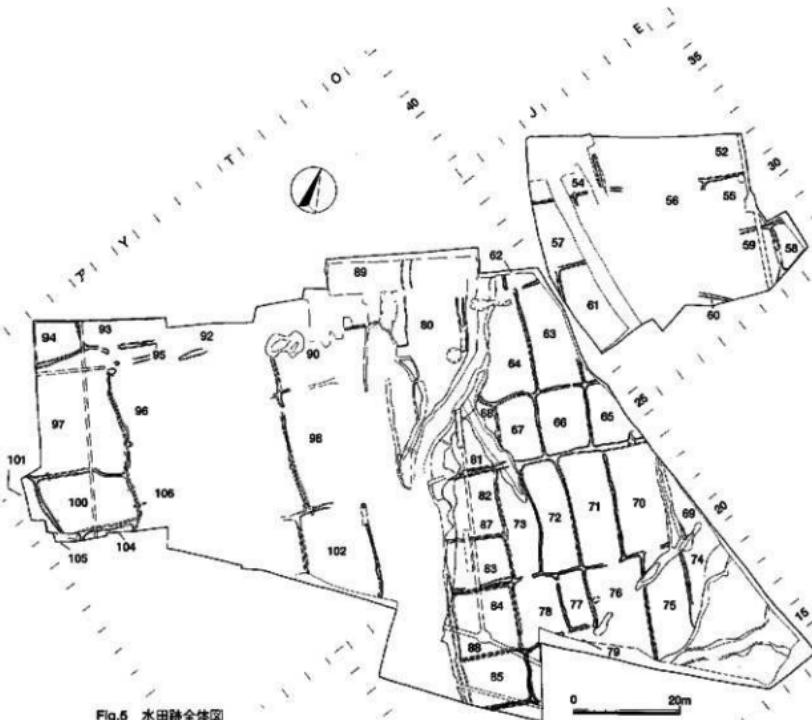


Fig.4 土層柱状図(縮尺1/40)

第3節 第I面（古代～中世）の調査

1. 水田跡（SF）

前年の第10次調査では、計18枚の水田跡を検出、確認した。厚い砂層に覆われて畦畔、水口、水戻などがよく残り、各水田の区画法や面積、水掛かりなどを知ることができ、西側に当たる第12次調査区での様子もある程度予測が立った。第10次から第13次調査の全面積は9,000m²であるが、検出した水田跡の概要、各水田跡の計測値などについては、雀居ムラのガイド・データーブック「雀居遺跡6」や第10次調査の報告書「雀居遺跡7」に掲載している通りである。第12次調査では、前年検出した畦畔からの延長を探すために第10次調査区側に数m入り込んで調査区をダブらせた。前年の経験から砂層が堆積している表上下約120cmの砂層までパワーショベルで掘り下げたところ、予想通りに東西方向の畦畔がさらに西側に延び、直交する南北方向の畦畔も現れ、第10次調査区と同じように規格性のある水田区画が施行されていることが分かった。しかし1区とした東西約18m幅の発掘区西端では自然流路が南から北に走り、一部水田が流失していたことから2区より西側では御笠川寄りとなるために水田跡確認は期待できないではと心配した。結果的には発掘区西端の4区でもSF101のように畦畔で区画された水田跡が見つかり、発掘区外にまだまだ残がっている事を確認できたのは、第12次調査の成果の一つに上げていいただろう。またSF087、SF088の下に埋まっている4枚の水田を確認したことは、水田区画の変遷、特にこの水田が自然流路に面していたこともあり、洪水に対して講じた土木的な対策を伺うことができるようになり、新しい知見を得た。



上面の水田

第12次調査区は空港整備工事に合わせて対象地を東から東西にほぼ4等分して東の1区から発掘している。下面の水田跡は第10次調査区接する1区に限って検出したもので他区では検出できなかつた。もともと存在しなかつたのか十分な検討が必要である。ここでは上面水田と言う場合、第10次、12次、13次で発掘した水田跡全体を指している。従つて水田跡の全体図は上面水田跡を合成して作図している。その全体図によると水田跡は第10次調査区と第12次調査1区が最も残りがよく、他は畦畔が途切れ、残つた畦畔も直線的ではなく微妙に蛇行している。しかし断続し、蛇行する畦畔も第10次調査区の畦畔方向であるN-58°-Wと大きなズレはない。言い方を変えるとむしろその規制、ルールに従つて水田区画を工夫したかに見える。ただこの約束事を完全に無視したのが自然流路SL01である。1区西端で見つかった砂層の落ち込みはSF087、SF088の西壁を押し流し、SF067から東にやや向きを変えて湾曲し、さらにSF080を斜めに横切り発掘区外に出ている。この流れがなかつたとすると、第10次調査区から西に向かって残っている畦畔の位置を考慮して水出区画を割り付けると、1枚の幅は等間隔にはならないものの無理なく復元が可能である。従つて流路が人工的なものではなく洪水などの予期せぬ事態で出現した、水田を流失させたものであることは疑いない。ところがSF67西側に当たる流路中には十数本の丸太杭が打ち込まれ、流れを安定、制御したような工作があり、一定期間は流れがあった可能性も考えられた。この可能性は下面水田の検出で決定的となった。

下面の水田

第III面に掘り下げ前に上面水田跡の耕作土や畦畔の土層断面の観察を行ったところ、耕作上下に薄く砂層が堆積し足跡状の落ち込みもあることから、もう1面水田が埋没している可能性が高まつた。慎重に掘り下げるとSF068、081~085の計6枚の水田跡が現れた。SF067の下にSF068とSF081、SF087の下にSF082とSF083が、SF088の下にSF084とSF085のように上面水田を南北に二分する形状である。しかもSF083~085には流路に面する西側の南北畦畔が残つておらず、しかも流路に対する土手として機能するように高く盛り上げている。この対岸の上手は2区のSF102東付近にあるはずだが残つていなかつた。ただSF080の西側畦畔は幅広くなつ

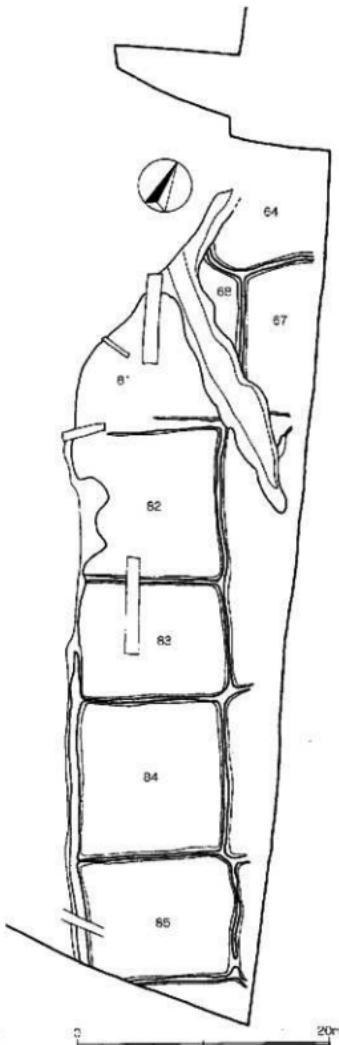


Fig.6 1区下面水田跡実測図 (縮尺1/400)



Fig.7 水田跡と流路（北西より）



Fig.8 2区水田跡（北西より）

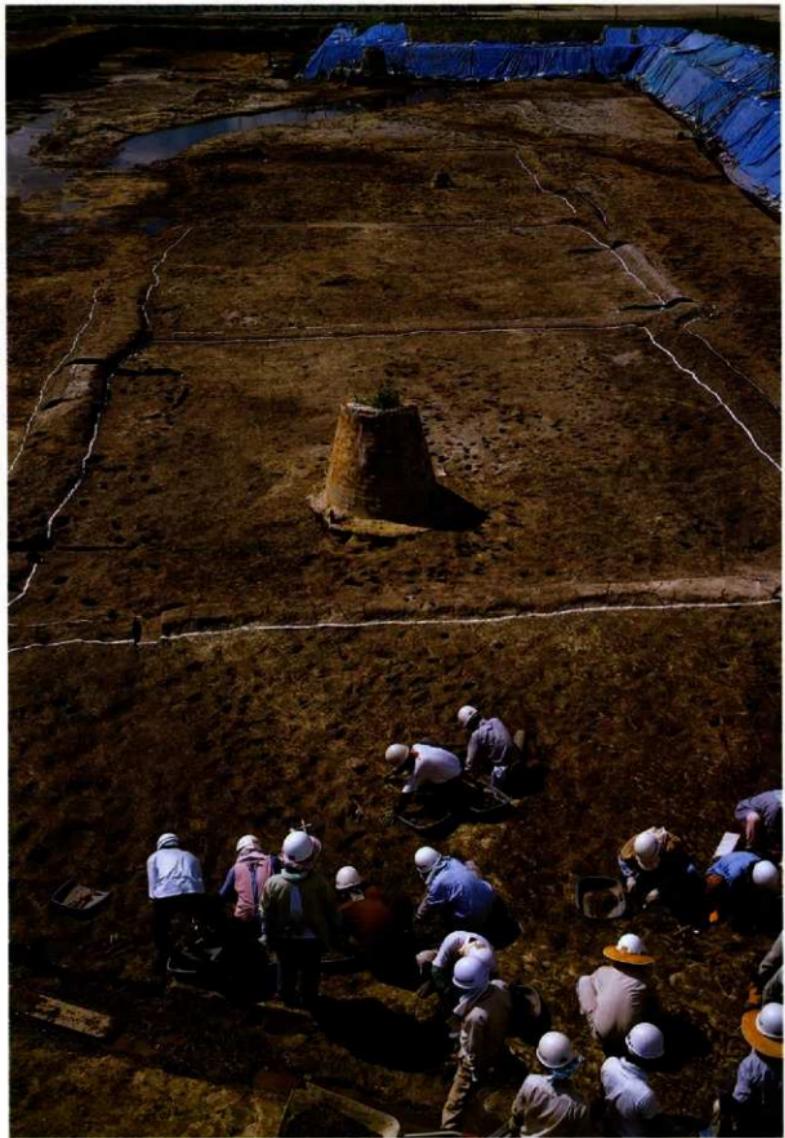


Fig.9 1区水田跡（南東より）

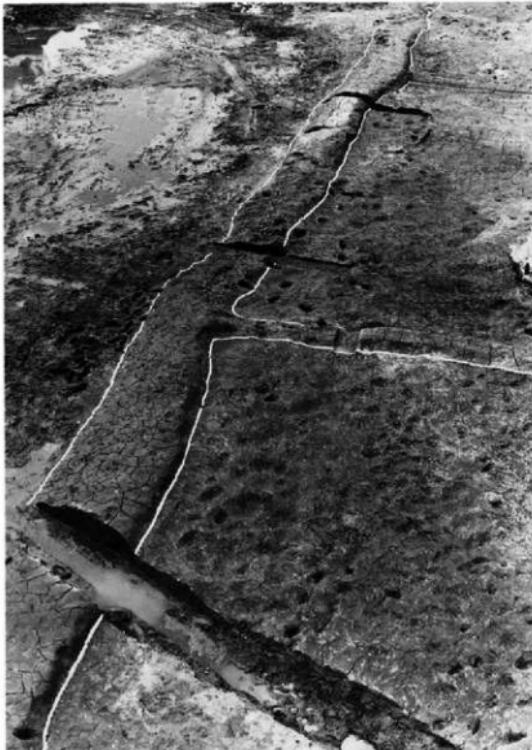


Fig.10 1区下面水田跡と土手



Fig.11 1区水田跡土手の断面

つており、対岸土手の可能性が高い。土手状の畦畔は、水田と同時に流れがあったことを如実に示しているが⁵、この流路も結局は調整不能となる。ある時の洪水がSF083、SF082の土手を流し、SF081、SF064を斜めに貫通し、結局水田を覆った大量の砂を取り除く事はできず上面の水田に作り替えるような被害となつた。

SF081～085の方形に近い水田区画(SF084は157m²)は、流路に面した特別な区画だったのだろうか。水田跡全体図をもう一度見ると南北方向の区画は長方形、方形の繰り返しであることに気が付く。なぜ長方形区画の連続でないのか疑問だったが、SF081～085のように当初は方形区画を基本としていたが、洪水や農作業の効率化など諸条件によって面積の拡大化が図られたのではないかと推測した。依然として方形区画が残っていることの説明にはなっていないが、いずれにしても洪水は防ぎようがなく、いや洪水に果敢に立ち向かった農民の姿を発掘した水田区画に読みとることができよう。



Fig.12 北武張区の畦畔断面



Fig.13 4区水田跡（北西から）

上面水田・流路の遺物 ここでは上面の水田跡、及び流路から出土した遺物について記す。水田面にはりついている遺物は少なく、ほとんどが水田面を覆う砂層から出土している。砂層も細かく見ると上部に粒子の大きい粗砂があり、その下部は灰色をしたシルト状になっている。灌水する時間があり、この間に粒子が小さい砂粒や泥が下に沈殿しシルト化したのであろう。ここから木製品や穂子などが出土するが、十分な水分が保たれ植物質の保存に役立ったようである。水田耕作土の下には古墳～弥生時代の第II、III面が続き、耕起作業で相当な遺物が混じったはずだが、水田耕作土には遺物は皆無に近い。よほどこまめに異物（遺物）を取り除いたものと思われ、まったく感心させられる。なお米軍基地時代の排水管が水田面まで達し、上部からの攪乱もあり中世以降の遺物も混入しているが、砂層以下から出土した遺物についてはできる限り取り上げ、実測、図化するように努めた。

土器・土製品 1は口径4.7cm、貝殻文を型押し成形で表現した紅皿。江戸後半の磁器なので明らかに上部から混入した遺物である。2は管状土錐。長さ4.15cm、中央の径1.75cm。表面をナデ調整している。3～6は古墳時代土師器。3は口径10.9cm、半球状で小さな丸みのある底部が付く。口縁部は細丸でおさめる。4はSL01東岸出土。11径9.5cm、11縁部は手捏ねで波打つ。5は口径12.7cm。SL01東岸出土。三角形に開き口縁部となる。底部付近は叩き。6は高壺脚部。底径10.6cm、SL01の東岸で出土。裾部に二つの小孔がある。7～11は須恵器。7は壺身。受け部は上方に上がり、内傾する体部は端部で小さく外反する。8は壺身。受け部は短く水平に近い。口縁部は中位でわずかに湾曲

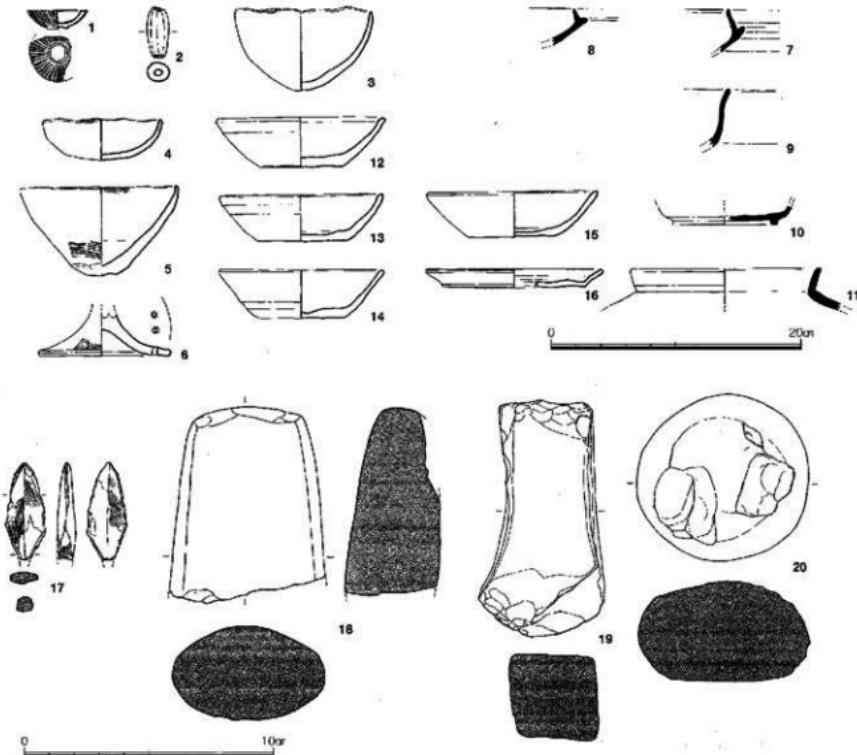


Fig.14 上面水田の遺物 (縮尺1/4・1/2)

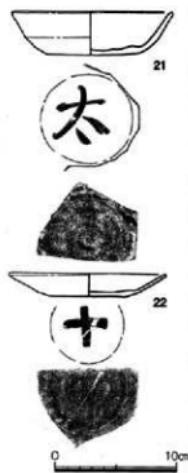


Fig. 15 上面水田の遺物 (縮尺1/4)

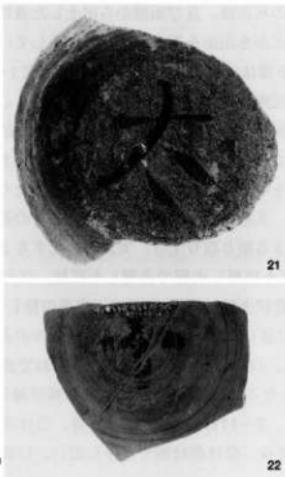


Fig. 16 上面水田の遺物

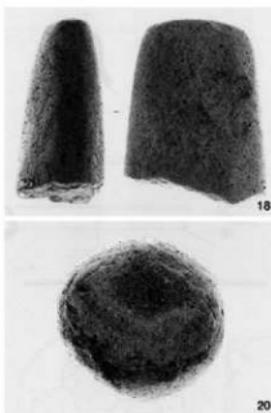


Fig. 17 上面水田の遺物

が変わる。9は4cmの破片。回転ナデ調整。10は高台付き壺身。高台径8.2cm。断面方形の高台は屈曲部より内側に貼り付けている。11は壺。口径15.2cmで口縁部は直線的に外に開く。回転横ナデ調整。12~15は土師器の壺。13は回転ヘラ切り離し。口縁端部でわずかに内湾している。口径13.1cm、底径7.2cm、器高3.7cm。体部は回転ナデ調整。内底は回転ナデの後にナデを加えている。14は回転ヘラ切りの底部から直線的に延びて口縁部を作る。口径13.2cm。SL01川底出土。15は口径13.7cm、底径7.1cm、器高3.6cm。SL01東岸出土。底部は回転ヘラ切り離し。外面に黒斑。

16は土師器の皿。口径14.2cm、底径11.4cm、器高1.5cm。SL01の川底から出土。器面はやや摩耗しており、底部はヘラ切りであろう。

石製品 図示した4点のうち19以外はSL01から出土した。17は磨製石鎌。身の鏽は鈍い。刃は斜めに切り込み断面方形の茎となる。18はSL01東岸から出土した磨製石斧。長さ7.9cm、幅6.15cm。19は砂岩を用いた砥石。断面方形の3面を研ぎ面として使用している。20は丸石の表面が一部欠けているが滑らかになっており磨り石か。

墨書き土器 21はSL01出土。土師器壺の底部に達筆で「太」を墨書きしている。口径13.2cm、底径7.7cm、器高3.55cm。

底部は回転ヘラ切り後にナデを加えている。雀居遺跡では13次の調査で数点の墨書き土器が出土しているが、「太」字例はない。福岡空港南側で発掘調査を継続している下月隈C遺跡では類例が出土している。22は口径12.7cm、器高1.9cmの土師器壺。底部の墨書きは「十」と読める。底部は回転ヘラ切り離し。体部は直線的に大きく開く。

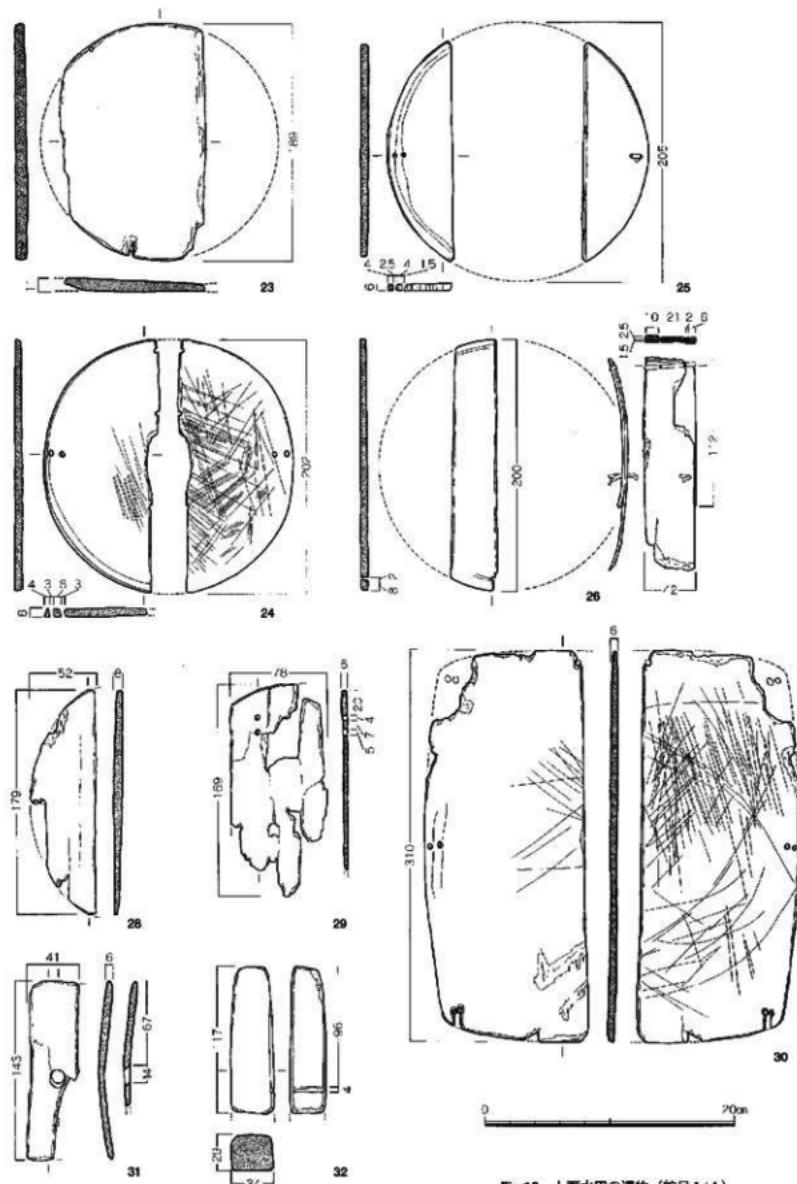


Fig.18 上面水田の遺物 (縮尺1/4)

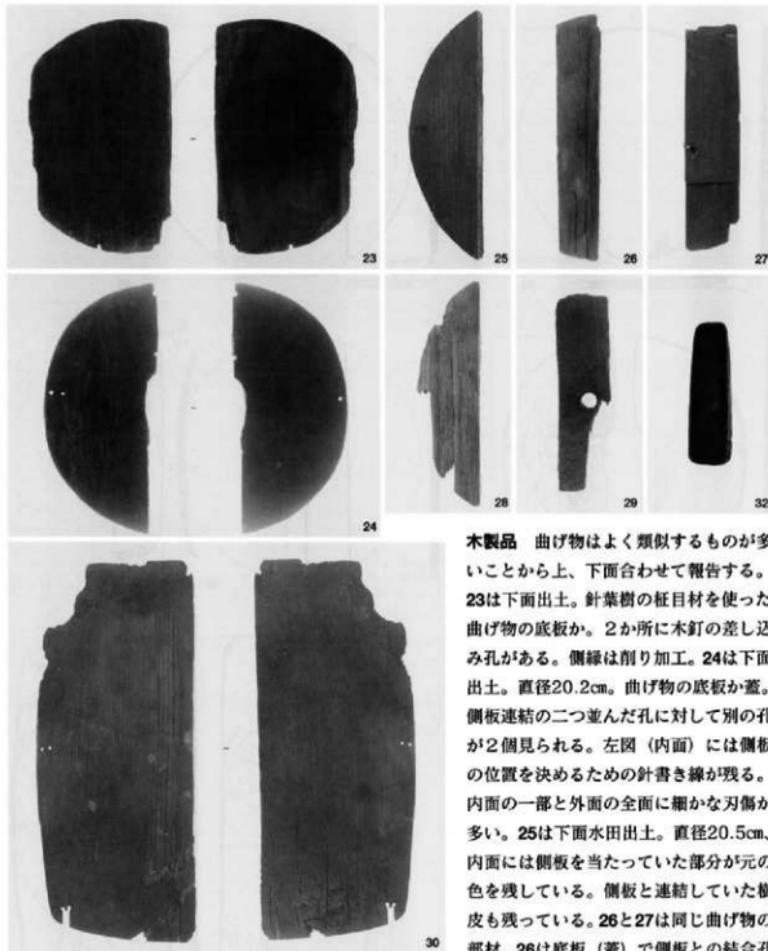


Fig.19 上面水田の遺物

部分は色調が異なる。27は側板。底板（蓋）との結合孔が一か所ある。また側板の重なり部分の結合箇所が残る。側板の結合は三段内縫じである。側板の重ねは、外側板の先端から約4cmの内側を削つて薄くする。28は曲げ物の蓋か底板。側板との縫じ孔が一箇所に2個ある。側板よりはみ出すタイプ。29は梢円形曲げ物で柾目材を使用する。腐食が激しく表面の加工痕は不明。30は方形曲げ物で針葉樹の柾目材使用。側板が当たった部分が元の木肌色を残していることから、内外面の判別ができる。内外面とも刃傷がおびただしい。特に外面は俎板のように使用した結果であろう。

木製品 曲げ物はよく類似するものが多いことから上、下面合わせて報告する。
23は下面出土。針葉樹の柾目材を使った曲げ物の底板か。2か所に木釘の差し込み孔がある。側縁は削り加工。24は下面出土。直径20.2cm。曲げ物の底板か蓋。側板連結の二つ並んだ孔に対して別の孔が2個見られる。左図（内面）には側板の位置を決めるための針書き線が残る。内面の一部と外面の全面に細かな刃傷が多い。25は下面水田出土。直径20.5cm、内面には側板を当たっていた部分が元の色を残している。側板と連結していた樹皮も残っている。26と27は同じ曲げ物の部材。26は底板（蓋）で側板との結合孔が一か所見られる。側板が当たっていた

31は下面水田出土。板状で縦に湾曲している。中央の孔は節の抜け落ちとも考えられる。用途不明。
 32は下面水田出土。針葉樹の桿目材。方柱形の木製品。表面は滑らかに加工しており、1面に浅い溝を入れている。
 33はSL01西側の黒色粘質土より出土。針葉樹の板目材。幅約1cmの角棒状で、径1cm程の孔が2か所にある孔は貫通していない。
 34は8字形の薄い板材で二つの孔も描っている。丁寧な削り加工だが図裏面は剥離している。用途不明。組合せの部材か。
 35は木筒。ただし墨書きはない。
 4区の水田面出土。針葉樹の柾目材、文字がないのは削られたか。頭部はやや角張った楕円形に近い。括れ部は上下から台形状に削り込まれている。紐で結んだ痕跡はない。
 36は板目材を薄くした柾甲。両端を山形に尖らしている。頭部に横8字形の墨書きあり。下端は幅広くなり黒色に変

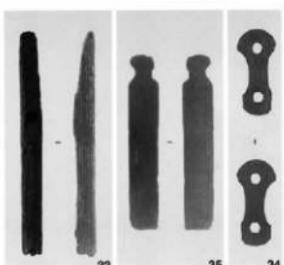


Fig.20 上面水田の遺物

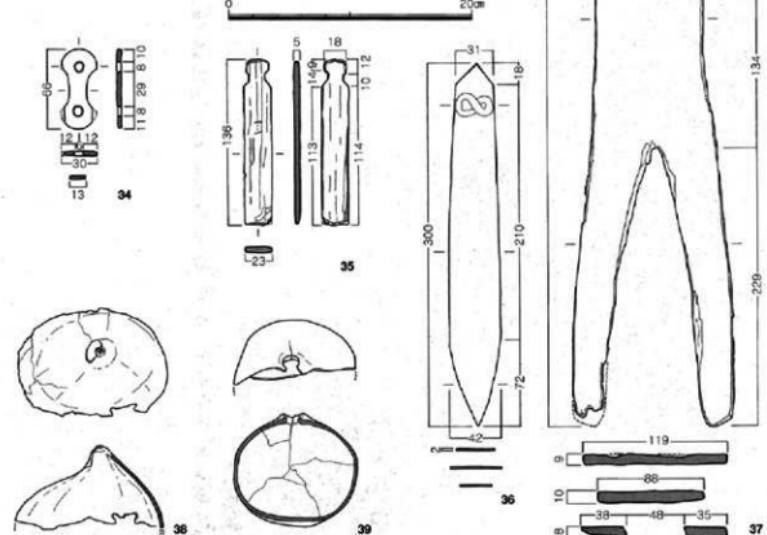
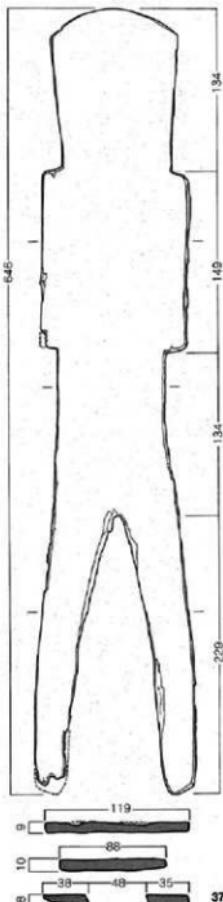
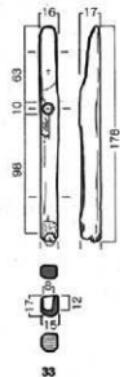


Fig.21 上面水田の遺物（縮尺1/4）

色している。37はX22グリッド、SF084上面出土。2本の脚が最初に出て二又鋤と判断したが、まったく思いもしなかった人形であった。全長65.0cmで簡略だが頭部、胸部、腹部、脚部の表現がバランスよく表現されている。また側面の加工も特に丁寧ではないが、そつなく仕上げている。福岡市内での人形は、博多区下月隈C遺跡、博多区高畠遺跡、西区吉武遺跡で出土しているが、その中でも最も大型である。その形状は奈良県平城京跡東三坊大路側溝出土の人形(112.7cm)と相似形に近い。公的な祭祀に使われた人形が、なぜ水田地帯と思っている雀居遺跡から出土するのか。先の木簡や菅草と合わせて興味深い。38、39は下面水田出土。木製品ではなく、ヒョウタンである。38は上半部。39は縦に半分が残っている。



Fig.22 足跡



Fig.23 人形の出土状況

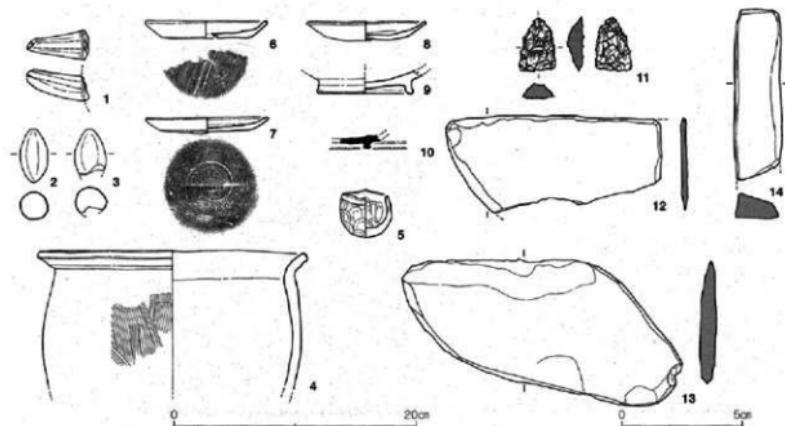


Fig. 24 下面水田の遺物 (縮尺1/2・1/4)

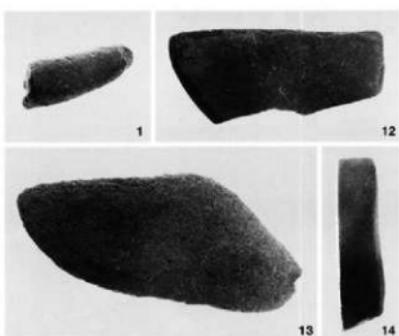


Fig. 25 下面水田の遺物

下面水田の遺物 下面水田の遺物として10点の土器と3点の石器を実測、図示した。

土器・土製品 1は口付で、体部との接合部で離脱している。白褐色で下部には黒斑がある。

2は楕円形の投弾。長さ4.35cm、中央部の断面は正円に近く最大幅2.15cm。3も投弾。一端が欠けている。断面はややいびつな円形。最大幅2.6cm、色調は黒褐色。4は口径22.1cmの甌。外面は継ハケ目調整。胎土に3mm大の砂粒を多めに含む。5は手捏ねの土器。内外面に指頭圧痕がそのまま残る。6の口径10.0cm、底径7.35cmの小皿。底部は回転ヘラ切り離し。板目圧痕7は土師器小皿。口径10.1cm。外底は回転ヘラ

切り離し、板目圧痕が残る。8は口径9.75cmの小皿。内底は回転ナデの後にナデを加える。口縁端部は丸く肥厚している。9は黒色土器、高台付椀、高台径8.0cm。10は須恵器の高台付甌。高台は屈曲部より内側に貼り付き、断面は台形状をしている。

石製品 11は黒曜石製の打製石鏃。基部は水平な無茎式。12は外湾刃の石包丁で薄手の作りとなっている。破片のため粗通しの小孔は見られない。13は図右端に両面穿孔の小孔がわずかに残っており、石包丁の再加工品か。用途不明。

第4節 第II面（弥生時代後期～古墳時代前期）の調査

第10次調査では第I面の次層である黒色粘質土でややとまどうことが多かった。まず埋め土との識別が難しく遺構検出に時間を要し、また古墳時代と弥生時代両遺構が同一レベルで現れ層位的な発掘が通用しないかと思われた。困難だった遺構検出も日を追って順調に進むようになり、また遺構も細かく観察を続けたことによって層位的に遺構が重なっていることが分かつてきた。このような経験を活かそうと第12次調査に望んだ。しかし第12次調査区では黒色粘質土の堆積が薄く、かつ青灰色粘質土の占める範囲も発掘区の1/2以下しかなく、新たな観察力が必要となった。発掘作業員の習熟もあって第II面の遺構として土器窪、竪穴住居跡、凹地、土礫、方形周溝を検出できた。



Fig.26 第II面検出作業



Fig.27 第II面検出作業

1. 遺構検出面の出土遺物

第II面の遺構を説明する前に第II面の遺構検出作業で出土した遺物をここでまとめる。これらはどの遺構にも属さず遺構から離れたことを意味するが、実測、図示した多くは北拡張区と呼んだR35グリッドの土器窯SJ01の上部で出土している。1の剖面破片はV字形に突帯が残存している。破片で器形不明。3の甌は、ハケ目整形後に口縁部～肩部への回転的横ナテや肩部の櫛描波状文の特徴から布留式系である。凹凸が微妙で直線的な口縁部形態にナテ肩形状と形態的特徴は比惠・那珂遺跡的である。4の二重口縁壺は、内面などに接合痕が明確に残り、内外面調整が規則的なハケ目仕上げなどの特徴から伝統的V様式系である。6は系統は分からぬ低脚器台（鉢？）の脚部だろうか。2号凹地にその合体形らしき土器がある。

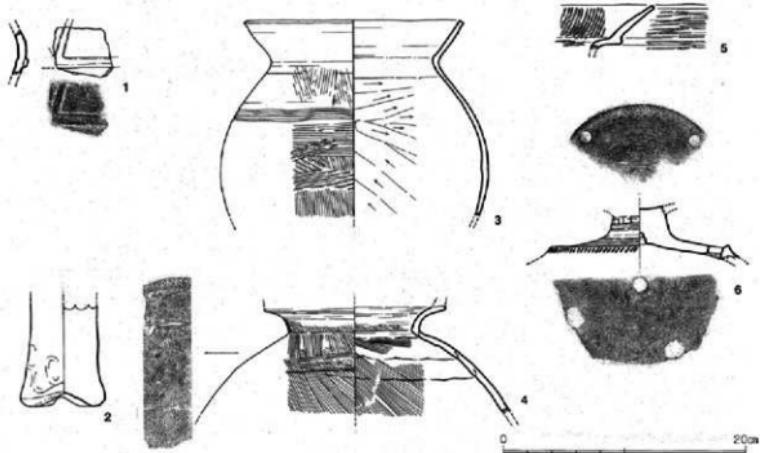


Fig.28 第II面遺構検出面の遺物（縮尺1/4）



Fig.29 第II面遺構検出面の遺物

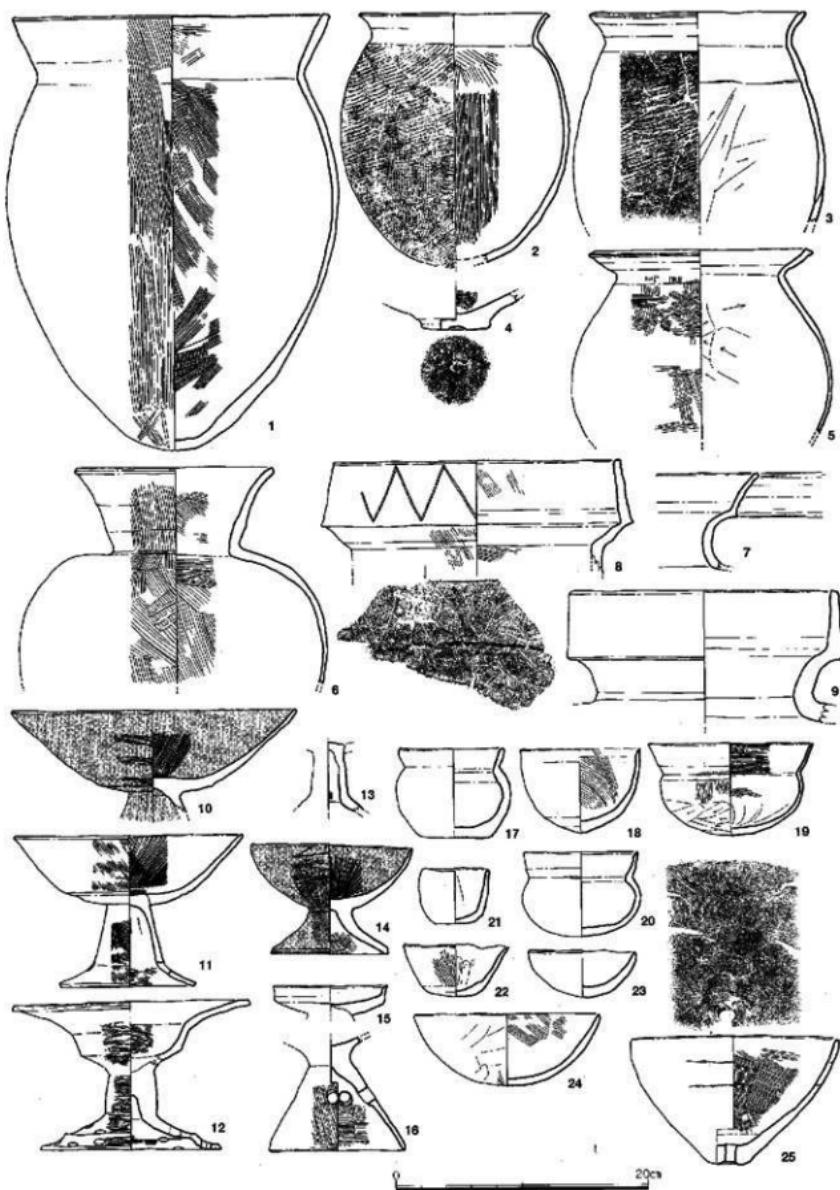


Fig.30 第II面透構検出面の遺物 (縮尺1/4)

1の甕は、頸部の締まりが弱くなだらかで、長胴。内外面はストロークの長い不規則なハケ目という在地系（A系）の典型的な特徴をもつ。胴部外面下半は、稻葉の茎を束ねたような道具で雜な巻ハケ目を施し、底部内面には部分的に指頭圧痕がある。A系甕の主要属性の一つである胴部形態は、1のように肩部に重心があるものから中位重心、さらに下ぶくれ胴と変化していく傾向がある。2、3は伝統的V様式系（B系）甕で、2は外面調整に右上がりの太筋タタキが施されており、3ではさらに内面調整にケズリも部分的ながら採用している。4も、突出した上げ底の平底で、底部内面にすだれ状ハケ目調整が施され、B系の甕あるいは壺の底部である。よって上げ底部分は輪台充填技法による成形だろう。5の甕は、外面調整はタタキ痕が残らず雑ではあるがハケ目で仕上げており、内面調整はヘラケズリ、口縁端部は面取りなどの特徴から布留式系（D系）である。やや内窓する口縁部形態やナデ肩状の肩部形態から、雀居出土の他のD系甕同様に比惠・那珂・博多遺跡的である。特に肩部のナデ肩傾向は顕著である。6の壺は、胴部外面は右上がりの太筋タタキの後にハケ目を施すというB系的なものだが、ハケ目は内外面とも不規則である。ただその器形からB系とした。7はその形狀から山陰系の二重口縁壺である。本場の山陰地域では二重口縁壺と同様に二重口縁壺が多數見られるのに、北部九州地域ではこの山陰系二重口縁壺が多く見られる。また山陰系上器はII A期末から北部九州地域で出現し始める。7については検出面出土のために時期は分からぬが、この二重口縁壺がII B、II C期に急増する傾向にあり、それは西新町遺跡で顕著である（庄内・布留式併行期の山陰で見られる器種が全て一定量存在するのは西新町遺跡のみ。ただし山陰系甕が多くを占めるように器種が選択的である）。このことはII A期末に出現する西新町遺跡壺とともにいえるD系甕^{註1}とも関連があるのだろうか。この山陰系器種はIII A期になって激減する。8、9の二重口縁壺は両方とも粗い作りで、器壁が厚い。製作技法は分からぬ（A系か）。10の高环坏部は、B系高环に比べ精製で、坏部上半がB系高环に比べ直線的に伸び、器壁が薄く、坏底部はほぼ水平で口径に対して短く、环部上半と下半の屈曲部の後は目立たず、坏部調整も内外ともに細密なミガキが施され、脚柱部は中空であるなどの諸特徴から明らかに庄内式系（C系）といえる。丹塗りか。11の高环は、胎上が精良で、坏部は全体的に丸みを持ち、坏部の上下半の屈曲部の後に浅い沈線状のくぼみが廻り、脚柱部は太くて比較的短く中膨らみで、坏部と脚部の接合は脚頂部凸面付加法である、などの特徴からD系である。ただD系高环は内外面とも細密な横ミガキ仕上げであることが多いが、11はナデ、横ナデ仕上げである。12は珍しい形をした有段高环で、外面の細密ミガキや多くの穿孔から特別な性格が感じられる上器だが、技術系統的には器壁が厚く、屈曲がはっきりしており、坏部も大きく外反し、坏部と脚部の接合が脚頂部凹面付加法であることからB系ではないか。13の高环脚部は、小型で、坏部や脚部は欠けているが、残存する坏底部や接合面から坏部と脚部の接合は脚頂部凸面付加法である。14の低脚高环は、脚部内面以外は丹塗りか。坏部の内外面には暗文風のミガキが施されている。15は小型器台の受部である。脚部との接合面が明瞭に残り、そこから脚頂部凸面付加法だと分かる。この受部形態は久住氏のII類にあたり、だいたいII期に見られる。16も小型器台で、調整は外面が縱方向ミガキ、内面はハケ目である。水漉胎土からなる精製器種である一般的な小型器台は多くは細密な水平方向のミガキ仕上げであるので、形態的にも技法的にも違うこの小型器台は模倣品であろうか。18の小型鉢は、口縁端部は先細り状態で、内面調整は規則的なすだれ状螺旋ハケ目であるなどB系器種の特徴が見られる。底部が尖底ぎみの丸底であるのもそのためか。19、20は小型丸底壺で、19は久住II b類、重藤壺4式で西新町4式前半（II B～II C期相当）、20は久住I c類、重藤壺3式で西新町3式後半（II A～II B期相当）となる。25の有孔鉢は、粘土紐の接合痕が残り、内面調整にはすだれ状螺旋ハケ目が見られるなどB系器種といえる。穿孔方向は外から内へ。

註1 久住1999の言うD系甕の形態的特徴については10次SE01で紹介している。

2. 土器窪 (SJ)

第1号土器窪SJ01 第7、9次調査では、土器窪が集落の周辺に位置していることから、集落が営まれた微高地の面積、生活空間の範囲が推測できた。第10次調査でも南西から北東方向に延びる土器窪があり、第7、9次調査区と対峙するものと判断された。第12次調査区は、この土器窪の延長部の反対側であることから土器窪検出期待はしていなかった。ところが空港管理事務所の建設が発掘区の北側に急に決まり、拡張して調査を行った北拡張区で土器窪が現れた。R-S34-35グリッドにあり、4.5m×3.0mの範囲に土器が集中している。さらに発掘区外に延びていく可能性はあるが、南には延びていない。明らかに斜面という場所ではないが、西側に隣接して第1号凹地(SW01)があり、微高地から低湿地への移行部に当たっているとも言える。もちろん土器窪のすべてが微高地の周辺部に形成されるとは思えないが、SJ01を第7、9、10次調査区の土器窪と同じ意味を考えておきたい。

出土遺物 土器窪の範囲が狭いということもあって出土遺物の総量はパンコンテナ18箱分である。このうち土器34点と石鐵1点の計35点を実測、図示した。石鐵を除くと他の時代の遺物混入はない。



Fig.31 SJ01検出作業

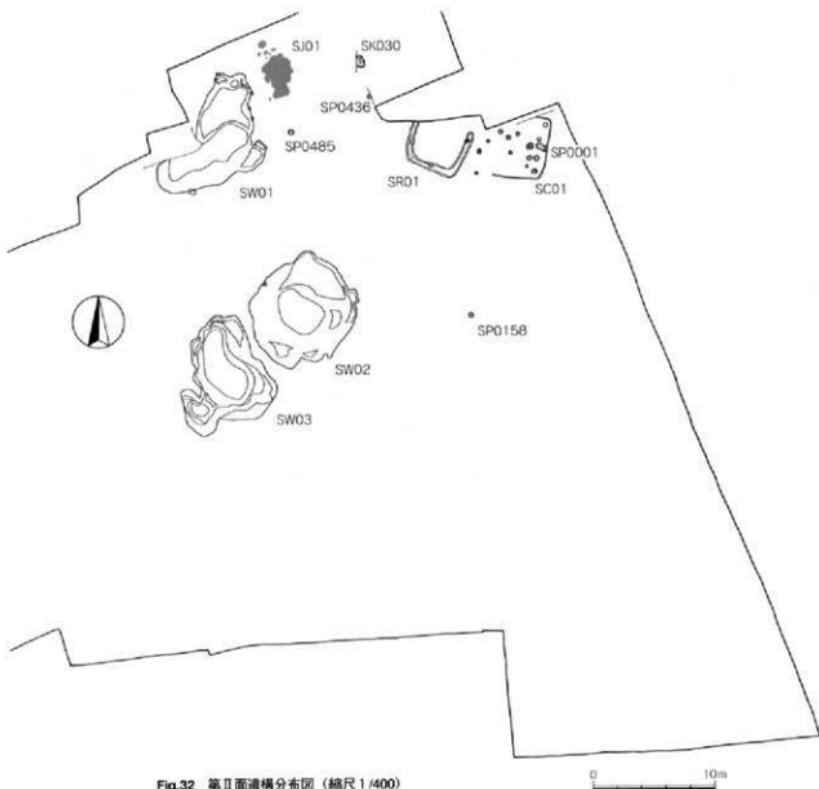


Fig.32 第Ⅱ面窯構分布図（縮尺1/400）

0 10m



Fig.33 SJ01の実測作業

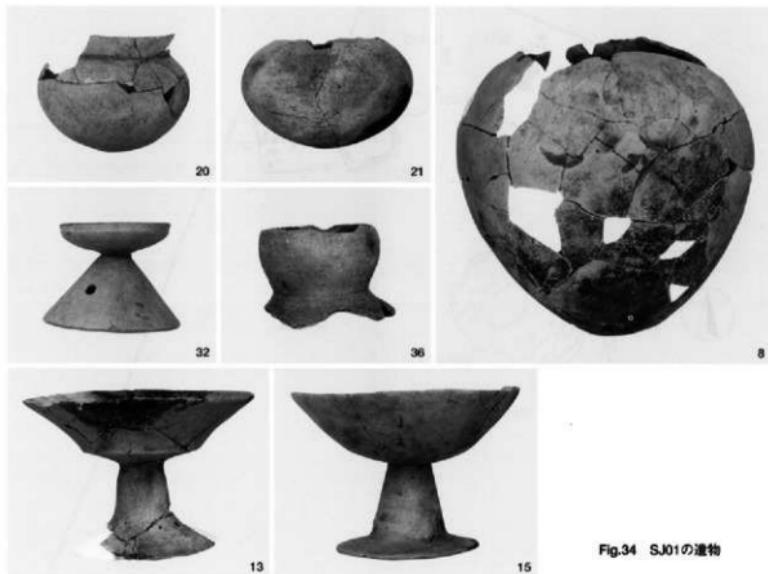


Fig.34 SJ01の遺物

1の打製石器の他は全て古式土器である。この北摂張区土器窯遺構は、第10次調査土器窯とは異なり二つの面に分かれていかないが、そのことは土器に大きな時期差が見られないことからも言える。そのことを以下に述べる出土土器から見ていきたい。

2の甕は、外面がハケ目仕上げで内面がケズリ仕上げだが、底部が分厚く底面に平底の名残りがあり、器壁も一般的な庄内式系（C系）、布留式系（D系）の甕に比べて厚く、口縁部も端部に丸みがあり外反気味であるなどの伝統的V様式系（B系）的な特徴から、C、D系の影響を受けたB系甕といえる。3の甕は、外面が左上がりの細筋タキ成形後に胴部下半に縦ハケ目を施し、内面が胴部下半と上半の二段階ケズリ、頸部の屈曲も明瞭なことからC系である。ただ器壁がやや厚く、口縁部は端部のつまみ上げが顕著でなく丸くおさめた感じである。4～11はD系甕である。ただその中にも器壁や作り方に精粗の違いはあるが。例えば、外面はどれもハケ目仕上げで、胴部上半は10以外は縱方向ハケ目の上に横方向ハケ目を施しており、さらに山陰系の特徴とされるヘラ描直線文、櫛描波状文や吉備系土器によく見られる列点文を肩部に施すものもある。内面は胴部上半のケズリ方向の右左はあるか同じ調整であり、口縁部～肩部にかけては回転的横ナデが施され（6、9、11は口縁部のみ）、それによって頸部の屈曲がなだらかである。などこれらの甕はD系技法の特徴を備えている。山陰系の特徴とされるヘラ描直線文、櫛描波状文のうち、櫛状波状文の6、8や、10は肩部が張っており、雀居遺跡出土D系甕の主流である「なで肩」状甕とは違う。このような倒卵形あるいは球形の胴部形態は西新町遺跡で主流のタイプ³¹であり、8なども一応そのようなD系甕としたが、山陰系（甕）であってもおかしくはない。この西新町遺跡型ともいえるD系甕は、西新町、藤崎遺跡群と比恵・那珂遺跡群などの他の異なる様相をみせる拠点集落とにおける山陰地域の関わり方の違いを示すものと言える。口縁部の形状はだいたい直線的だが、口縁端面には外側に斜めに外傾するものと外側に引き出

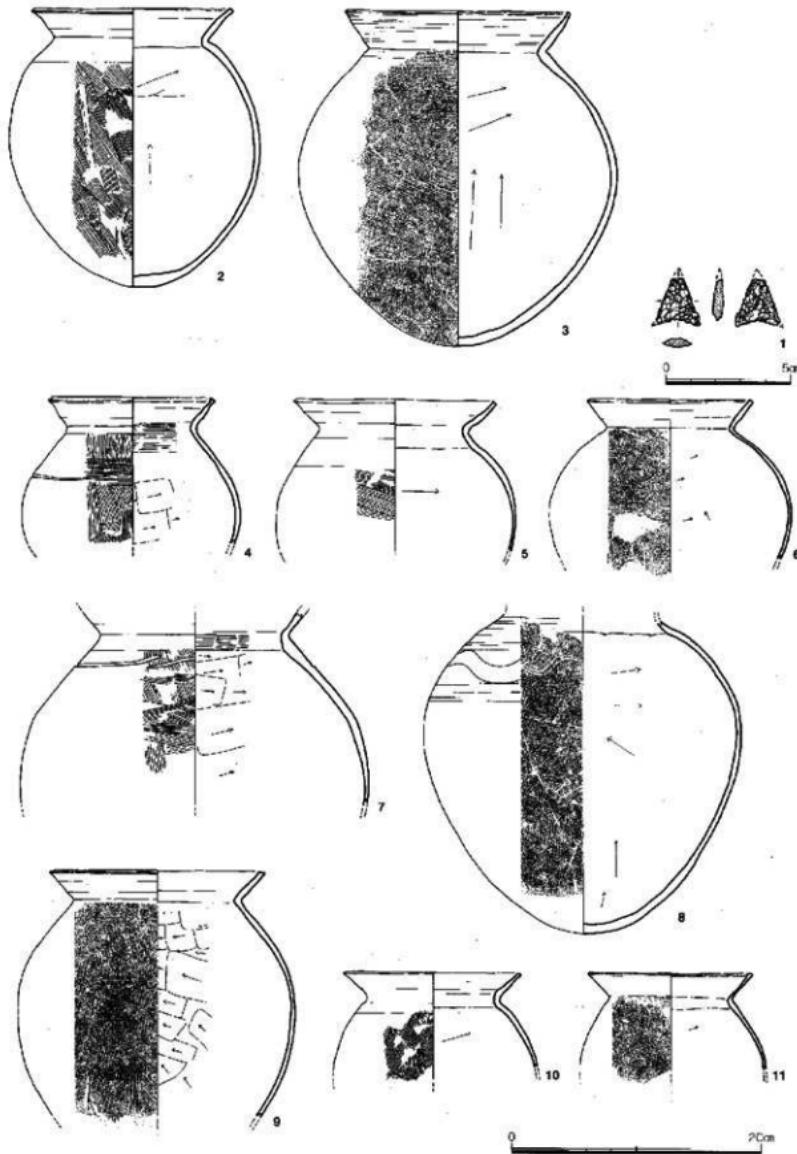


Fig.35 SJ01の遺物 (縮尺1/4・1/2)

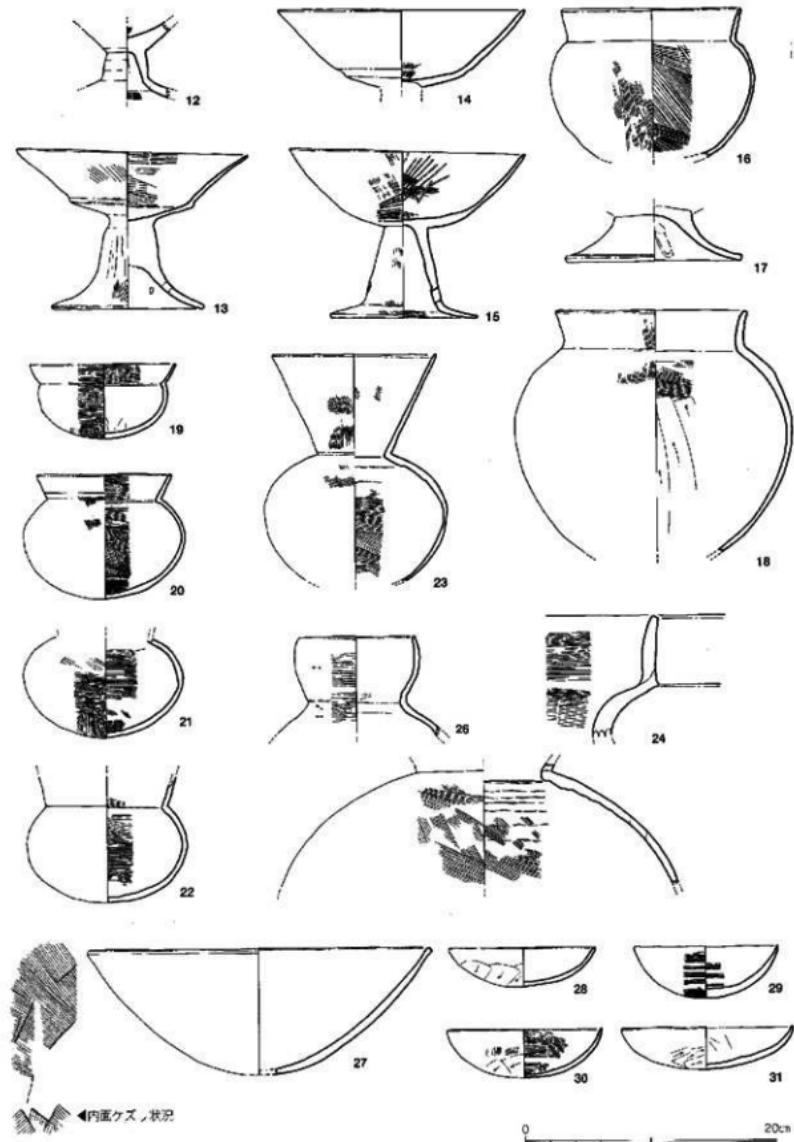


Fig.36 SJ01の遺物 (縮尺1/4)

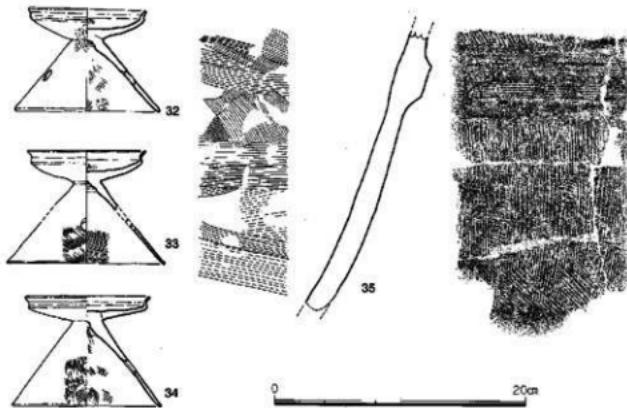


Fig.37 SJ01の遺物（縮尺1/4）

したようにほぼ水平になるものがある。これらの甕はどれも全体の形が不明で、時期としてはⅡ期の範疇となるだろう。12の高坏脚部は、脚柱部が短く、比較的大く、中ぶくらみの「エンタシス」状を呈する所からD系高坏とも考えられたが、しかしC、D系高坏は坏底部がほぼ水平という特徴があり、またこの12は器壁が厚く、調整もほとんどナデ仕上げであることから、D系に影響を受けたあるいは模倣したB系高坏と考えた。13の高坏は、脚柱部が中火、坏部の上半と下半の境が明瞭で、坏部上半は外反しその端部は先細り、であるなどの特徴からB系。14の高坏は、坏部が直線的で器壁が薄く、坏と脚の接合は脚頂部片面加法でありC系となる。坏部下半に丸みを持ち、枝部に微妙な凹みが埋るタイプである。15はC系に比べ坏部が丸みを持ち、坏底部が広くなり、脚柱部も屈曲がきつく低くなり、径が広がって脚柱部がハ字形に近付く、などの特徴からD系高坏である。ただ外面調整は細密な横ミガキ仕上げが一般的なのに対して、ハケ目痕が残る粗いミガキである。19の小型丸底甕は、久住Ⅱa類、重輪鉢1式で西新町3式後半（ⅡA～ⅡB期相当）となり、外面には細密な横ミガキが施される丁寧な作りであるが、対して20～22の小型丸底甕はハケ目仕上げや部分的なミガキという雑な作りであり、時期比定の根拠となり得るかどうか。26はその形状から東海系の短頸ヒサゴ壺である。この形式は東海地方では基本的には廻間2式期（だいたいⅠB～ⅡA期相当）特有のものであり、この12次上器溜出土器の時期幅（ⅡA～ⅡB期くらい）とも合う。しかし胎土や形態的にみて北部九州產と思われる。東海地方のヒサゴ壺の外面調整は縱方向ミガキが基本であるが⁵、26はハケ目後に横方向ミガキ仕上げである。また口頭部も連弧文や横線文などの文様を施し、端部周辺は微妙に外湾するものが一般的であるが、そのようなものも見られない。ヒサゴ壺は他には那剣川町松木遺跡140街区1号住居（ⅡA期の前後）で出土している。これは全体的に丸みを持つ下ぶくれ胴で、口頭部はよく締まり内湾している。胴部外面と内面下位はハケ目を施し、上位は工具ナデ調整である。小型器台は受部も脚部も明瞭な外反形や壠広がり形へ変化していくが、32～34のうち33、34が新しい要素を持っており、時期的にも他の共伴土器より新しい傾向（久住Ⅱ期後半）がある。

まず出土土器の製作技術系統を見ると、外米色が強く、中でもC、D系器種が目立ち、珍しい東海系上器まで出土している。逆にA系器種はほとんど見られない。土器溜群の在り方や時期幅など第10、13次調査との比較や関連などは第13次調査土器溜で記述している。

3. 穫穴住居跡 (SC)

これまで古墳時代の竪穴住居跡は、第7、9次調査で13軒発掘しているのに対し、西に隣接する第10次調査ではわずかに2軒にとどまっていた。第10次調査で検出した土器窓は第7、9次調査の土器窓に劣らない遺物量であり、井戸や土壙などの生活遺構も確かに存在することから、第12次調査区こそ集落の中心地に当たり、竪穴住居跡の検出が増加するものと予想、期待をした。しかし検出したのは1軒のみに終わり、集落の中心はさらに北側に展開しているようで、第13次調査に引き継ぐことになった。

第1号竪穴住居跡SC01 Q28グリッドにあり、黒色粘質土に掘り込まれている。その北西コーナー



Fig.38 SC01検出作業

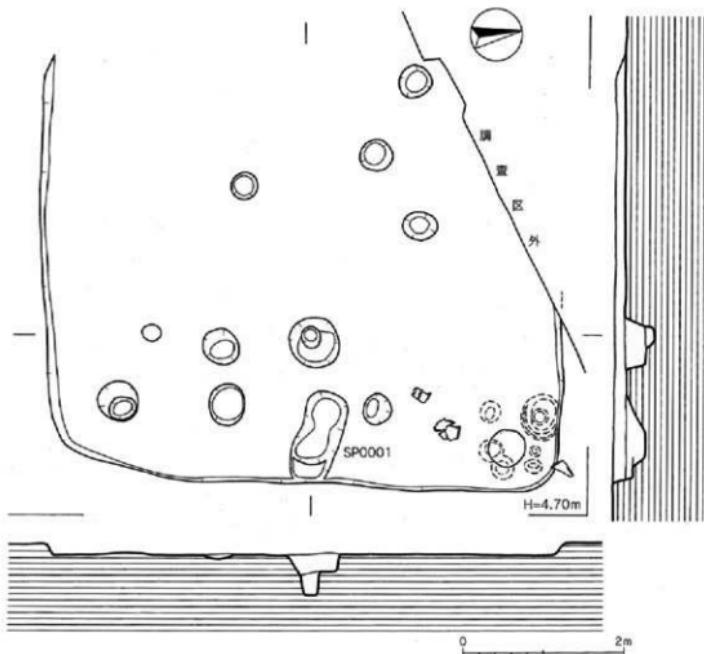


Fig.39 SC01実測図 (縮尺1/60)



Fig.40 SC01全景（北より）

が第10次調査区に入っているが、第10次調査では壁は確認できていない。また西壁はほとんど残っていないし、弥生時代の土壌やピットと重なっていることもあるって保存状況は悪い。残っている東、南壁から規模を復元すると、東壁590cm、南壁490cmの隅丸長方形プランで床面積は約28.9m²。全体図でわかるように第10次調査のSC02とは5mも離れていない。床面には大小10数個のピットがあるが、主柱穴は不明。壁溝ではなく、東壁に接するSP0001は屋内土壙と考えた。

出土遺物 埋め土は数cmしかなく、弥生時代の土壙を切っていることもあってむしろ弥生時代の遺物が多い。

土器・土製品 1~4は弥生時代中期の壺。1は口径32.0cmの広口壺。頸部は直線的に開き、鋤先状の口縁部が水平に付く。口縁端部は肥厚し、口唇状の断面となる。頸部内面は横ミガキ。2、3は壺の小さなL字形口縁。4は径11.6cmの底部は外縁を残しわずかに凹む。外面は縦のハケ目の後に縦のミガキ。内面はナデの後にまばらにミガキを加える。5は投弾。長さ3.85cmの梢円形で一方が尖り気味。7~13は古式土解器である。楕は型式的には変化が鈍いが、技術系統では8のように、すだれ状のらせんハケ目が特徴であるB系技法が確認できる。9は小型丸底器種が壺と鉢に分化し始める頃のものである。11は形状から小型丸底鉢の破片だろうが、破損や調整磨滅のため時期、分類比定はできない。12の底部は小さいながらも明瞭な平底で、外表面はミガキで内面は工具ナデという調整方法からB系だろう。底部外面に大小の圧痕が残り、また内外面がクレーター状に弾け飛んでいる。13の高壺は、壺部上半と下半の明瞭な屈曲に上半部が大きく外反し、調整も若干ミガキが見られるかいケ目がはっきりと残っておりB系。



Fig.41 SC01の遺物

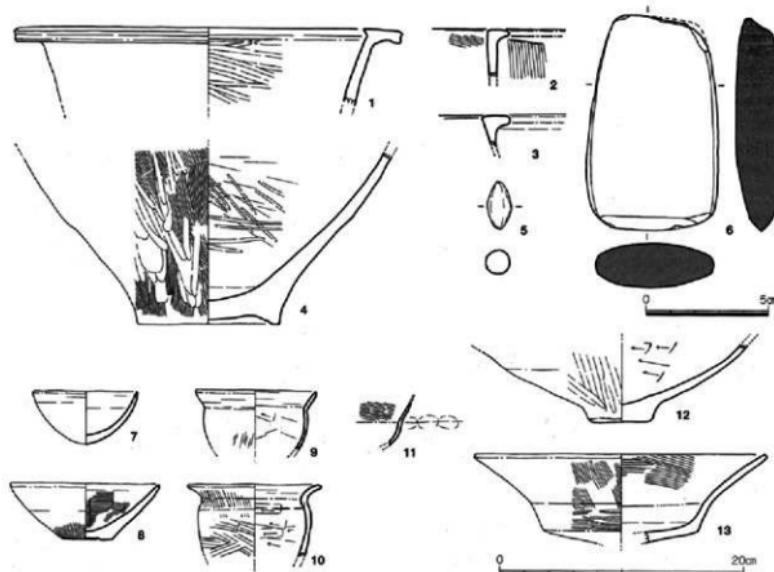


Fig.42 SC01の遺物 (縮尺1/4・1/2)

14の楕は内外面ともハケ目調整である。特に内面は規則的で底はすだれ状螺旋ハケ目である。15は丹塗磨研高环で全面付着しているが、外面の一部に焼きムラがあり二次焼成によるものか。

石製品 6は頭部が折れており、現在長8.8cm、刃部幅5.45cmの磨製石斧。身の断面は長方形に近く、厚さは1.8cmしかない。

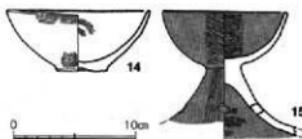


Fig.43 SP0001の遺物 (縮尺1/4)

4. 土壙 (SK)、ピット (SP)

土壙の遺構名を与えた落ち込みは多いが、古墳時代から弥生時代後期の遺物を出土する土壙は少なく、ここではピットも合わせて取り上げる。

第30号土壙SK030 Q34グリッドで検出。一部が丸部で不明だが隅丸方形のプランだったのだろう。深さは27cmあり、遺物は埋め土の上部から出土している。



Fig.44 SP0001の遺物の出土状況

1、2は古式土師器である。1の甕は、胴上半外面の横ハケや口縁～頸部の回転的な横ナデ、なだらかな頸部の屈曲、内面ケズリなど布留式系技法である。肩部、口縁部の形状は他の雀居出土甕と同様。2の小型丸底甕は、久住Ⅰc類、重藤甕3式で西新町3式後半（ⅡA～ⅡB期相当）となる。1もⅡB期か。

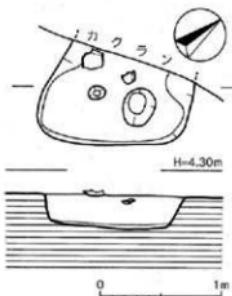


Fig.45 SK030実測図 (縮尺1/40)

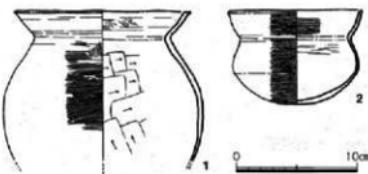


Fig.46 SK030の遺物 (縮尺1/4)



Fig.48 作業風景

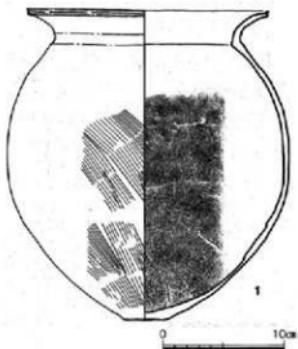


Fig.47 SP0158の遺物 (縮尺1/4)

第158号ピットSP0158 1の古式土師器甕は表面が磨滅しているものの、外面は粗いが規則的なハケ目調整仕上げ、内面は胴下半がすだれ状螺旋ハケ目でさらにケズリ、ナデを一部に施す、底部は丸みのある小平底、口縁部は外反し、端部はつまみ上げたような形状、一単位が狭い粘土紐接合の痕跡などの特徴が観察でき明らかにB系である。1の外面タタキはハケ目によって残らないが、玄界灘沿岸ではこのように外面タタキがしだいに減少していく。しかし他地域では比較的多く残るようだ。

第485号ピットSP0485 S35グリッドに位置する。直径55cmの平面プラン。木製鋤が出土した。雀居遺跡の新しい知見の一つとして、ごく普通の土壌・ピットから木製品が出土することで、その状況から祭的な行為が推測されることである。本例は木製品自体にその痕跡が残っているわけではなく、また出土状況も特記することはないが、類例の一つに加えた。

1は身と柄を一本作りにした鋤。各部の寸法は図の通りである。柄は断面円形ではなく長方形に近い。身部の肩は柄に対し直角ではなくやや下がっており、両肩で角度が異なる。身部の形状はU字形で刃部付近には両面とも大きめの削り痕が残っている。柄から身部にかけて削りを加え平坦面を作っている図下の方を表とした。

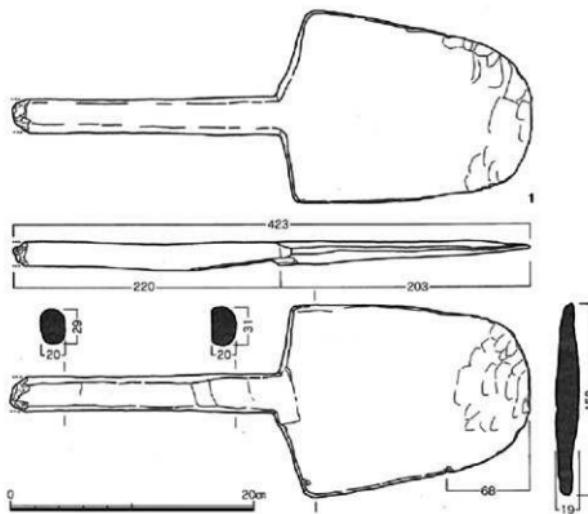


Fig.49 SP0485の遺物 (縮尺1/4)

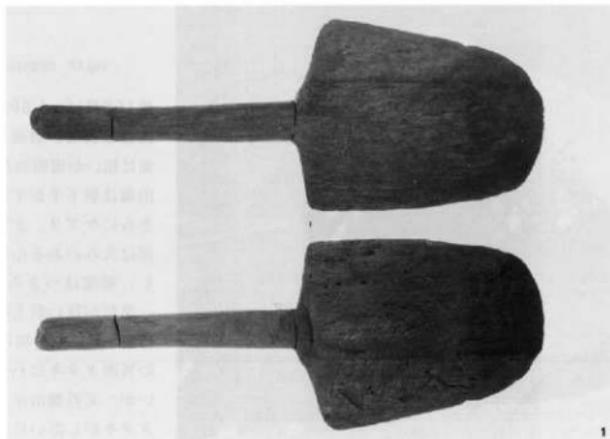


Fig.50 SP0485の遺物

第436号ピットSP0436 R34グリッドに位置する。直径50cmの円形平面プランで深さは29cm。遺物は木製品だけで、数片を縦に束ねたような状況で出土し、取り上げ後接合して木製品であることに気が付いた。

2はナスビ形の曲柄叉鍬。柄と組み合わせる頭部は断面台形状に削り面取りしている。ヘタ状の突起部は片側がやや欠けているが左右対称の加工である。側面にも削り痕が顕著。身部は先端に向かって薄くなり厚さは6mm。果たして機能したのかと疑問に思う。耕起だけでなく、別の作業も検討する必要があるう。

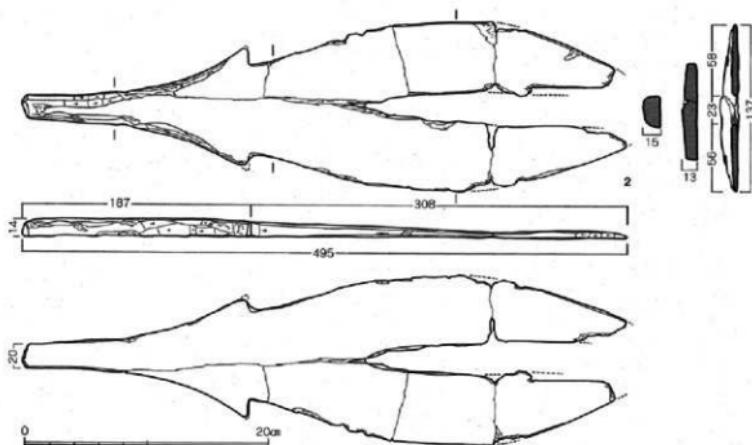


Fig.51 SP0436の遺物（縮尺1/4）

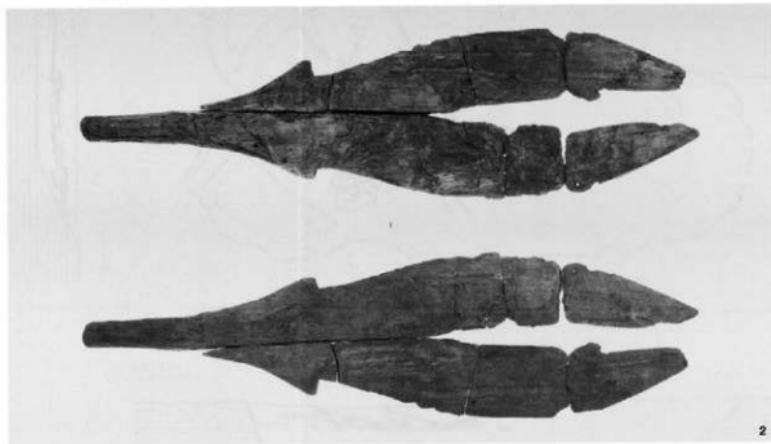


Fig.52 SP0436の遺物

5. 凹地 (SW)

Vグリッドラインから西側は土壤やピットなどの遺構が希薄になり、入れ替わって不整形の大きな凹地が分布している。これらは洪水や湧水などの自然作用でできたと思われ、今も激しく湧水する凹地もある。多種多様な遺物が出土したが、各時代の遺物が混在していないことから長期間を通じて開口していたのではなく、短期間に埋まり、また別の凹地が新たに出現することを繰り返したようである。縄文時代の貝塚のように食糧の廃棄物はないので食糧や食生活を復元することはできないが、雀居遺跡の生活や農作業を復元する上で重要な遺構と言うことができよう。

検出した凹地は7基あり、SW01~03が古墳時代、SW04~07が弥生時代である。なお4基の弥生時代凹地は、第Ⅲ面遺構として後述している。

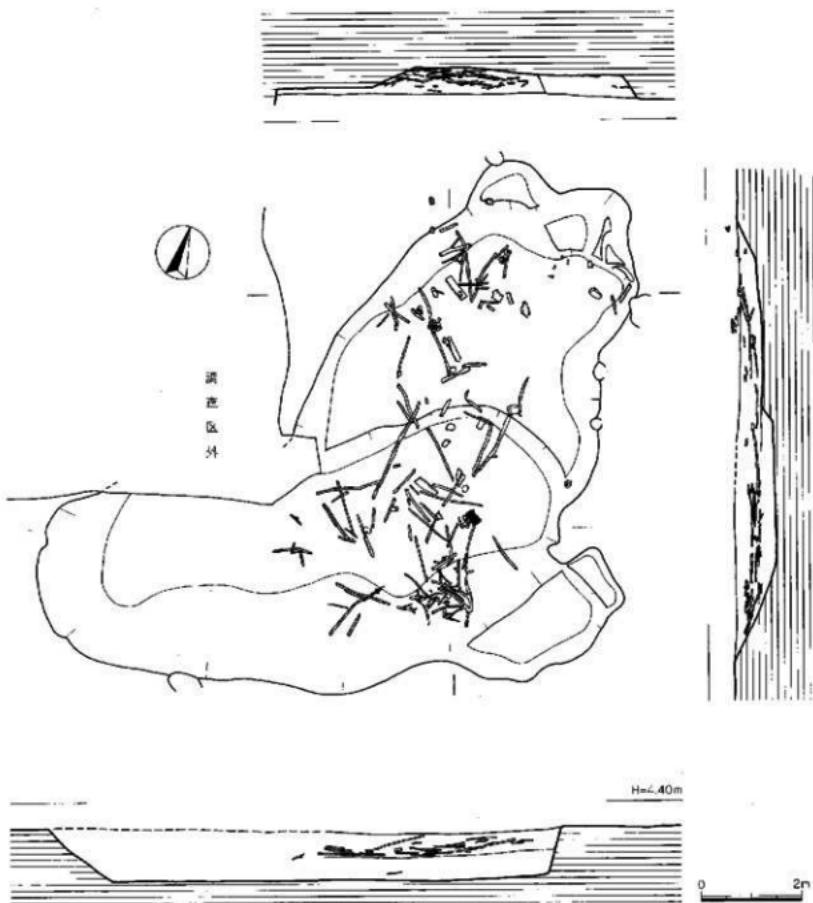


Fig.53 SW01実測図 (縮尺1/100)

第1号凹地SW01 T39グリッドに位置する。二つの梢円形の落ち込みが「L」字状に繋がった平面プランとなっている。底面は南東側が一段深くなっている。埋め土は砂質黒色土で細い棒状の木材が中程に折り重なっており、特に周囲から投げ込んだ様子ではなく自然に堆積したような状況である。この木材の間から土器や木製品が出土し、実測、図示した木製品は北西側の落ち込みに集中していた。



Fig.54 SW01 (南より)



Fig.55 SW01 (東より)

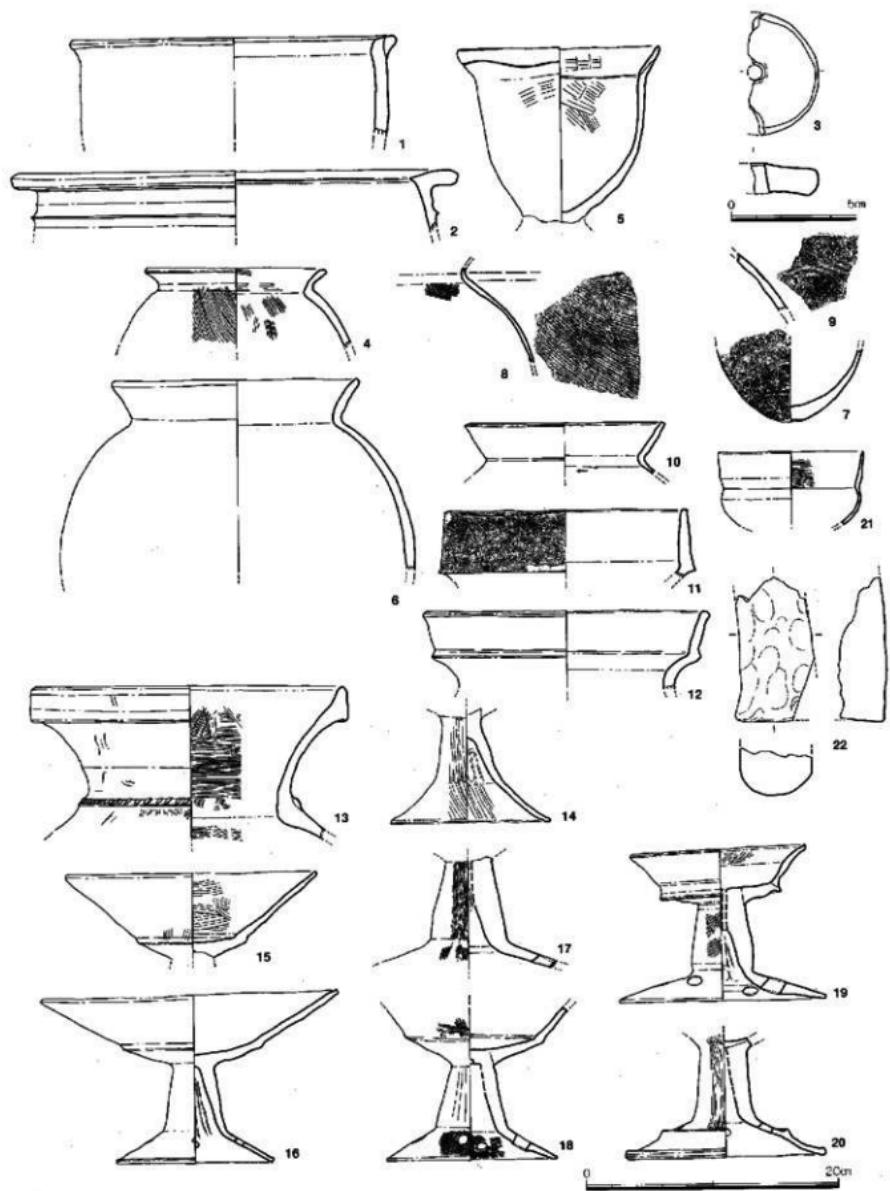


Fig.56 SW01の遺物 (縮尺1/4・1/2)

出土遺物 土器 1、2は弥生時代の甕。この1号凹地は庄内式、布留式併行期なので弥生時代遺構からの混入品であろう。4~21は古式土器器である。4の甕は内外面ともハケ目仕上げでタタキ痕は見られないが、口縁部が短く外反し端部を丸くおさめ、頸部が縮まっているなど、この残存部位だけでは在地系（A系）とも伝統的V様式系（B系）とも言えないものである。5は台付甕で、台の接合痕跡が残っている。作りは粗雑で台の接合部分には指で撫でつけたり押さえたりした痕が残っており、小型品だが祭祀土器とも思えない。6の甕は、外面がナデ仕上げで接合痕が残る、内面は浅いハケ目とナデ、口縁部は微妙に外反し端部を丸くおさめるなどからB系である。7はその大きさから小平底の甕か。外面は底部付近に右上がり方向のタタキが見られ、内面はハケ目調整だろうが最後にナデ消している。B系といえる。8の甕肩部の破片は、外面が左上がりの細筋タタキ成形、内面が右上方のケズリ調整で頸部内面にハケ目が残るなど庄内式系（C系）だが、口縁部の横ナデが頸部まで及んでいるので屈曲はなだらかである。布留式系（D系）の影響と考えられ、C系甕の中でも新しいものだろう。9は小片で全体の形状も製作技法も分からぬが、外面には櫛描波状文の上に櫛描直線文が施されており、D系や山陰系の甕肩部ではないか。10の甕口縁部は、直線的な形状に回転的な横ナデが肩部まで施されており、頸部の屈曲もなだらかであり、まずD系であろう。12は若干隔壁が厚いものごく一般的な、おそらく玄界灘沿岸地域産の山陰系二重口縁甕である。山陰系土器はII A期末から西新町遺跡などを中心に見られ始めるもので、12もそれ以降のものであろう。13の二重口縁甕は、内外面ハケ目調整、頸部に刻目突帯、なだらかな各屈曲部などの特徴からA系である。一般的なA系二重口縁甕は二次口縁部がもっと長くそして外傾、直立、内傾しているが、この形式はSR01のA系二重口縁甕と同じ短い形式であり、その中でもさらに短いあるいは厚みがあるといえる。14~20の高坏のうち、14は中空の脚柱部に坏部との接合が脚頂部凹画付加法であることからB系。15は坏部の器壁が薄く直線的で、坏底部がほぼ水平で短い、明瞭に残る脚部との接合面から脚頂部凸面付加法だと分かる、などの特徴からはC系となるが、調整が内外面ともハケ目仕上げで、胎土が石英、長石を多く含むなど精製品といえるものではなく、C系の影響、模倣品といえる。この接合面に径2~3mmの浅い軸芯痕が見られ、接合されていた脚部の方から丁度17の脚部のようになっていたのである。軸芯痕については山陰地域や吉備南部で多数見られることが知られており、この玄界灘沿岸地域でもD系高坏やC、D系器台などの精製器種を中心に確認できるが、それらの地域との関係的一面を示しているといえる。軸芯痕は他に18、19でも確認できるが、これら14~20の高坏はどれもB系（19は山陰系の可能性あり）で精製品ではない。またこれらの高坏の坏と脚の接合、製作技法も多様である（出雲地域の高坏については松山智弘1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌8』などの研究がある）。19の軸芯痕は貫通しているし、20は中空に作った脚柱部に円盤状粘土を充填している。21の小型丸底甕は、胎土が小片の雲母や長石を含むやや粗い感じのもので、この雀居集落で作られた在地品なのである。比恵・那珂、博多、西新町以外の周辺集落ではこれらの各集落の在地品が多い。これは久住I c類、重藤甕4式にあたり、時期は西新町4式前半（II B~II C期相当）となる。共伴土器から1号凹地の時期をみると、II A期以降のC系甕やII B期以降の山陰系二重口縁甕などが在り、そこからこの小型丸底甕の時期は妥当といえよう。

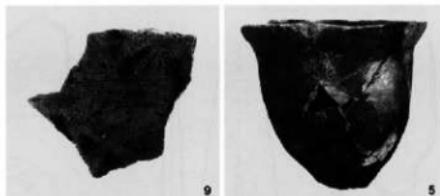


Fig.57 SW01の遺物

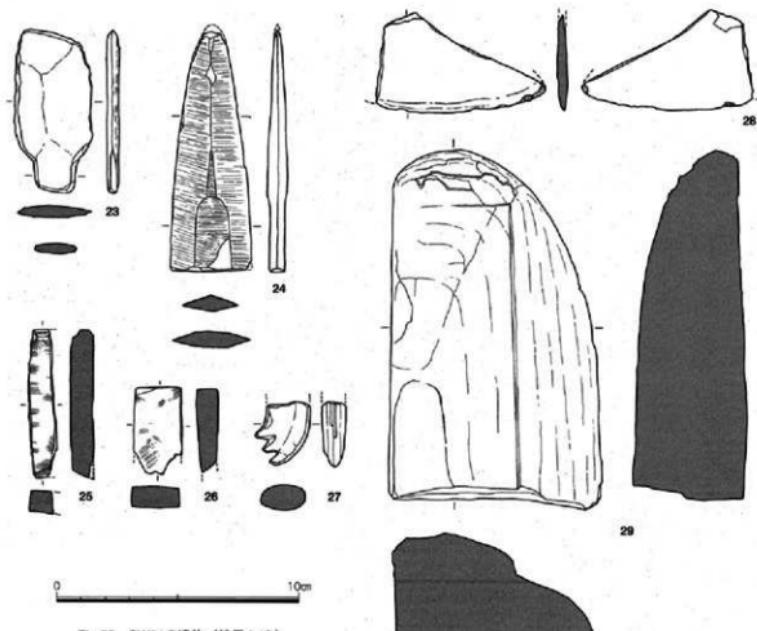


Fig.58 SW01の遺物 (縮尺1/2)

石製品 23は先端が折れた磨製石礫の形状をしているが、まだ身や茎が未整形、未研磨であることから未製品であろう。現在長6.7cm、幅3.1cm。24は磨製石剣の切っ先（鋒）部。現在長9.9cm、幅3.4cm。鍔は鋒より7cmまで通る。研磨は十分でなく一部に自然面を残している。25は縦に割れて刃部幅が分からぬが、鑿状の方柱状片刃石斧であろう。全面よく研磨されている。刃部の角度が大きい。26は扁平片刃石斧で、刃部を欠いている。27の石材は滑石。端部が三つ又に加工しており、勾玉状の垂飾品か。28は石包丁か。剥離し片面のみに刃部がある。29は磁左側面が平滑に研磨されている。磁石としては不安定な形状で、用途不明。

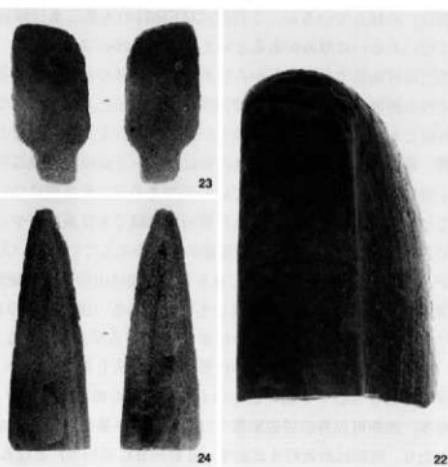
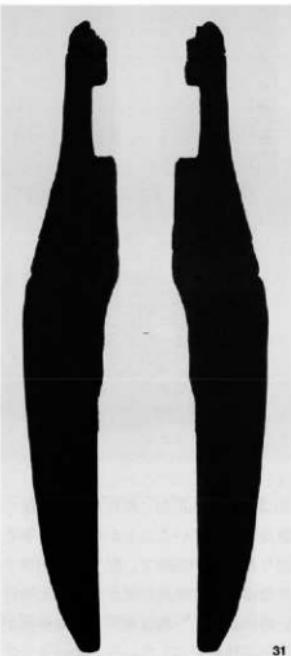
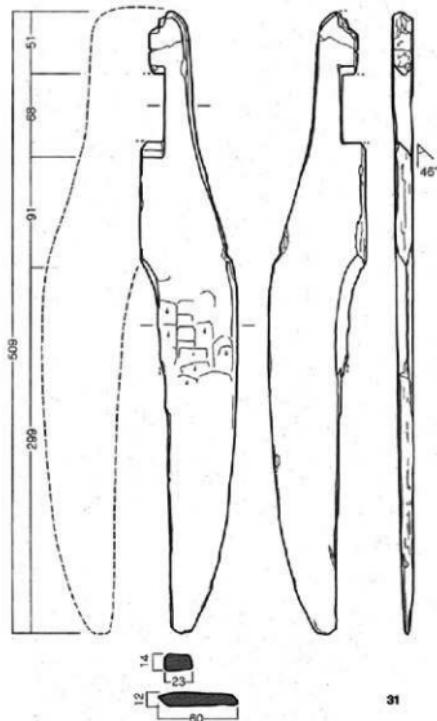
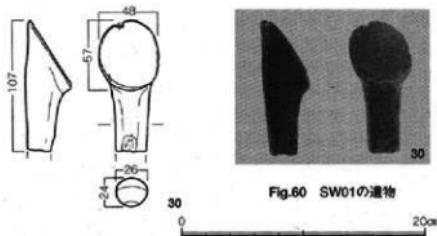


Fig.59 SW01の遺物

木製品 SW01で何らかの加工痕が認められるものについては、できる限り実測し、図示するように努めた。30は鍔の柄の端部で、広葉樹の芯無し材を用い、削り痕を残さない程丁寧な加工を施している。31は二又鍔で縦に割れている。柄孔は長方形で柄との角度は46度前後。復元すると頭部から肩部にかけてゆるやかに湾曲し、又先端部に向かって内側にすぼまっている。身の一部に削り痕が残る。32は曲柄平鎌。頭部を欠いているが全形を知り得る。左右側面の削り痕は顕著である。笠部は左右で厚さが異なり片方が8mmに対してもう一方は4mm。身は刃先に向かって幅を広げ、先端は山形に尖らしている。33はナスピ形の鉤。埋没中に数片に折れ、しかも欠損部があるが、接合して元の形状に復元できた。41頁のナスピ形木製品と比べると、又部の開きが大きく下駄の形状となっている。ヘタ(笠)部は両方とも欠けているが、欠損後にも潰れており、あるいは紐擦れか。34は鍔の泥よけ具(停泥)と推測した。半梢円形に圓化しているが全周が欠損の可能性がある。中央に縦長梢円形の孔が開く。



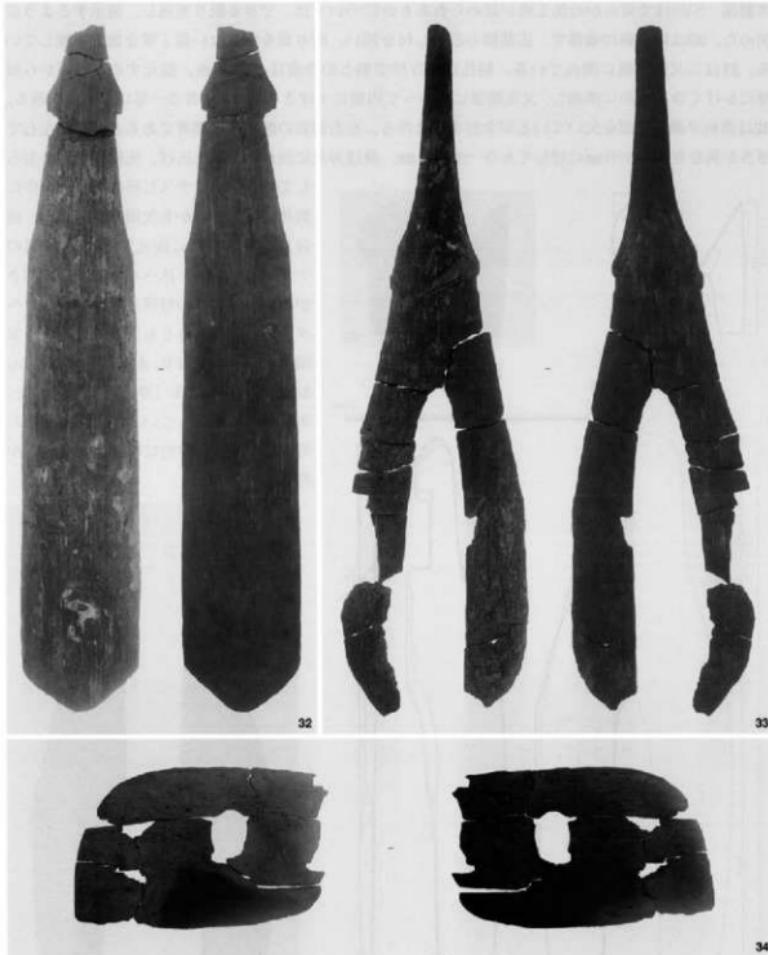


Fig.63 SW01の遺物

35は堅杵の完形品。堅杵は割れを防ぐために芯無し材を使うことが多いが、本例は芯持ち材で一部に樹皮が残っていることから丸太材をそのまま加工していることが分かる。長さから手杵か。握り部と握り部の境が明瞭で、削り痕が明瞭である。握り部中央に細い溝が掘り込まれているが目的不明。握き部は両端で断面が異なる。図上端は平らに切断し、図下端は丸く加工している。上端は摩滅が少ないのに対し、下端は使用による摩滅が進んでいる。ただし使い込んだ印象はない。36は径約3cmの広葉樹の枝を使用している。30のような加工を施しているが、削りが粗く作りも異なることから用途不明。

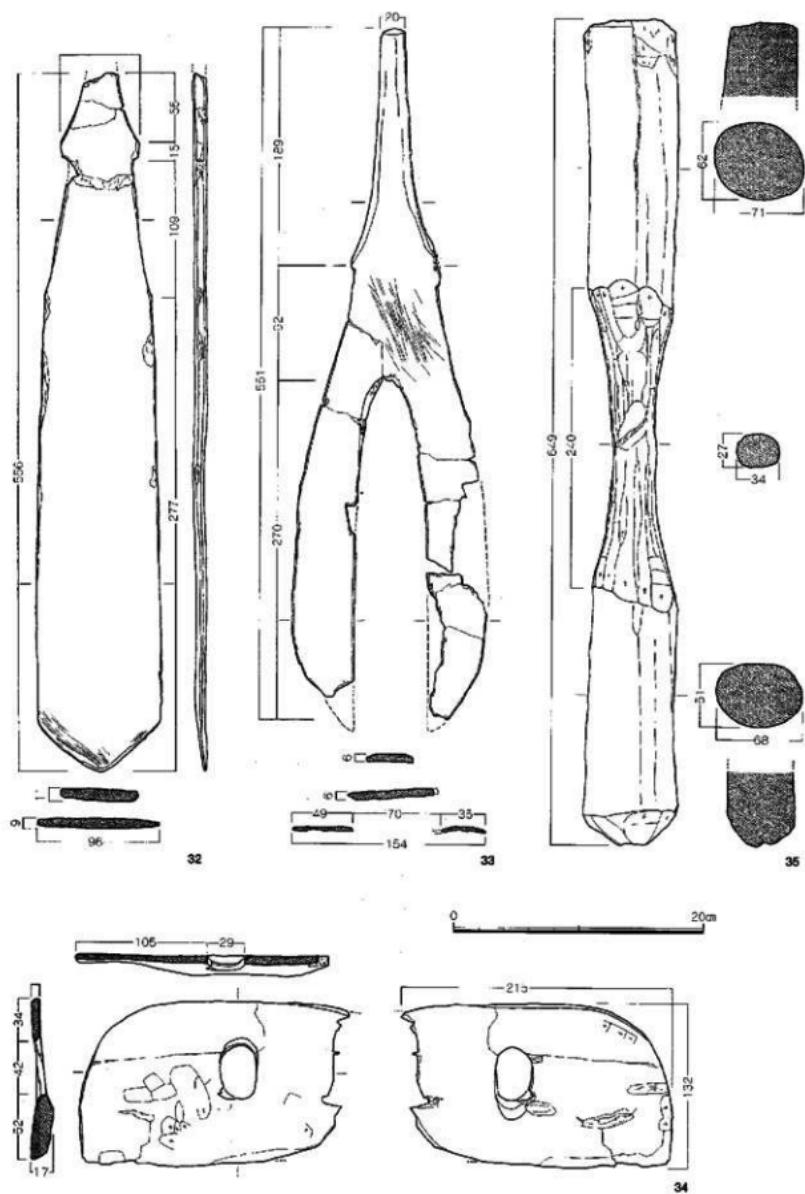


Fig.64 SA01の遺物 (縮尺1/4)



35

Fig.85 SW01の遺物

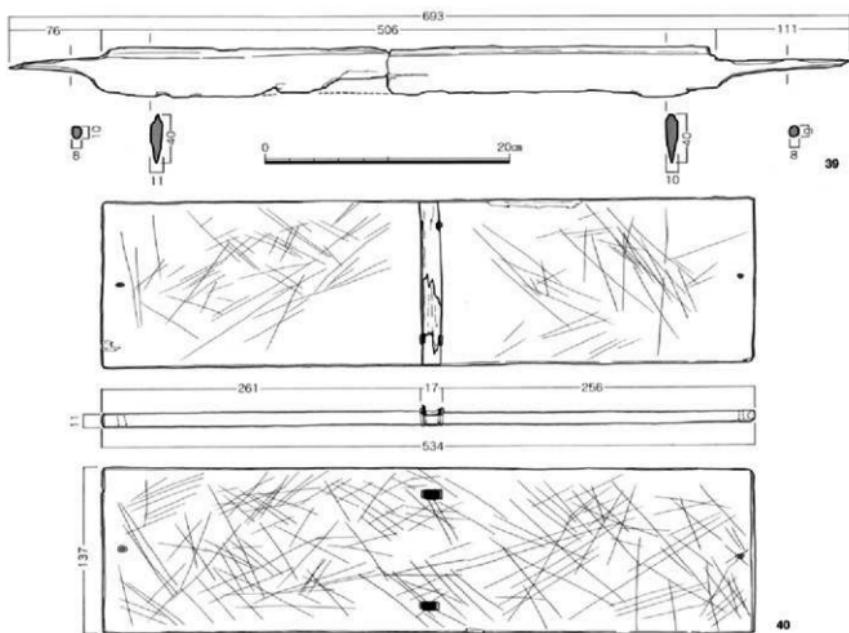
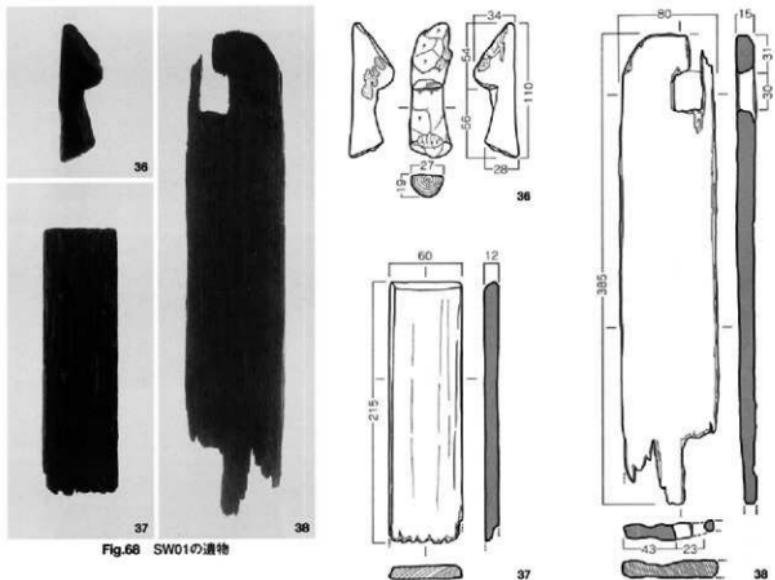


Fig.86 木製品の出土状況



Fig.87 木製品の出土状況

37は針葉樹の板材で、端部、側面ともきれいに削られている。両面も平滑。用途不明。38は針葉樹の柾目材を加工している。板材の一方に中心軸よりずれて長方形の孔を開けている。この孔の切り込みは長辺は垂直で、短辺はやや斜めに削られている。全体に仕上げは粗い。39は針葉樹の柾目材。機械りの打ち込み具のように両端に掘り部様の作りがあり、身の断面も三角形に一方が鋭角になっている。しかし全体に腐食し、用途不明。40は針葉樹の柾目材。木目だけではなく加工も美しい。両端に小孔1個。中央に長軸に対して直交し浅い溝を彫り込み、この溝の上下2か所に孔を開け、桿皮が残っている。他の板材を繋ぎ組み合わせたのだろう。両面に刃物傷が無数に残り、桿皮の上にも付いている。刃物傷は上図の中央部ではなく、部材を組み合わせたままで刃物を当てたと推測される。中仕切のある方形箱を想定したが、底板との連結が不明だし、側板より仕切の連結を強くしているのはおかしい。



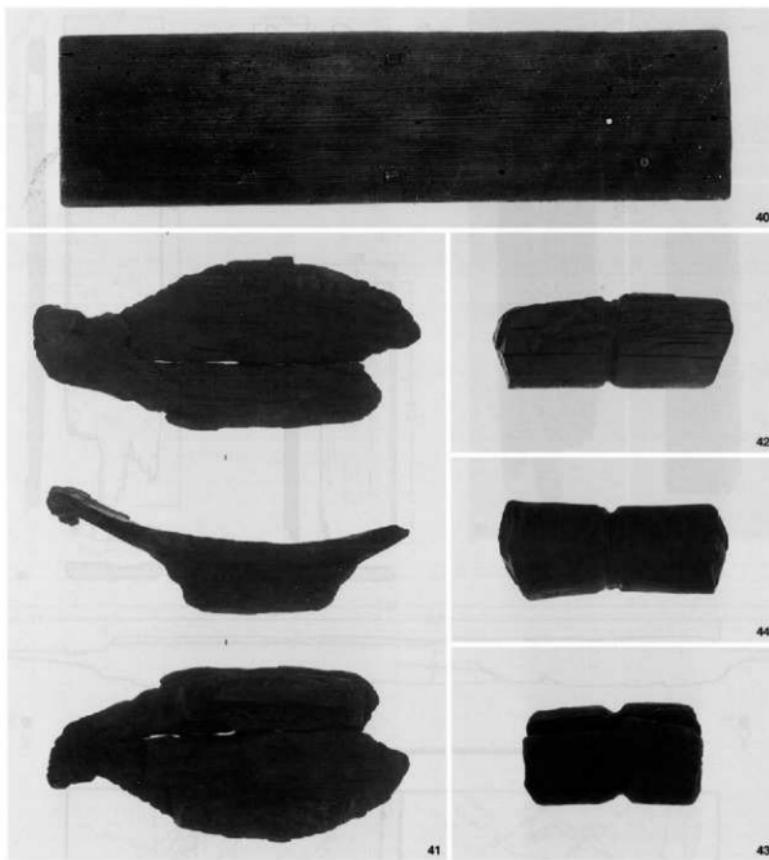


Fig.70 SW01の清物

41は広葉樹を横木取りし、座板と2本の脚を削りぬいた腰掛けである。年輪を断面図に示した。出土時は、脚が低く、座板が内窪みであり、その両端も折り返して装飾的であることから枕と考えた。座板は一端が欠けているが、上から見ると両端が狹まる梢円形で、丁寧な加工を施している。2本の脚は長軸に対して並行するように削りぬかれている。逆台形でハ字形に外に開き安定を図っている。脚がある裏面の削りはやや雑。やはり高さが気になる。胡座をして座ったのか、それに内窪みに尻が合うのかどうか。42~44は木錐。42は広葉樹の丸太材を切断しており、一部に樹皮を残している。中央の溝は細めで、両端の削りは鋭利。火熱を受けている。43も同じように丸太材を切断している。中央の溝はやや摩耗しているようである。変形し割れている。44は広葉樹の丸太材を樹皮を付けたまま切断し、中央に溝を削り込んでいる。両端の削りは鋭利である。

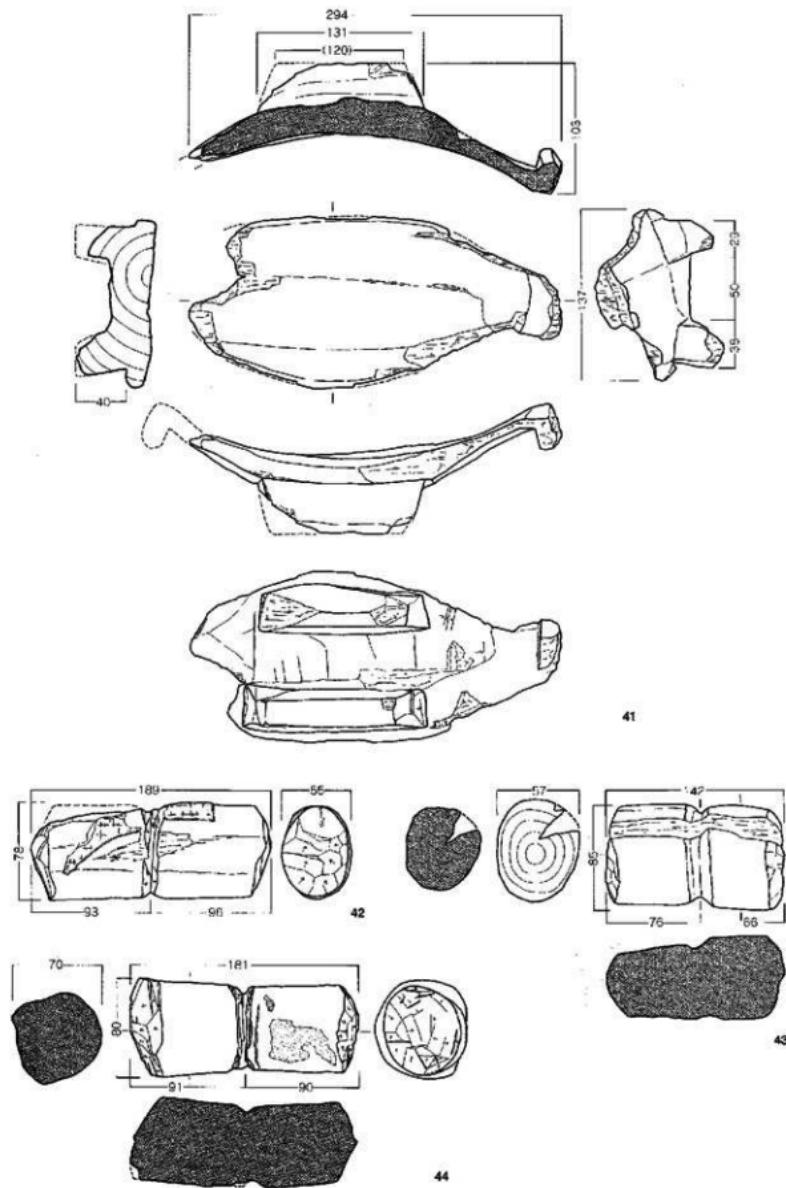


Fig.71 SW01の遺物 (縮尺1/4)

第2号凹地SW02 凹地を遺構として認識したのはSW02が最初である。2区の西端に当たるU31・32グリッドで第1面水田耕作土の下に木片が折り重なって現れ始め、土層も砂質土に変化することからこれより西側は低湿地になり遺構は存在しないと速断してしまった。木片は湿地の岸にうち寄せられ堆積したと思い込んだのである。この木片を追うと直径11.50m×9.94mの凹地であることが分かった。凹地中では最も湧水が激しく、木片はまさに岸に打ち寄せられた状況で北側から東南側に集中している。SW02の東側に豊穴住居跡や土壤などの生活遺構が展開していることと関係しているのだろう。



Fig.72 作業風景

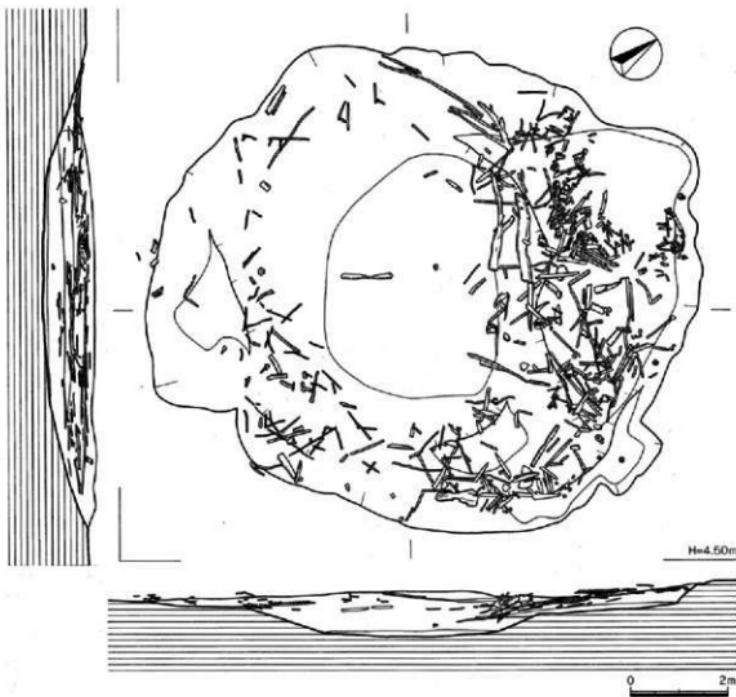


Fig.73 SW02実測図 (縮尺1/100)

出土遺物 堆積している木材はほとんどが自然木で、この間から木製品が出土した。土器は弥生時代前期後半から中期、古墳時代前期の時期で、弥生時代中期中頃から後期が抜けている。発掘区全体にこの期間の遺構は希薄であり、SW02の出土遺物はこれを反映している。しかし土器が示す弥生時代前期後半から古墳時代前期までの長期間凹地であったとは思えない。数量からすると圧倒的に古墳時代土器が多く、また木製品の時期とも一致している。したがって弥生時代遺物は後の混入とした。

土器 1~15は弥生土器。1は突帯文土器の甕口縁部。突帯は口縁端からわずかに下がって貼り付けている。外面は横条痕、煤付着。2は口径6.7cm、器高7.8cmの小形の甕。口縁部は小さく外湾する。外面縦半分に黒斑。3は小形の甕。口縁部を欠いているが器高は9cm前後か。やや体部に張りがあり丸みのある体部となっている。4は底部が異様に張り出し、台付き甕のような器形となっている。口径15.2cm、底径6.3cm、器高15.6cm。器壁が全体的に厚く、口縁部は小さく屈曲する。5は口径18.9cm、口縁に接するように縦ハケ目調整。その後に幅広の沈線を1条巡らせている。6は口径22.9cm、く字形に屈曲する口縁部は肥厚し、端部は丸みを持たせている。外面のハケ目は細かく、沈線は水平ではなく波打っている。7は口径が32.8cmと大きく、体部も大きく開いていることから鉢に近い。ただし外面に煤が付着し煮沸を使っている。8は同じように33.7cmと大きな口径である。口縁部の湾曲は小さい。外面に煤。9は口径24.0cm、口縁部の作りに特徴がある。やや張りのある体部は上端で外湾して断面三角形の口縁部を乗せている。口縁外端には等間隔の刻み目。10の底部はやや上げ底で底径7.0cm。外面の調整は上半が細かな縦のハケ目で下半は縦のミガキ。内面に炭化物は内底ではなく、約2cm上方から帯状に付いている。11の口縁部は、内側への突出が大きくT字形に近い。しかも上面が凹んでいる。12は甕の口縁下突帯部の破片。断面三角形突帯と同じように粘土を貼り付けて逆向きの鉤文を表現している。13は蓋。摘み部の凹みは浅い。14、15は甕の底部。14は底径7.95cmで分厚い器壁となっている。内面に炭化物付着。15は7.6cmの底径。底部に黒斑。



Fig.74 木製品の出土状況

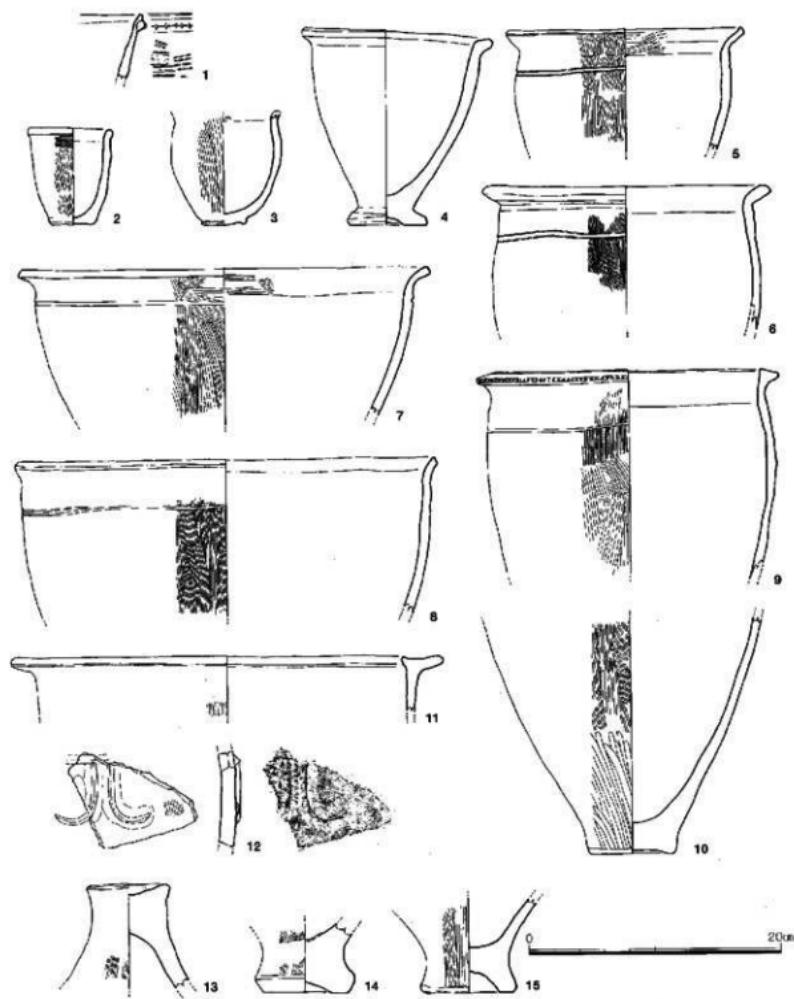


Fig.75 SW02の遺物（縮尺1/4）

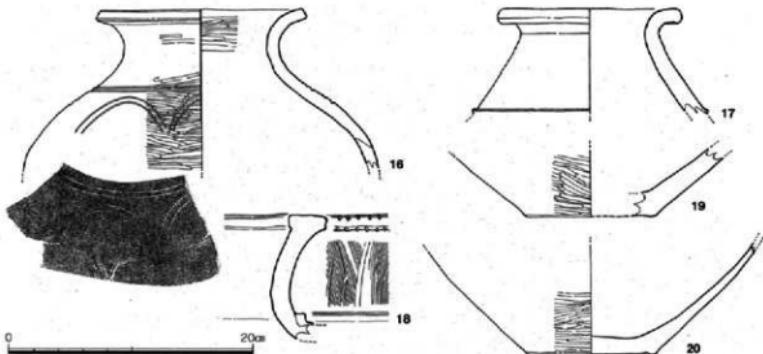


Fig.76 SW02の遺物 (縮尺1/4)



Fig.77 SW02の遺物

21、22の甕は内外面ともハケ目仕上げでおそらく長胴甕だろうから在地系（A系）といえる。A系では頭部や胴部下半などに突帯が巡るものを見られるが、22の甕（推定復元口径53.4cm）のように口縁端部にさらに二次口縁がつく形態は珍しい。22の外面は突帯貼付前もハケ目整形し、突帯もハケでナデ付けている。24の伝統的V様式系（B系）甕の底部破片は、右上がりの太筋タタキ仕上げの不安定な平底で、内面も工具ナデが螺旋状に施されている。34～39の甕は布留式系（D系）甕である。どれも脇部上半が残存するのみで全体の形は分からぬが、比較的形態が掴める

ものは球形甕であろう。外面は縱方向ハケ目の後に横方向ハケ目を施し、内面は中位が左上方向、上位が右～右上方向のケズリ、口縁部～頭部～肩部の回転的横ナデ、のD系の特徴が見られる。口縁部は、34は内湾し、他は長さの長短や器面の凹凸はあるがどれも直線的である。34、36、39は口縁外側に対し内側を強く横ナデした感じで、器面は凹凸があり、34などは端部が内側に肥厚している。一方の35、37、38は口縁端部を外側水平につまみ出した形で、35は端部内側も小さな段をもって肥厚している。肩部形態はこの雀巣遺跡では比惠・那珂、博多遺跡同様に多くが「なで肩」状を呈するが、37や39は明らかに肩が張った球形甕である。また山陰系の文様とされる櫛描波状文や吉備系の文様とされる列点文が廻るものもある（次山淳1995「波状文と列点文」『文化財論叢II-奈文研創立40周年記念論文集-I』など）。41の小型丸底甕は水洗し胎土である。調整法は外面がハケ目の後に部分的な細筋横ミガキで、内面が規則的なハケ目仕上げで底部はすだれ状螺旋ハケ目となっている。このようにB系の規則的なハケ目調整を基本に、庄内式系（C系）小型丸底甕の細密な横ミガキ整形法に影響、模倣したものと考えられる。B系器種は変異形が多いものであり、時期比定の根拠には難しい。42、43の長頭甕を見比べると、42はハケ目、ナデによる整形で形状もやや崩れている。対して43は長く直線的な口頭部は接合によるもので、細かいハケ目調整の後に外面は細密な横ミガキ、内面は暗文ミガキが施される典型的なC系の精製器種である。47の山陰系二重口縁甕はその中でも一般的な器形である。この玄界灘沿岸地域では甕類は壺類に比べて少ないが、製作技法や器形は頭部の長さを除いた他は同

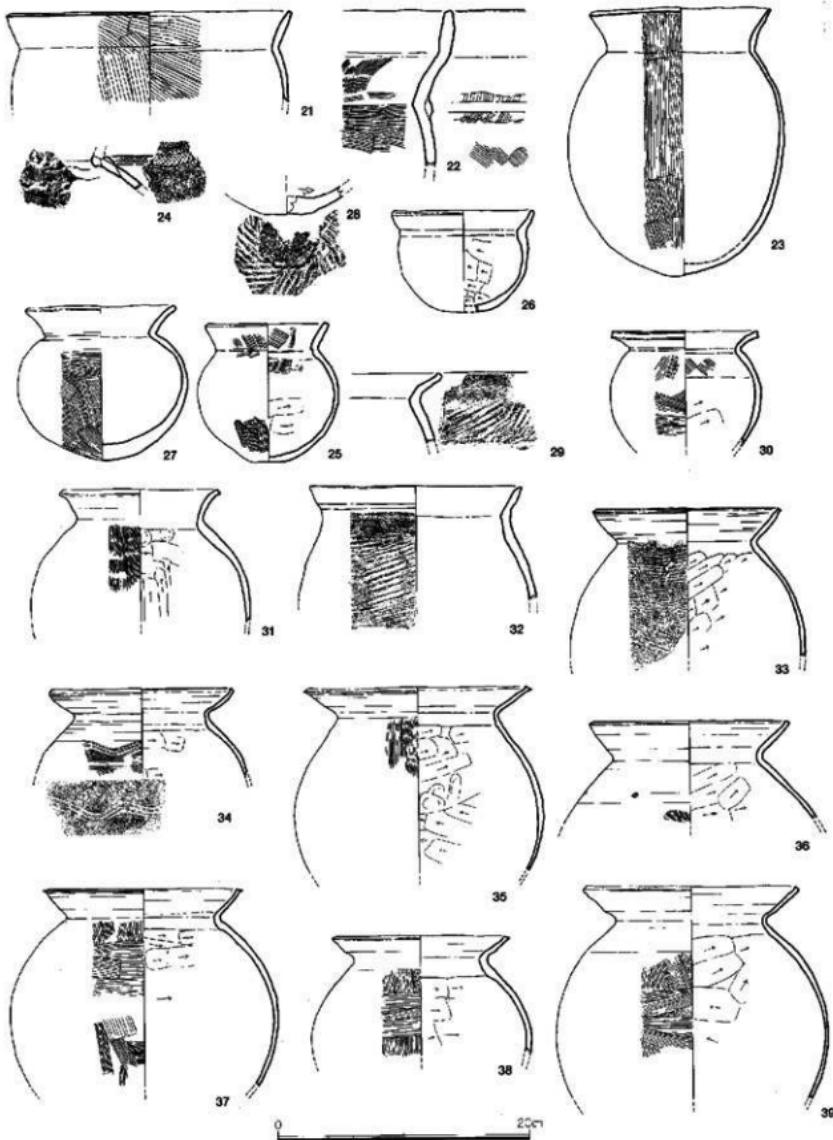


Fig.78 SW02の遺物 (縮尺1/4)

じで、当地域で出現し始める時期もどの器種も同じⅡA期末以降である。49、50はそれぞれ小型丸底鉢、壺でやや精良な胎土からなる。作りも外面に細密な横ミガキを施し、50には暗文ミガキを施すほどの精製品である。49は久住Ⅱb類、重藤鉢Ⅰ式にあたり西新町3式後半（ⅡA～ⅡB期相当）、50は久住Ⅰf類、重藤壺Ⅴ式にあたり西新町4式後半（ⅡC～ⅢA期相当）となる。このSW02がある程度時期差が見られることを示すものである。ところで50には裾の欠けた低脚が付いているが、これから推定復元できる形状は、次の51のような脚柱部が中実のB系器台や先に第Ⅱ面遺構検出面の所で紹介した低脚器台（鉢？）のような器皿などの脚部が考えられる。小型の精製品では、組み合わされる場合が多い器種どうしが合体した器形がたまに見受けられるが、これもそうである。このような器形からは當時考えられていた器種のセット関係の一端が分かる訳で、50の場合も、B系器台あるいは低脚器台（鉢！？）と小型丸底壺のセット関係がみてくる。しかもこのような特殊な器形の精製品からはさらに祭祀的な要素も想定できる。51のようなB系小型器台は、胎土は精良ではなく、調整も外面はナデと板ナデの仕上げであるようにそれぞれ変異が大きく、時期比定に使えない。逆に52、53はどうちらも残存部は受部のみだが、胎土がやや精良でナデあるいは細密横ミガキ仕上げのC系の精製品である。そのうち52は古い時期のもの（受部O類）でⅠB～ⅡA期くらい、53は新しい時期のもの（受部IV類）で大体ⅡB期以降になる。51はその器形から東海系の器台、脚柱部径が口径を凌駕する小型のタイプと思われる。当地域では東海系土器のうち、S字彫やバレス壺、有棱高坏やヒサゴ壺は少數ながら確認されているが、この小型器台については現時点では出土例を知らない。外面にはミガキ状ナデが施されているが、胎土は精良ではなくて一般の土器と同じである。62の高坏は、調整は摩滅しているが、脚柱部が中実で、坏部は屈曲部の稜がはっきりしており、胎土も精良ではなく一般土器のものと同じで、器壁も比較的厚いことからB系技法である。逆に63は、まず胎土がやや精良なもので、外面調整も全体にハケ目痕が残っているものの脚柱部に細密横ミガキが施されている精製品である。形態は比較的太くなり、屈曲部の稜は丸みを持ち、D系高坏である。64の高坏は、62と同様に胎土や器壁、坏部形態から、さらに外面の板ナデ調整法からB系といえる。狭い水平の坏底部などはC系高坏の影響だろう。

このSW02の時期幅は、以上のようにⅠB期からⅢA期まで存続した可能性があるが、なかでもD系壺に代表されるようにⅡ期後半にかかるものが多数を占める。器種構成はやはり壺類が最も多いものの極端な差ではなく、土器系統も器種全体に見られるB系技法を中心に、壺や小型精製器種にC、D系が目立ち、そして他の系統も少なからず見られ、他の遺構とも同じような在り方を示している。

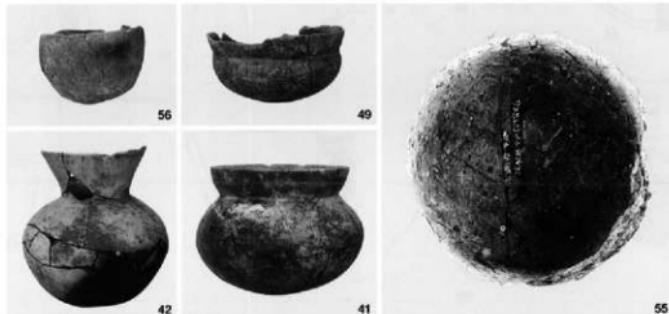


Fig.79 SW02の遺物

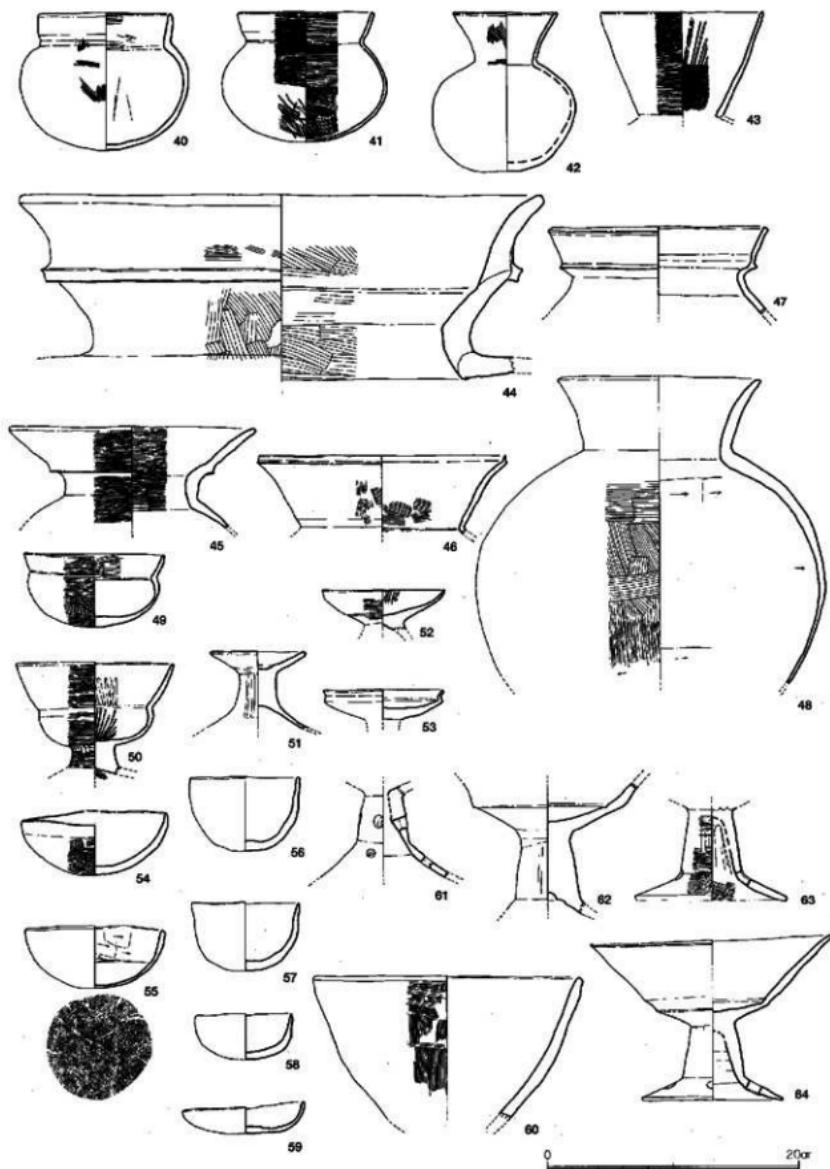


Fig.80 SW02の遺物 (縮尺1/4)

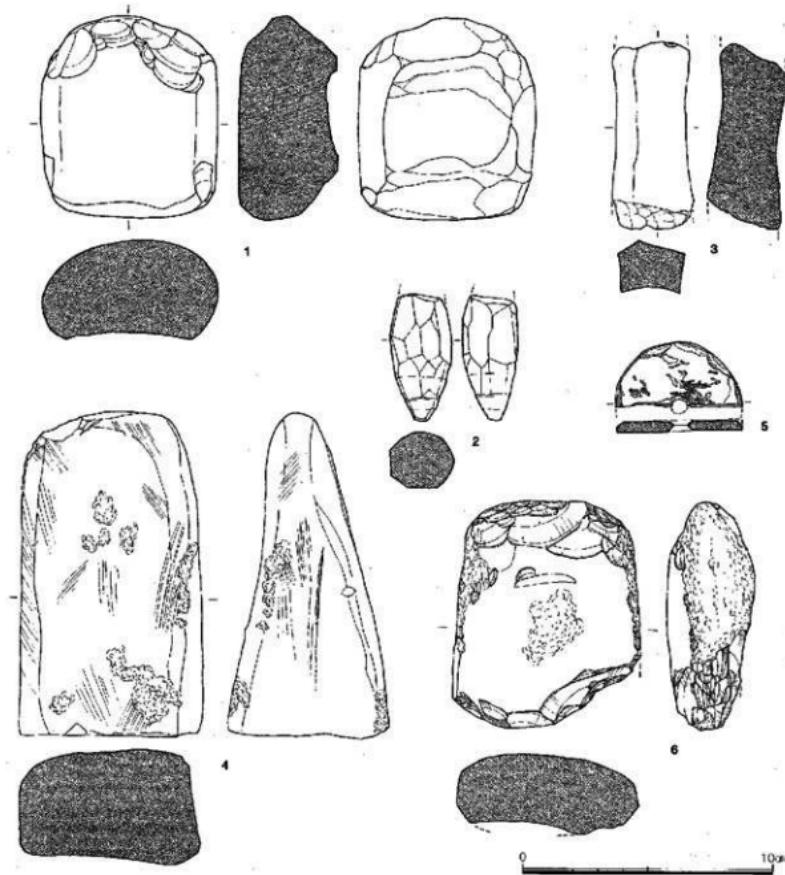


Fig.81 SW02の遺物 (縮尺1/2)

石製品 1は両端が折れた磨製石斧の一端を研磨している。磨り石か。現在長8.0cm、幅7.1cm、厚さ3.95cm。2の石材は砂岩。長さ5.0cm、幅2.5cm。横断面は多角形。一方を尖らせ横に浅い沈線が入る。小さいのが穿孔貝とした。3は長柱状の砥石。断面は五角形で各面が研ぎ面として使用している。4は自然石を用いた砥石。研ぎ痕が残っている。5は直径5.1cmの筋轆車。中央の孔は両面から穿つ。6は長台形扁平斧。身から頭部にかけて細かな殴打を加えている。刃部を欠くが側縁は刃部に向かって幅を増す。

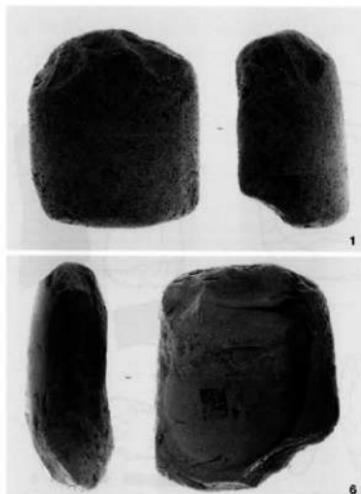


Fig.82 SW02の遺物



Fig.83 木製品の出土状況

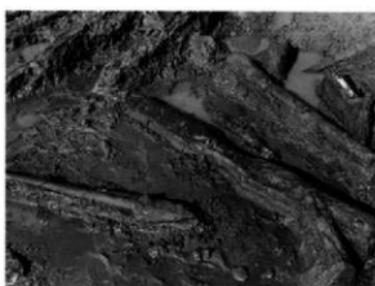


Fig.84 木製品の出土状況



Fig.85 木製品の出土状況

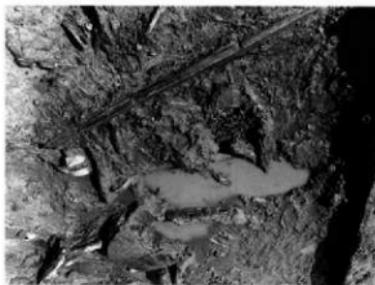


Fig.86 木製品の出土状況

木製品 1はカシの柾目板を加工した平鐵。柄孔から上部を欠いているが、柄孔は長方形であろう。柄孔長側壁の痕跡からすると裏面から柄を挿入したとも考えられる。柄孔の角度は上辺と下辺で角度が異なり、少し「遊び」を持たせているのが通常である。また絶えず着柄していたのではないので、この角度の違いを利用して逆方向から柄を挿入、着装したことも考えられる。ただし安定感は犠牲になったことだろう。

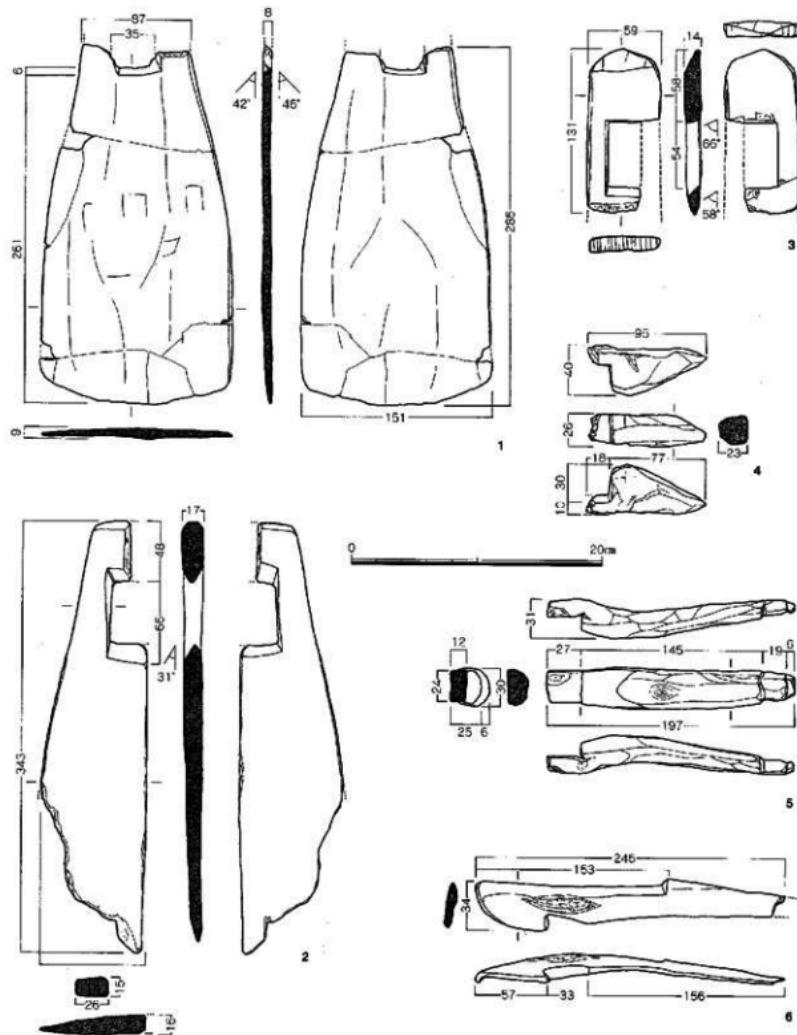


Fig.87 SW02の遺物 (縮尺1/4)

身に肩はなく緩やかに幅を広めながら先端に向かう。刃先は直線ではなく丸みがある。身の厚さも均一で、刃先付近で次第に薄くなっている。2は縦半分が削れた平歛、刃先も欠いている。角張った頭部から1と同じように緩やかに延び、刃先近くで狭まるのであろう。柄孔は長方形で、柄との角度は31度と銳角となる。1に比べ全体に厚みのある作りである。3は頭部と柄孔だけが残る。頭部は山形に両側から削り、さらに表側からも削っている。柄孔は短辺が長辺の1/2弱という縦長の長方形。上辺の角度は66度、下辺の角度は58度。4~6は歛柄の組合せ具で、ここでは栓と呼ぶ。4は短い三角形で、段も短い。5は長めの栓。本例の特徴は湾曲し柄との間で隙間を作っている。また段と反対端部に柄と緊密するための幅広の溝を作り出していることである。泥よけ具を装着する場合は、6のように一段削り取り空間を作り出すことが多いが、本例のように湾曲した例は初出土か。段側内面にピン(楔)を挿入した痕跡はない。また紐痕も残っていない。6は組合せ式柄の先端部。木材の中に紛れ込んでいたために取り上げが遅れ乾燥させてしまった。博多区那珂久平遺跡などの出土例とよく類似しているが、本例が異なるのは、泥よけ具を挿入する隙間が柄側にも加工されていることである。柄側にこの加工があると泥よけ具を装着しない時は隙間ができるが余計な心配か。



Fig.88 SW02の遺物

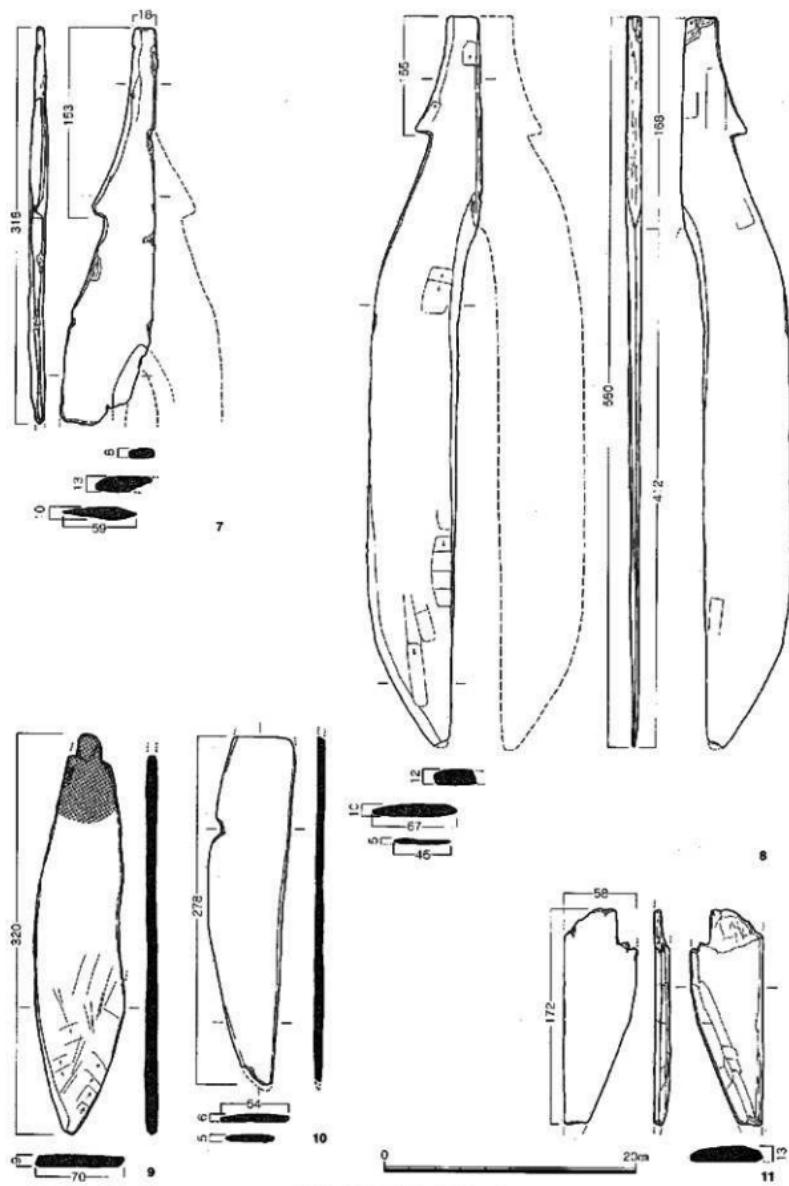


Fig.89 SW02の遺物 (縮尺1/4)

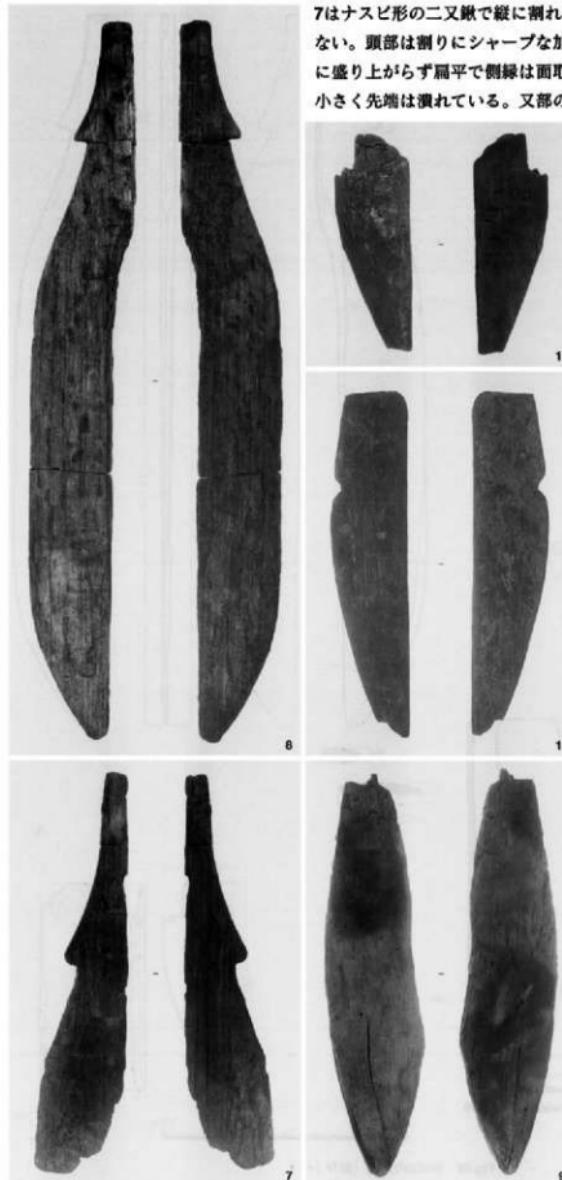


Fig.90 SW02の遺物

7はナスピ形の二又歛で縁に割れ、又部も一部しか残っていない。頭部は割りにシャープな加工が施され、断面は蒲鉾状に盛り上がりらず扁平で側縁は面取りしている。笠部の突出は小さく先端は潰れている。又部の広がりは大きく抵がっていない。

又部内側の刃部は幅広く削り出している。

8は頭部を欠き、縱半分に割れている。頭部端が厚く、刃先に向かって少しづつ薄くなっている。又部は並行して長く延び、先端で内側にカーブする。

9は二又歛の刃先部と判断したが、形状は柳葉状であり、側縁の削り加工も通常の刃付け方と異なることから別の用途を考えるべきか。10はやや薄い作りだが、二又歛の片方の刃先とした。側縁に三角形の抉りがある。内側の刃部が鈍いのも気になる。

11は逆に厚みがあり、別用途か。図左の面は火熱を受けて炭化している。12は横歛でやや横に長い形状で刃先がわずかに幅が広い。柄孔は縱に長い円形。隆起部の横断面は台形であるが後線は鈍く、丸みを持たせて削り出している。頭部長辺の両側には方形孔があり、紐擦れ痕が残っている。同じような横歛が第3号凹地SW03から出土している。細部に違いはあるが本例の方が厚みのある作りとなっている。

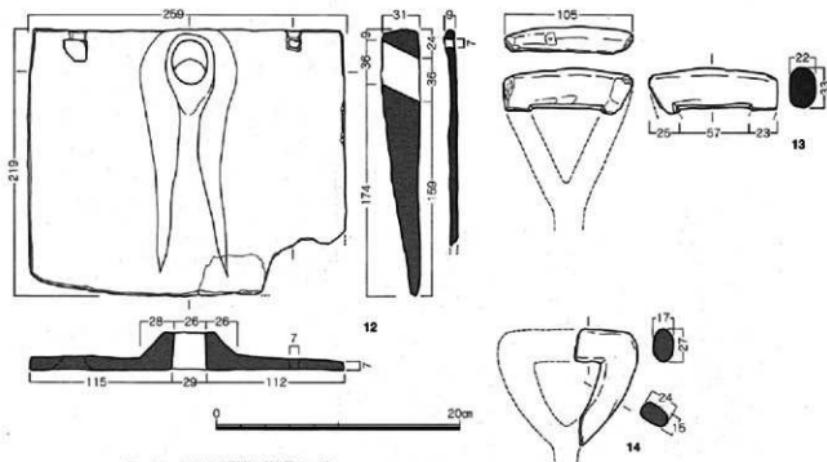


Fig.91 SW02の遺物 (縮尺1/4)

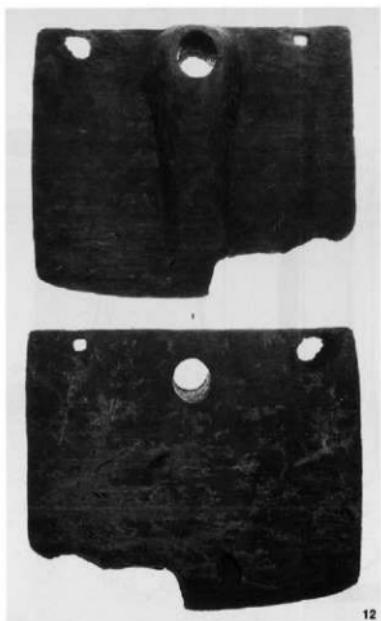


Fig.92 SW02の遺物

13、14は鋸柄端部である。13は三角形か半円形の形状の握り部。断面形は縦長の楕円形で保持しやすい工夫をしている。14の透かしは丸みのある三角形。握り部は楕円形で、Y部は断面長方形に細くなっている。13、14ともに丁寧な加工であるが削り痕はなく、長期の使用で滑らかな表面となっている。15は山形の刃先が3本あることからエブリとした。身のかすかな湾曲から団を手前側とした。上縁は弧状で側縁に延びる。柄孔は円形で手前側の径が当然小さい。この柄孔を中心として反転復元すると6本歯となる。ただ横幅が狭く、エブリとしてはきわめて小型。側縁も通常の形状と異なり再加工品か。16、17は握り棒状の木製品。16は板材から長い柄と身を削り出している。身は斜めの肩から直線的に刃先に窄まり刃先を作る。刃先は尖っていないが、肩は斜めで踏み込むには適していないことから握り棒とした。しかし側面で見ると団右は柄から段がなく身となるが、団左は身になって刃先に向かって薄くなっている。

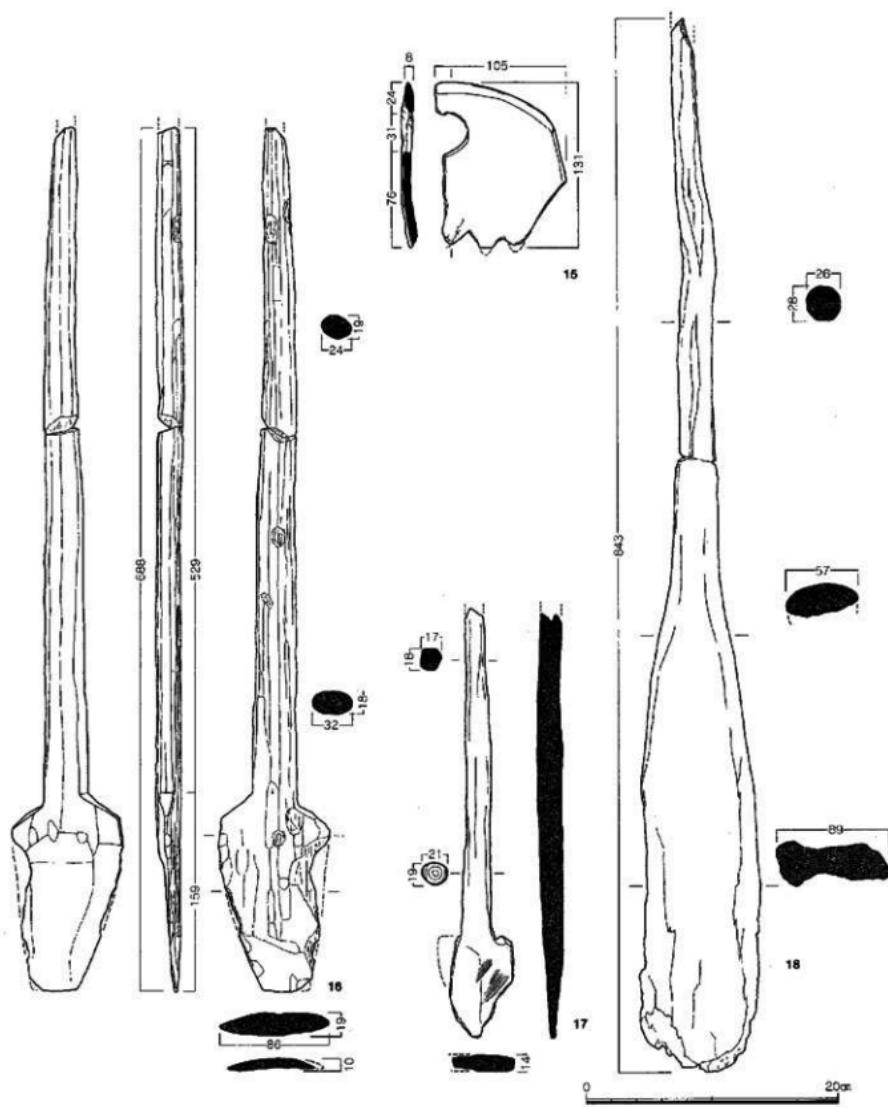


Fig.93 SW02の遺物（縮尺1/4）

このような細工は端によく見られるもので、身幅もあることから、単に突き刺す機能だけの掘り棒ではなかろう。17の身はさらに小さな三角形状となっている。断面円形の柄は手元側が折れて全長不明。身は両面から削り出して尖った先端となっている。肩はやや雅だが柄に対して直角に近い身に斜め方向の傷があり、用途、使用法検討の上で注意される。18は堅杵。図では樅のような形状となっているが、堅杵が乾燥と埋没中の変形でひどく変形した姿である。とても堅杵とは思えない。広葉樹の芯持ち材を加工している。図表面は辛うじて元の形状が残っているが、図裏面は乾燥と欠損で凹凸となっている。中央の握り部が長く掘き部とのバランスが悪い。19~21は堅杵。同じような長さだがそれぞれに特徴がある。19は広葉樹の芯持ち材。掘き部と握り部に明瞭な境がない。掘き部は両端とも丸み

があり使用によって摩耗しているが図下端はやや尖り気味。両方の掘き部とも横断面は正円に近く、握り部は梢円形である。掘き部から握り部へかけて削り痕が明瞭に残り、削り方向も観察できる。削り方向を矢印で示しているが、掘き部中程からは握り部方向へ、掘き部端部では向きを変えて先端方向へ削っている。20も広葉樹の芯持ち材。掘き部と握り部には境を付ける。全面に削り痕が残り、最初に両掘き部を削り、その後で握り部を削っている。掘き部端は図下が丸みがあり、図上は平坦に近い。どちらも摩耗しその使用回数が多くたことを物語っている。握り部の断面は梢円形、また中心軸がゆがんでいる。21は19、20に比べ短い。広葉樹の芯無し材。掘き部端は一方が丸で、他方が平らである。どちらもよく摩耗している。掘き部から握り部は次第に窄まり明瞭な境がない。図上端の掘き部は端部が最も幅広い。これは平ら

な掘き部の作業目的からできる限り
掘き面積が必要だったからだろう。

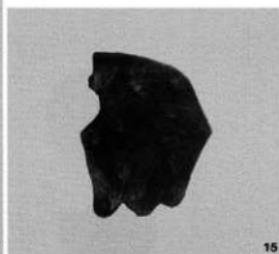
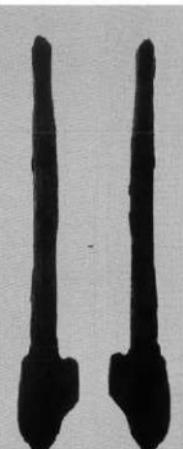
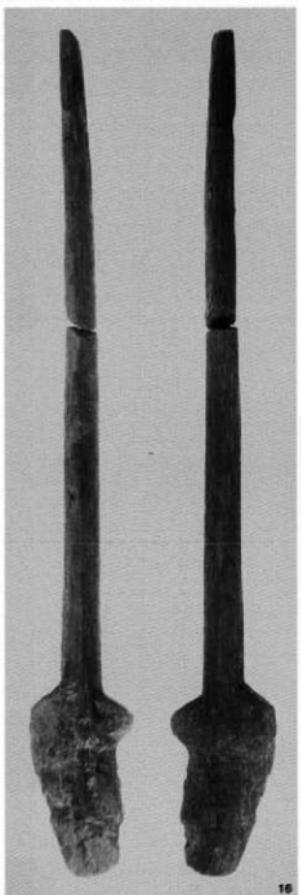


Fig.94 SW02の遺物

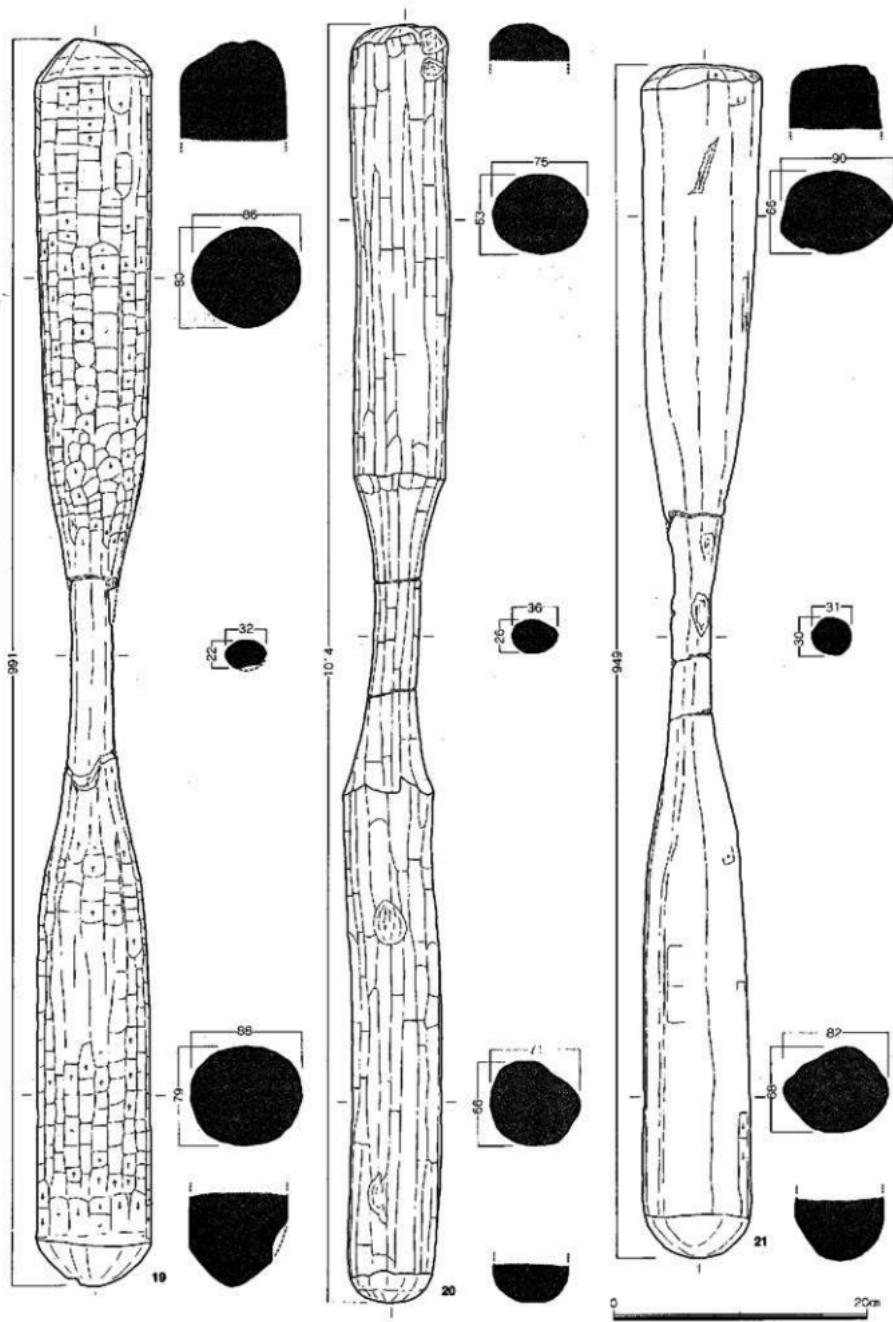


Fig.95 SW02の遺物 (縮尺1/4)

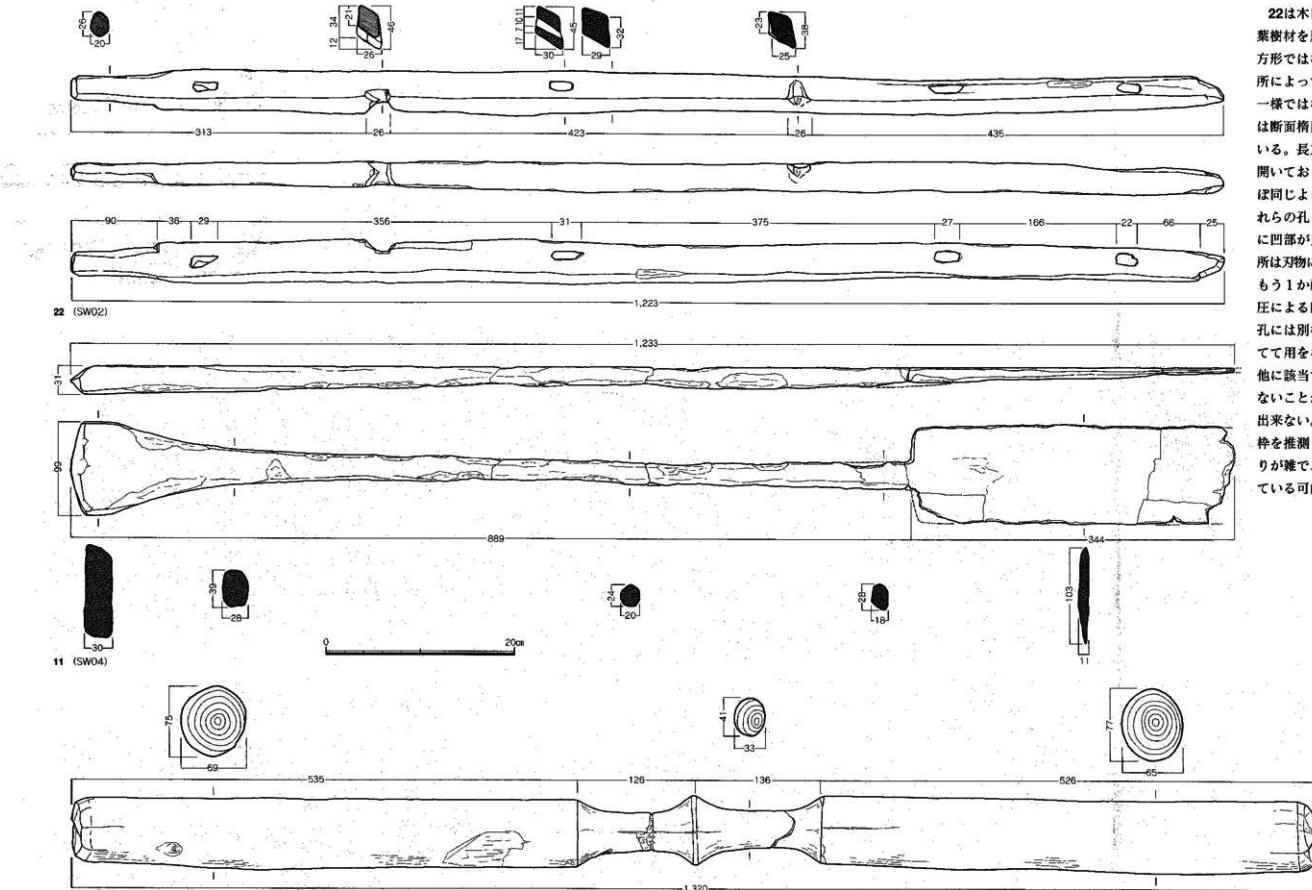


Fig.36 SW02・SW04の遺物 (縮尺1/4)

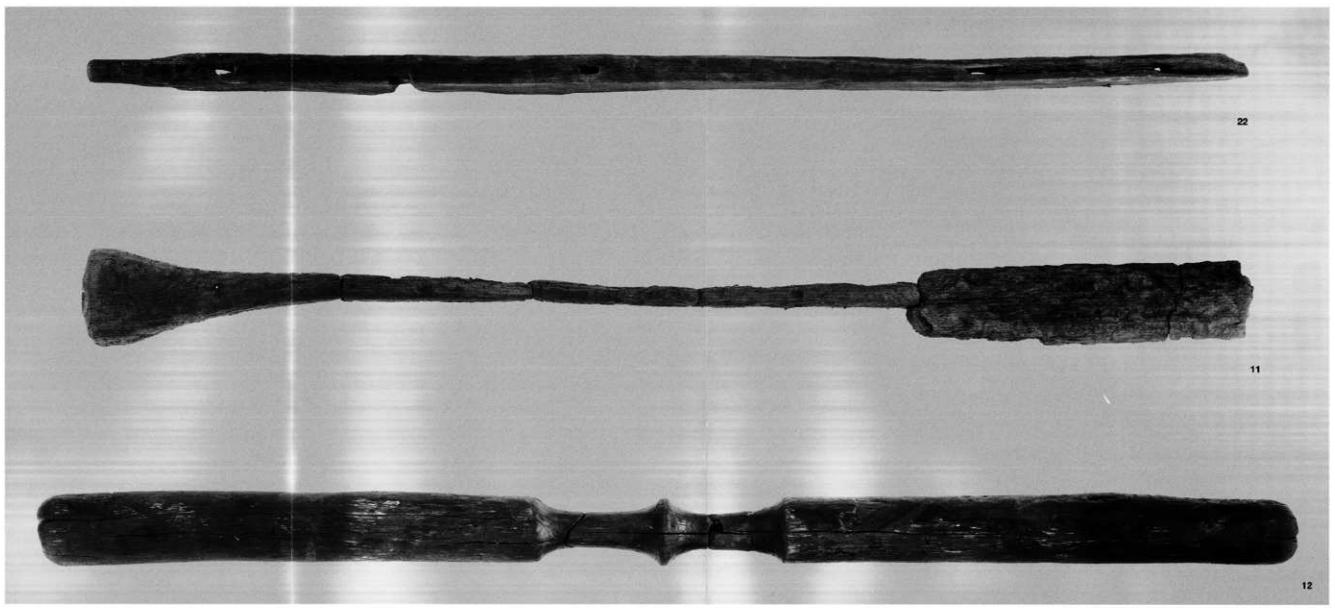


Fig.97 SW02・SW04の遺物

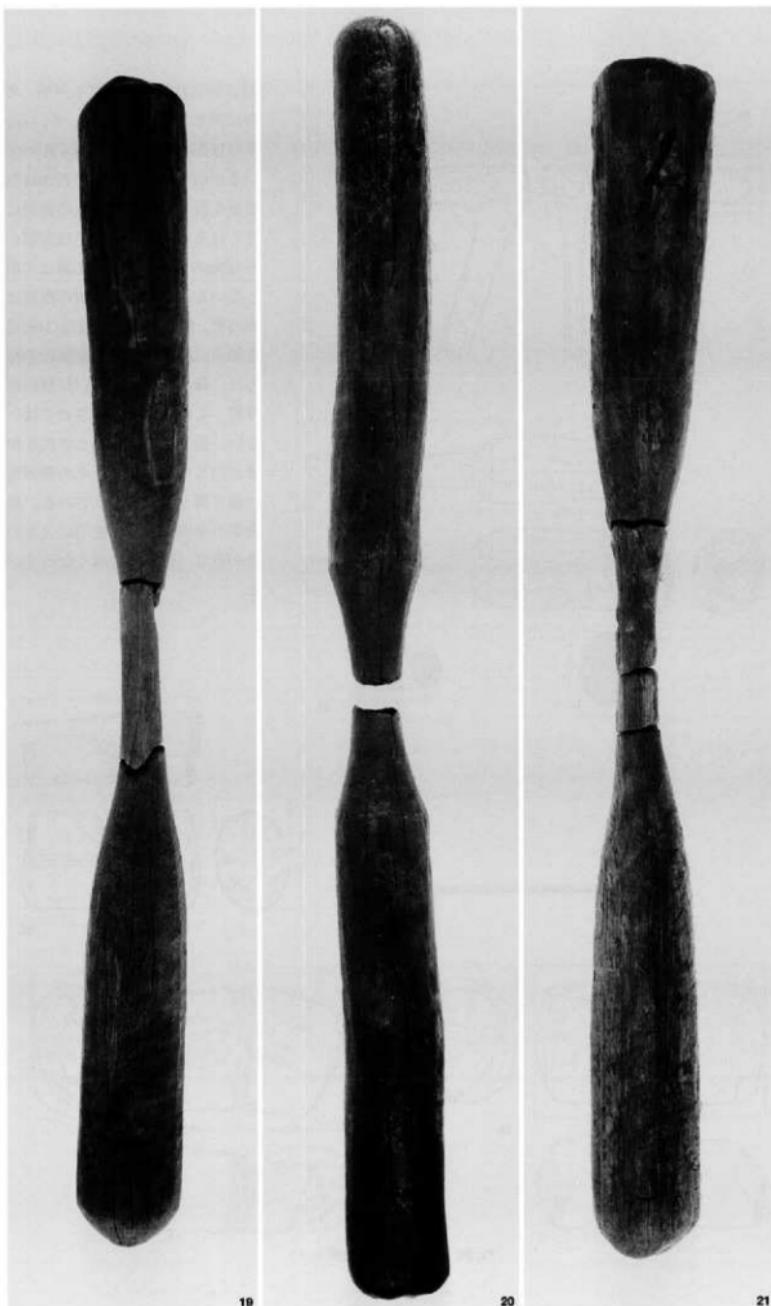


Fig.98 SW02の遺物

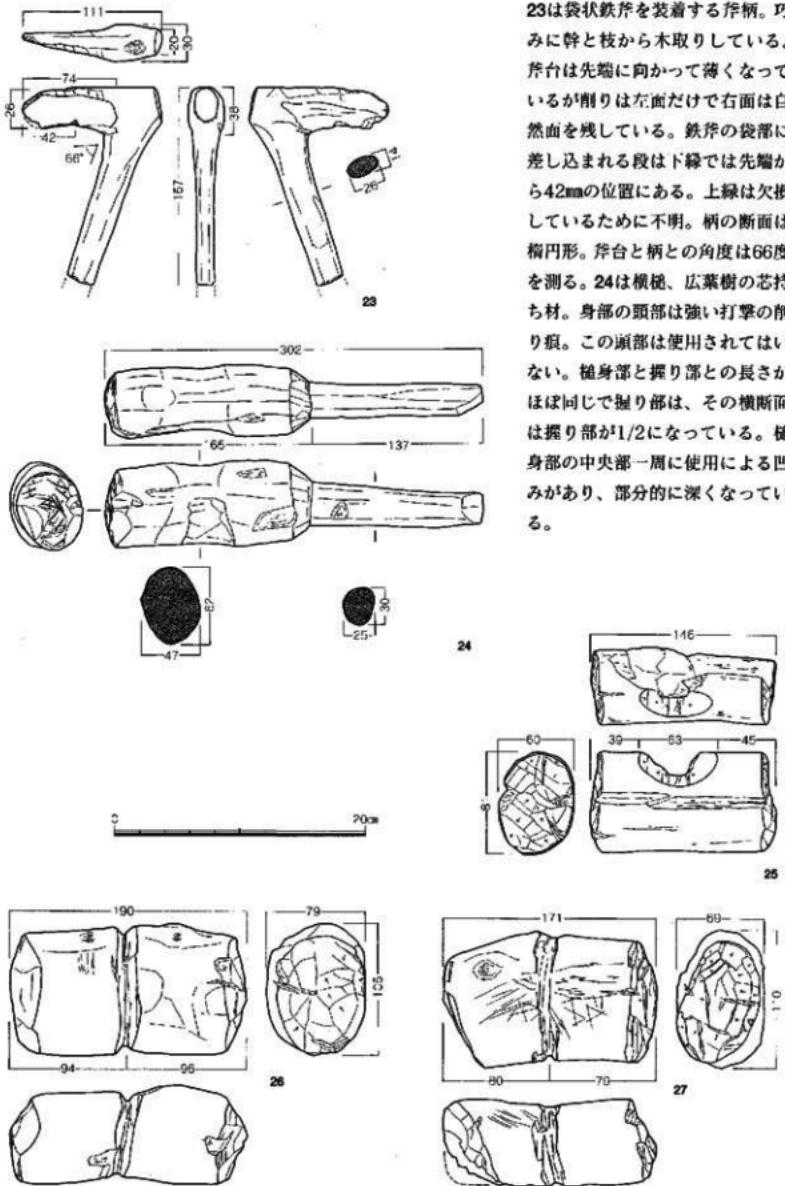


Fig.99 SW02の遺物（縮尺1/4）

23は袋状鉄斧を装着する斧柄。巧みに幹と枝から木取りしている。斧台は先端に向かって薄くなっているが削りは左面だけで右面は自然面を残している。鉄斧の袋部に差し込まれる段は下縁では先端から42mmの位置にある。上縁は欠損しているために不明。柄の断面は楕円形。斧台と柄との角度は66度を測る。24は横槌、広葉樹の芯持ち材。身部の頭部は強い打撃の削り痕。この頭部は使用されてはない。槌身部と握り部との長さがほぼ同じで握り部は、その横断面は握り部が1/2になっている。槌身部の中央部一周に使用による凹みがあり、部分的に深くなっている。

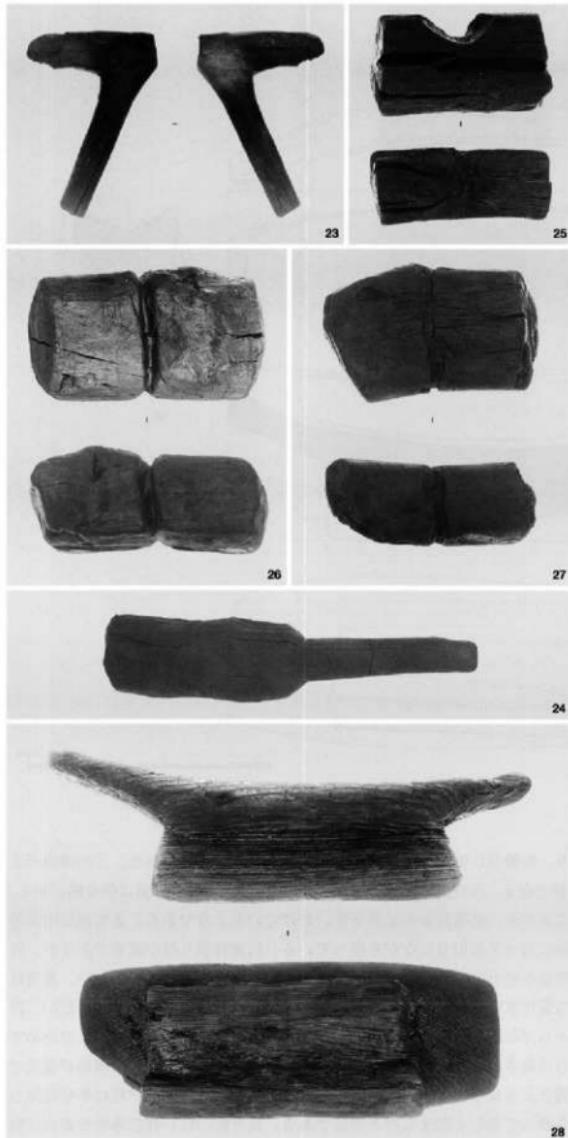


Fig.100 SW02の遺物

25～26は木鉤。25は乾燥でひび割れ、扁平となっているが、これは取り上げ後の保存管理が悪く乾燥させてしまったことによる変形である。中央の抉りは左右から刃物を加えている。通常はこの抉りは1周するものであるが、本例では一部だけにとどまっている。26は広葉樹の芯持ち材を切断している。その切り口は削り痕が明瞭に残っている。中央の溝は抉り取るのではなくV字状に切り込まれている。本例も取り上げ後に乾燥した。27は広葉樹の芯持ち材。屈曲した部分を使って加工している。中央の溝は真上から刃物を振り下ろしている。28は針葉樹を横木取りした削り物の腰掛け。SW01でも腰掛けが出土しているが、同じように長方形の座板で裏には長軸に並行する二つの脚がハ字形にふんばって付いている。座板上面は尻に合わせて両端が反り上がるようになっているが、この湾曲度はSW01の腰掛けよりも弱く、下方への折り返しもない。全体的に厚みのある作りで、実用方位の道具的印象を受ける。29～31は容器、あるいは容器の蓋と思われる木製品。29は広葉樹の板目材か。

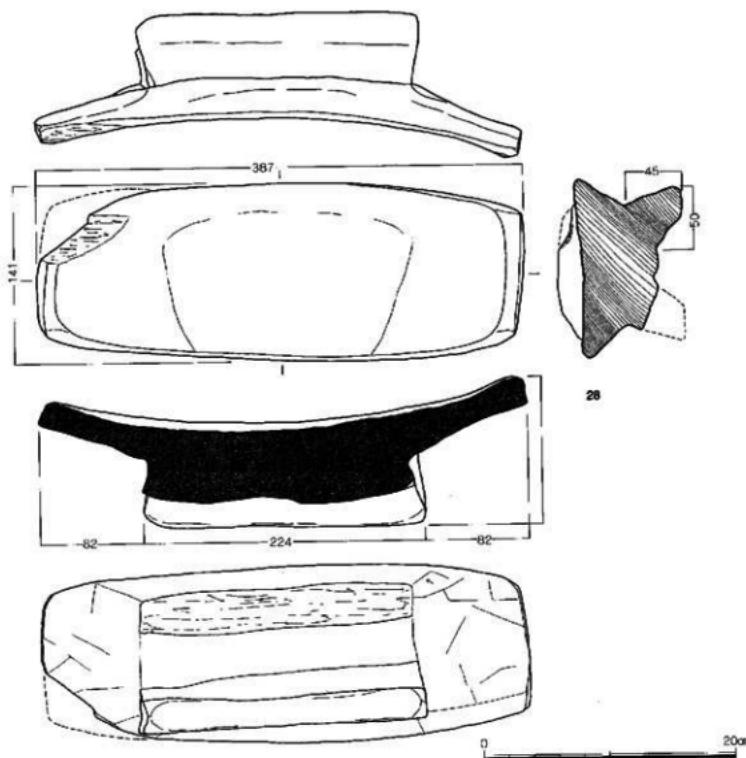


Fig.101 SW02の遺物（縮尺1/4）

幅5cmの長方形に割れており、短軸側に湾曲し、その両端内面には帯状に厚みがある。この湾曲のまま復元すると直径約15cmの筒となる。内外面と細かな削り加工が行われている。外面は削り幅が狭く、内面は削り幅が広めであることから、何種類かの工具を使い分けているようである。また両端内面の凸部は幅の狭い工具で湾曲に沿って面取りしながら削っている。内面は削り痕が顯著であるが、外面は滑らかである。30は広葉樹を使っているが全体に腐食が進み加工痕はよく残っていない。蓋受けの立ち上がりがあることから蓋付き容器の身と推定した。立ち上がり部を垂直に作図すべきだが、円形に湾曲した身にわずかながら平坦面がありここを底部とした。やや傾いた図となるのはこのためである。残っている立ち上がりは高さ約1cm、幅約3mmで、大胆に想像すると割り竹状の容器が復元できる。類例が少ないだけに29とともに原形が明らかでないのは惜しい。31は取り上げ後にやや乾燥して変形しているが、針葉樹を使って美しく加工した木製品である。長方形の厚い材の端部を斜めに切り落とし、底広の削り抜きをしている。この削り抜きは、幅広の縁を設けた内側から端部の切り落とし

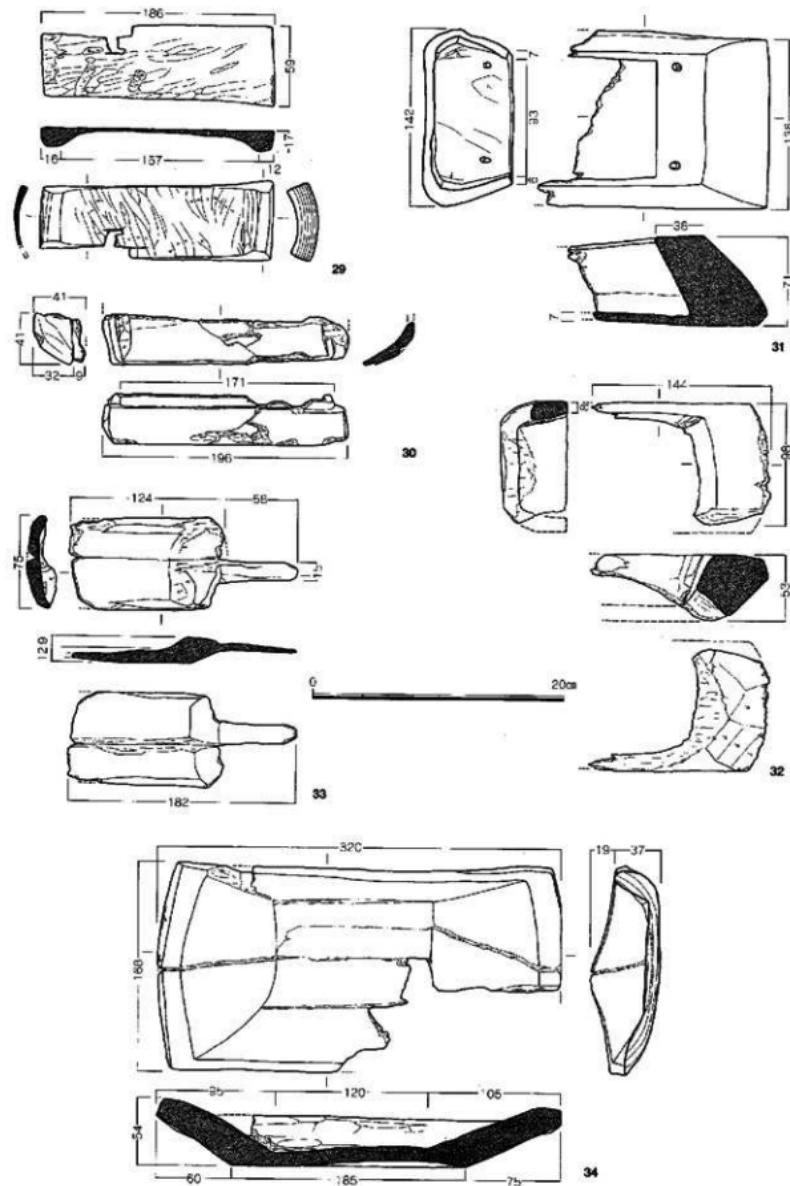


Fig.102 SW02の遺物 (縮尺1/4)

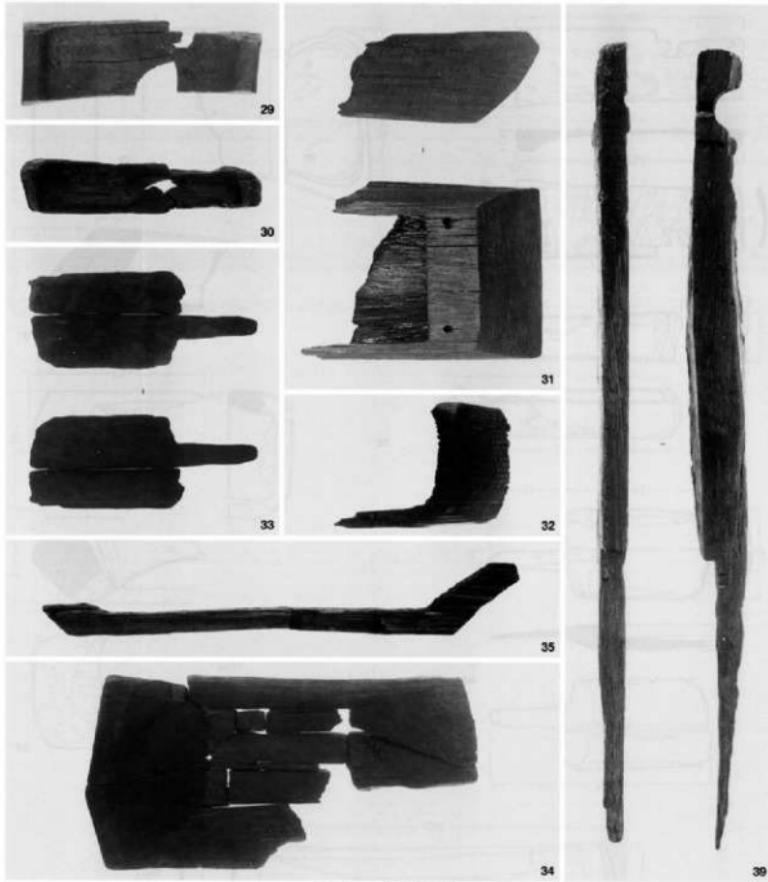


Fig.103 SW02の遺物

し角度と同じように斜めに掘り込んでおり、その上面に縁には内側に貫通する2個の小孔がある。本例も類例を知らない。32は幅10cm前後の長方形の木製品。図左部は火熱で炭化している。端部と削り抜きの方向は31とは逆で、内側に向かって斜め方向である。残存部の加工は丁寧で、滑らかな面となっている。形状から小形の槽とした。33は広葉樹の柾目材。割れて残存部も腐食が激しく原形を留めていないが、現在は長方形に浅く削りぬかれた身に長さ18.2cmの柄が付いている。身の横断面はわずかに湾曲し、内面の削り抜きは1cm程度の深さしかなく、身が横方向に湾曲しているために、側面との高さは5mm程度となっている。両端に柄が付く形状も考えられるが、ちり取りのように一方が埋いた形状で、物をすくい取る機能とすると深さが足りないようだが、豆類や稲粒、粉などには以外と

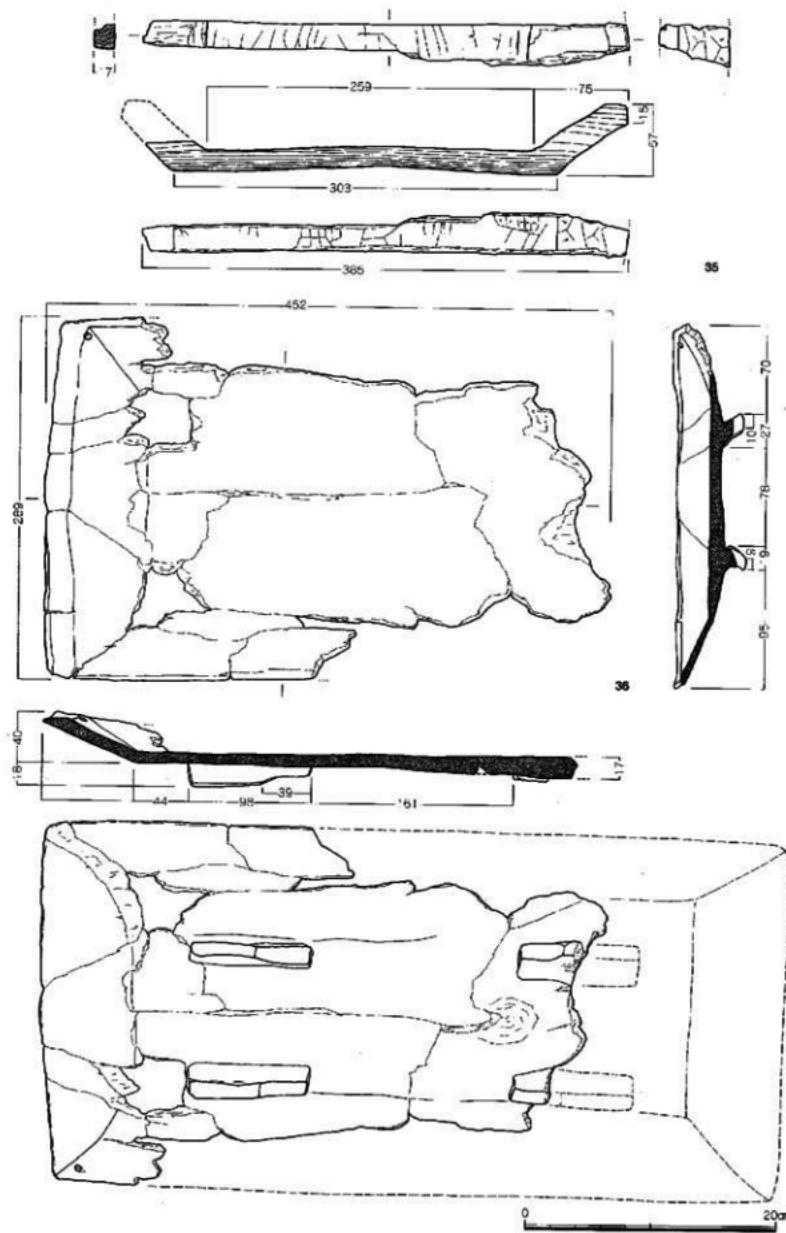
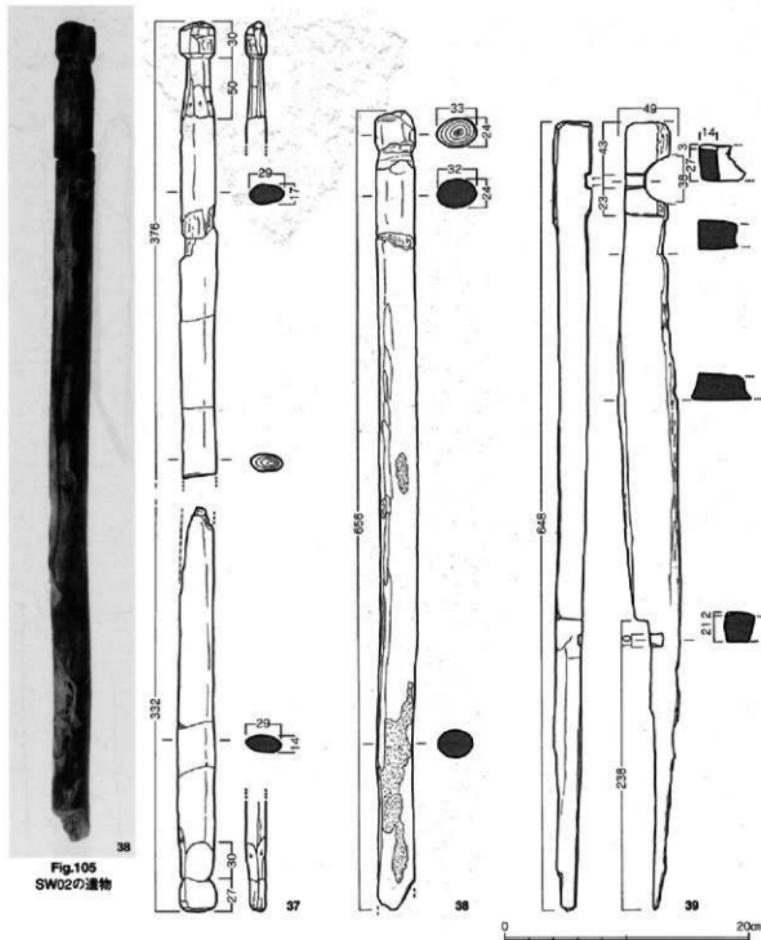


Fig.104 SW02の遺物 (縮尺1/4)

通していたかも知れない。34～36は大きめの槽。34は長方形で短辺側が直線ではなく中央が丸く膨らんでいる。縦の断面は低い逆台形に削り抜かれている。横の断面で見ると底部は平坦でなく微妙な湾曲を持たせ、かつ短辺も山形に盛り上がっている。形状を美しく見せようとする造形思想が読みとれて単純な形状ながら心地よい。35は幅約5cmの破片。その断面から長方形の槽とした。内外面とも長軸方向の丁寧な削りが施されている。36は横木取りした長方形の槽。両長辺の一部と短辺が残っているにすぎないが、底面に削り出された4個の脚の位置から元の大きさが復元できる。短辺は大



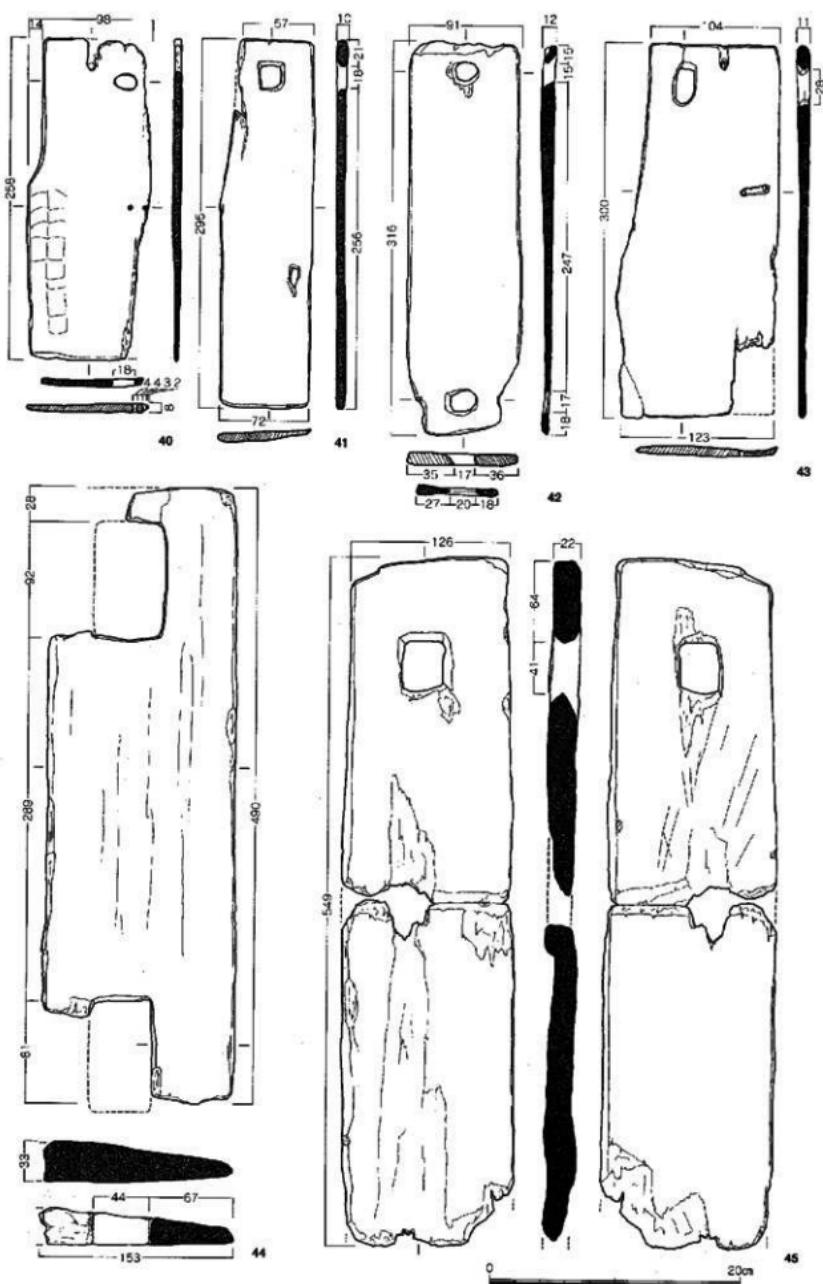


Fig.107 SW02の遺物 (縮尺1/4)

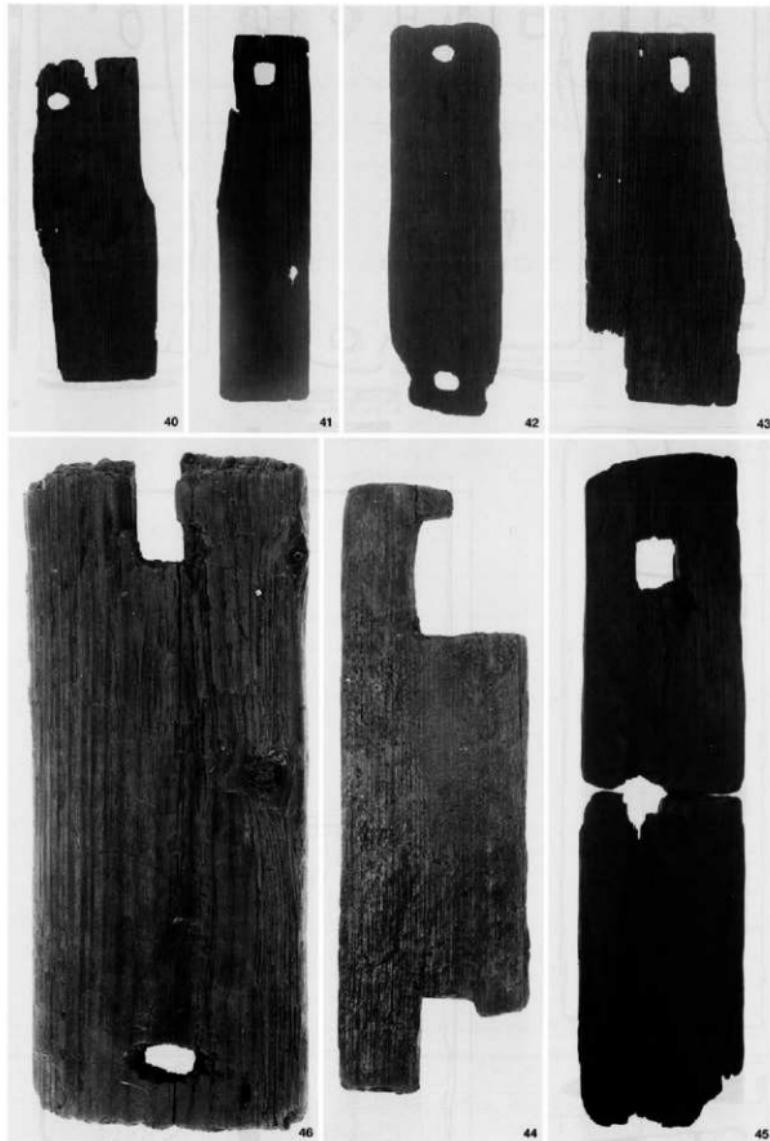


Fig.108 SW02の遺物

きく開き、その分浅くなっているが、脚の高さでバランスが保たれている。脚は底面の長軸中心線に對して並行に配置されており、全体にきわめて巧みな細工である。37、38は棒状の端部を加工した木製品。32は同一材であるが途中が失われ接合しない。中央部の断面は梢円形。図上端は削りで頭部を作り、図下端は端部に向かっての削りで頭部を作らない。38は樹皮が残る丸太材。同じように頭部を作っており、溝状の括れ部には紐擦れのような痕跡が観察できる。39は針葉樹の板目材。図上端と下端に加工がある。溝状の加工は別材を組み合わせたものか。割れており用途不明。

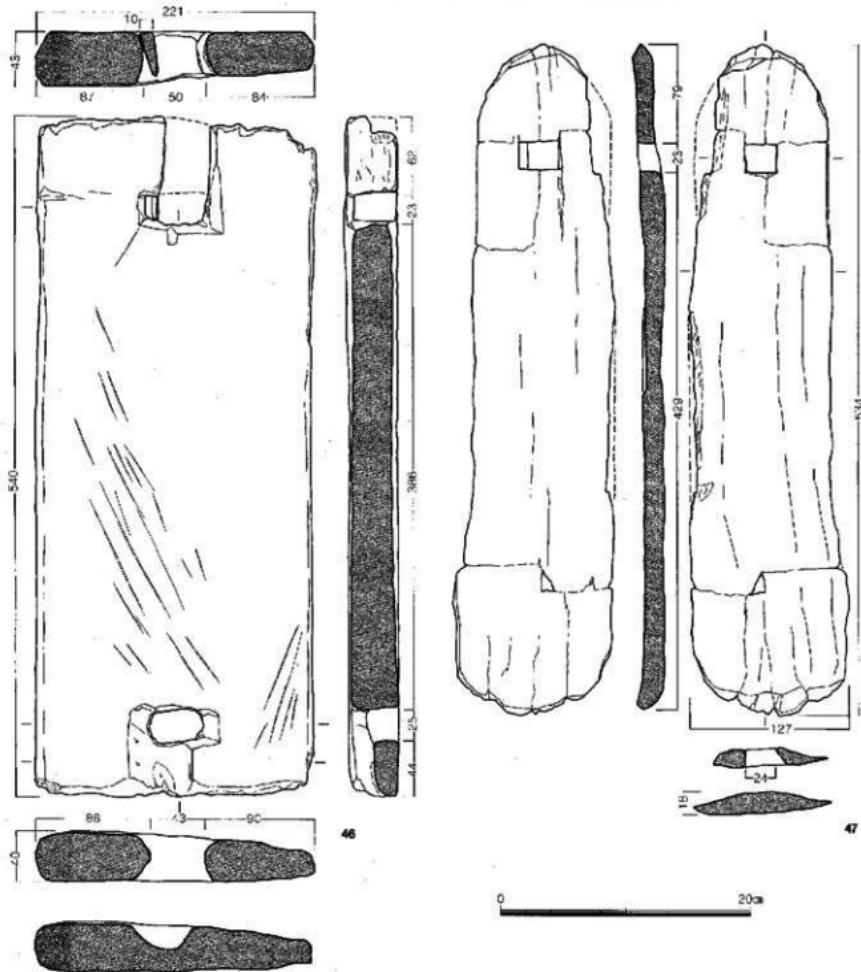


Fig.109 SW02の遺物 (縮尺1/4)

40~47は方形孔を持つ板状の木製品である。40は針葉樹の柾目材、薄い板材で一部に削り痕が残る。岡上端の右に片寄って横長の孔がある。中位の右端には2個の小孔が穿たれている。組合せ材だろう。41はほぼ原形を保っている。長方形ではなく左側辺が斜めに切断されている。2孔あるが中位の孔は人工的かどうか不明。岡上端の孔は整った方形をしており、角材を差し込むのであろう。42は両端に横楕円形の孔が開いている。孔の壁は直ではなく両面から穿って「く」字形の断面となっている。岡下端側は側辺が括れ、両側面は摩耗して角も取れてる。43は針葉樹の柾目材。形状は40と同じように側面がカーブしている。岡右端の中程に2個の小孔が溝で繋がっている。曲げ物の側板組み合わせで同じような工作があることから、曲げ物かと推測したが、岡上端にも大小の孔があり、別の用途であろう。44は4cm×9cmの方形孔がある。広葉樹の柾目板で岡左側が厚く、右に向かって薄くなる。建築部材か。45は厚みのある板材で、岡上端に方形の孔がある。厚さは均一で

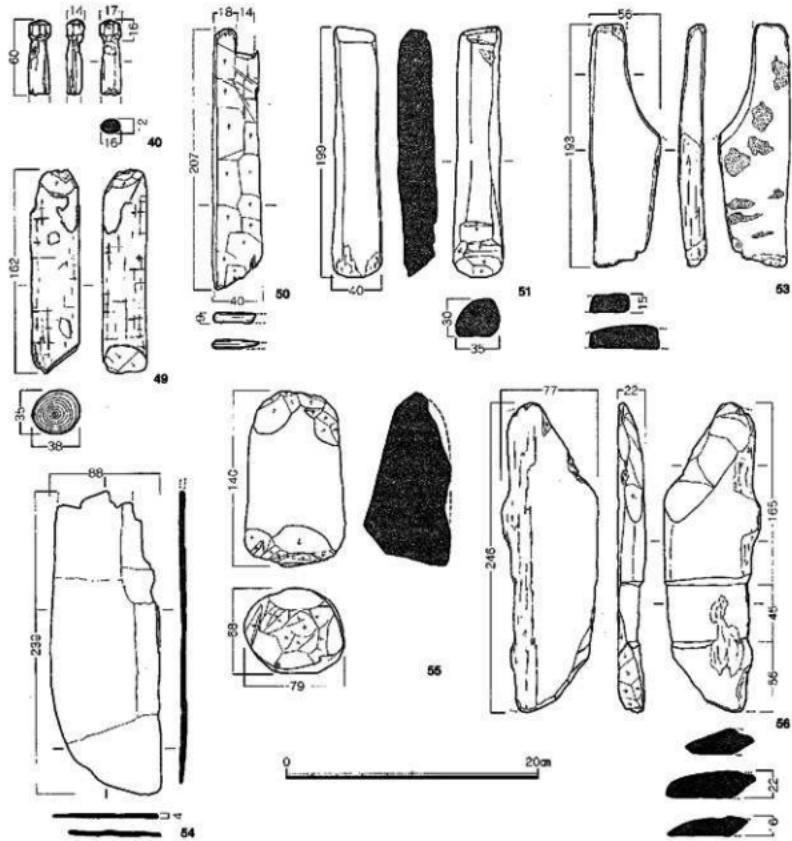


Fig.110 SW02の遺物（縮尺1/4）

はない。一部に刃傷が付いている。46は厚みを整えた板材で、腰掛けの座板と考えた。両端に $2\text{cm} \times 4\text{cm}$ の長方形孔が開いている。この2個の孔は長軸中心線に対し直交しており、図上端の孔には楔が残っている。楔は $2\text{cm} \times 3.5\text{cm}$ の長方形で、両端の厚さは 1cm と 0.5cm で打ち込みやすいように一方を薄く削っている。ここに脚板を組み合わせ楔を打ち込み補強を図ったのだろう。座板上面には内傷があり、ある時は工作台としても使用したか。47は広葉樹の板目材。厚さ不均一の板材で図上端側に方形孔を穿っている。孔の壁は直だが一辺だけ斜めに掘り込んでいる。用途不明。

48～56は用途不明の木製品。48は細い棒の一端を弓弦のように加工している。削りによって括れを作り、その下方には浅い溝状の窪みがあり紐を結んだか。49は樹皮の残る丸太材の両端を削り切断

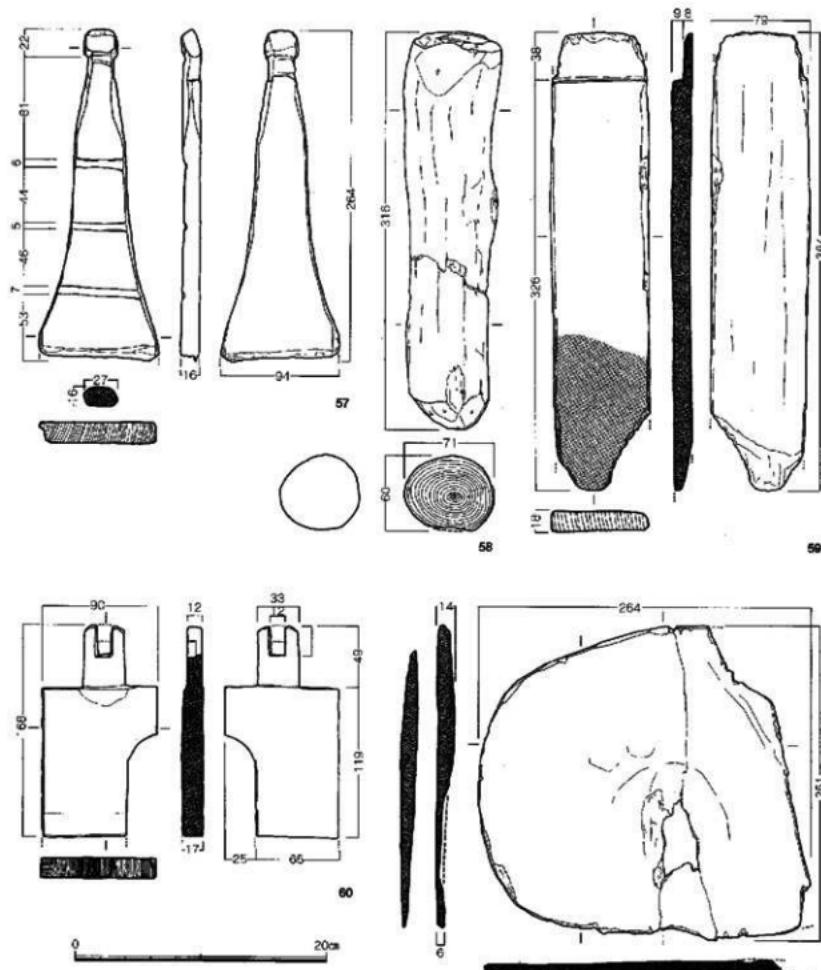
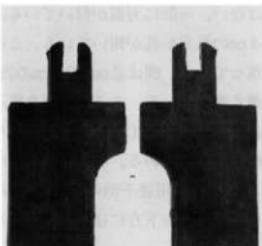
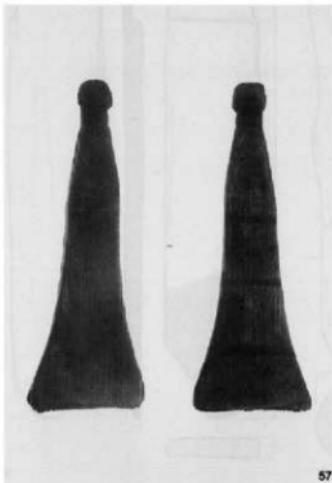


Fig.111 SW02の遺物 (縮尺1/4)

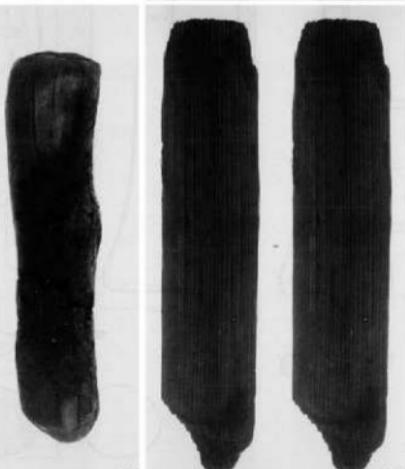
している。どちらかが後の再加工かも知れない。50は針葉樹の板目材。図上端に方形孔のような加工がある。表面のみに削り痕が残り刃傷が数本ある。51は長さ約20cm。断面は不整形。両端に浅い段がある。図表裏面は割りに平坦で側面は丸みがある。52の周囲は削り面取りしている。図下端は弧状になり、片面からの削りで刃部のようにも見える。図表裏面とともに微妙な凹凸がある。53は左図右上は丸く抉られているが他の側辺は原形かどうか判断できない。又歯の一部のようにも見えるが刃の付け方が異なる。54は2~3mmのきわめて薄い板材。図左側面は鈍く尖り下端ほど摩耗して面となっている。



50

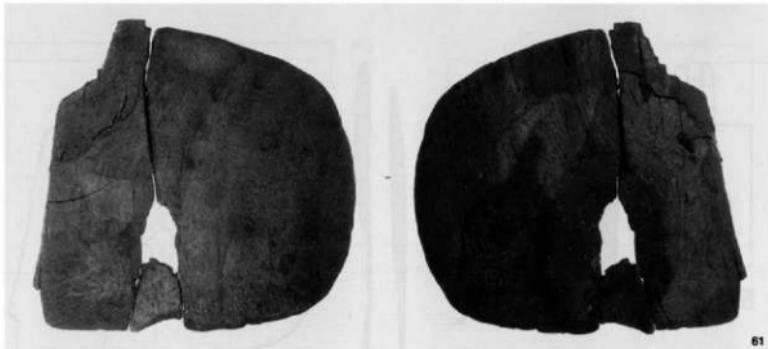


51



52

53



54

Fig.112 SW02の遺物

55の図下端の切断痕を見ると堅杵抜き部と類似している。横断面も同じように円形であることから堅杵の再加工品とも思える。56は広葉樹の柾目材。左図には段のような加工があることから、履き物のような機能を考えたが、段があまりにも低く、足に固定する工夫も特ないので別の用途だろう。57は板材を背の高い三角形に加工している。その頂点には丸みある頭部を作っている。左図のみに4本の段があるが、これは削り加工ではなく、何かを押し当てた痕跡である。頭部の作りから別材に挿入する組合せ材と考えたが、片面の押圧の段が説明できない。58は広葉樹の芯持ち材。図上端の切断が堅杵によく似ていることから転用と推測したが、中心軸がやや湾曲しているのが気になる。一部が火熱を受けて炭化している。59は針葉樹の柾目材。全体に平滑に加工されており、図上端には段がある。同じように段を持つ板材と直角に組み合わせる方法も検討したが段の長さが短すぎる。他材に差し込むような組合せなのだろう。60は雀居遺跡第4次調査で初めて明らかになった組合せ式机の脚部。柾目材で木目がよく綺まっている。その木目は相当大きな材から木取りしたことを示している。組合せの方法は第4次調査例と同じだが、机天板に差し込む頭部の作りや脚の側面の挟りなど細部は異なることが多い。全体的に直線的で鋭利な作りとなっている。脚下部を切断していることから、別の目的に使用したのだろう。61は梢円形で薄手の作りから織の泥よけ具の木製品を想定し、図のような天地とした。縦断面は上部が厚く下部に向かって次第に薄くなる。横断面は図の手前側にわずかながら湾曲している。中央線下半に欠損部があるが、これが柄孔の位置とすると天地逆となり、また左右対称でないいびつな形状となる。やはり別用途を考えるべきか。62は高床式建物の柱に装着した鼠返し。やや梢円形の形状で中央部が厚く、外縁に向かって薄くなっている。図裏面側に湾曲し柱を登ってくる鼠を防いだのだろう。柱を通す中央の孔は元は15cm程の方形だったと思われる。側縁の腐食と比べると、その度合いが強く、あるいは再加工して転用した可能性もある。すると図右端上下の長方形孔が、当初のものか転用時の加工かが問題となる。鼠返しの大きな材を確保できずに半円で製作し、2枚の部材を連結・緊縛する目的だったのか、あるいは途中で割れてその補修孔として開けたのか。長方形孔が中心線からズレて並んでいることからすると補修孔か転用後の可能性が高い。

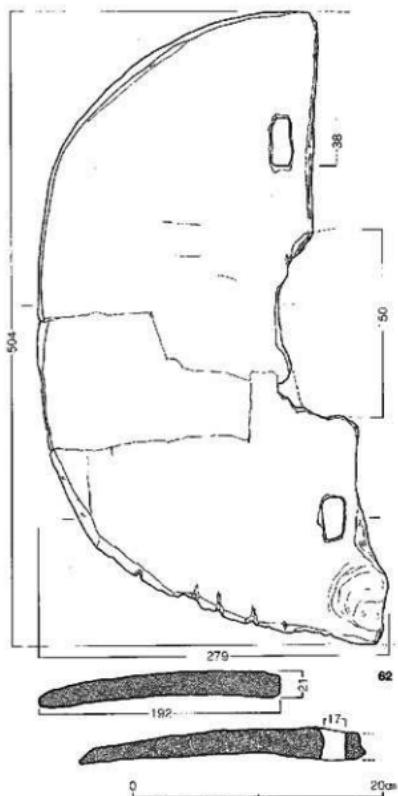


Fig.113 SW02の遺物（縮尺1/4）

第3号凹地SW03 SW02の西側、X32グリッドを中心とした位置にある。SW02が円に近い平面プランであるのに対し、SW03は長軸10.00m、短軸9.84mの橢円形で、東側がわずかに凹んでいる。西側には小さな橢円形の凹地が繋がっており、これら2つを東西凹地、西凹地と呼び分けるが一つの遺構として遺構名を付けた。東西凹地の斜面は途中に段を作りながら底面に続いている。底部は連結部でわずかに盛り上がって境になっている。底面までの深さは西凹地が54cm、東凹地が39cmである。西凹地には大きな丸太材が横たわっている。東凹地では東西岸に見られ、SW02のように集中しているわけではない。その分遺物の出土は少なく、実測したのは土器1点と木製品4点である。

出土遺物 土 器 1 はやや尖り気味の丸底。薄い器壁の作りで、外面の調整は細かな継ハケ目、内面は削りで底部近くは指押さえ。胎土に1mm大の砂粒を多く含んでいる。内外面の色調は茶褐色。

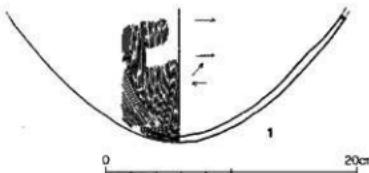


Fig.114 SW03の遺物 (縮尺1/4)

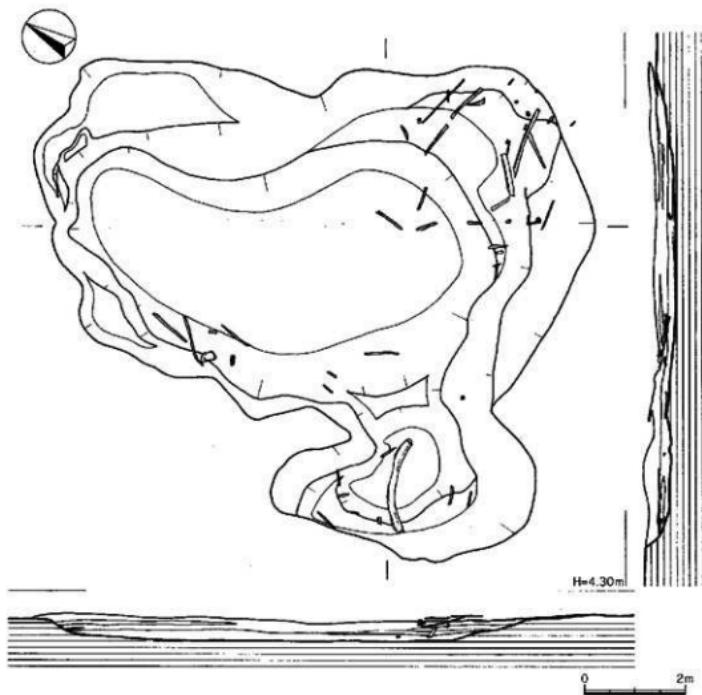


Fig.115 SW03実測図 (縮尺1/100)

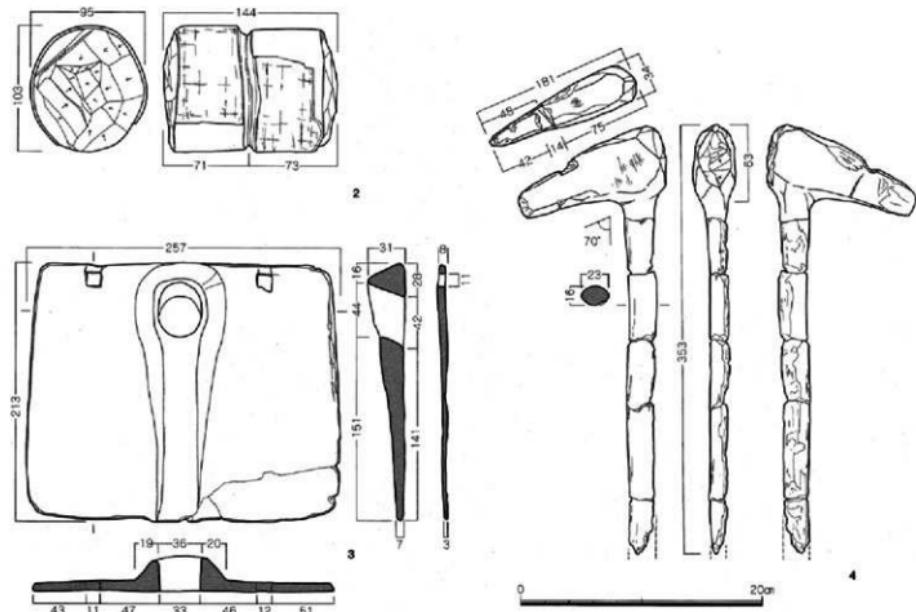


Fig.116 SW03の遺物 (縮尺1/4)



木製品 2は木鎌。樹皮が付いた丸太材を切断し、中央に幅の狭い溝を1周させている。全長が短いのが特徴。3は横鎌。前にSW01出土の横鎌とよく類似していることから比較したが、本例の隆起部は明瞭に盛り上がりその後線もシャープである。隆起部の確かな工作に対し、身はきわめて薄い。柄孔の両側の方形孔には紐擦れ



Fig.117 SW03の遺物

で摩耗している。実際に泥よけ具が装着されたことを示している。裏面には泥除け具を受け止める段はない。4は袋状鉄斧を装着した柄。幹側の斧台は先端に向かって尖り気味に削り、先端から4.8cmにわずかな段がついており、ここまで袋状鉄斧が入ったのであろう。柄は數片に折れ元の長さは不明。断面は梢円形である。5は鼠返しの完形品。本例はSW03の縁より上がった南西側で出土した。砂質土に覆われておりSW03から溢れ出たような状況であった。形状は隅丸方形で中央に直径14.2cmの柱孔が開いている。広葉樹の分厚い材で、断面はわずかに湾曲し、周囲に向かって薄くなる。鼠返しの機能からすると図は地面側であろう。SW02出土の鼠返しと比べると大きさよりも材の厚さに目を奪われる。

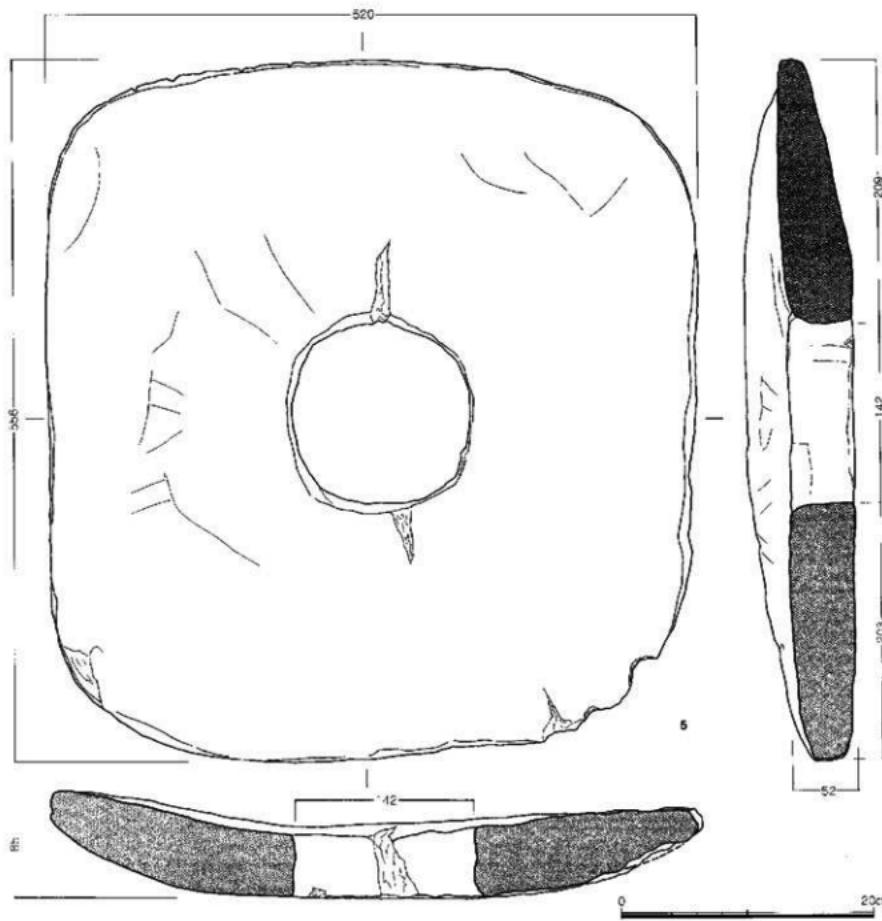


Fig.118 SW03の遺物 (縮尺1/4)

6. 方形周溝 (SR)

第1号方形周溝SR01 R31グリッドに位置する。第10次調査で溝の北側を発掘していたが、部分的であり、一端は発掘区外に入り、もう一方は途切れたために方形周溝の遺構名を与えていない。第12次調査によって全形が現れ、ようやく方形周溝と認定した。南北が対角線軸となる方形で、溝の幅は約70cm、断面は逆台形で深さは25cm前後。北東隅で溝は上がり陸橋のように開いている。区画された内側には大小のビットがあるが、埋葬施設とは思えない。またこれらビットも同時期か判断できない。南隅に弥生時代後期終末の土器4個体分が出土した。雀居遺跡では第5次で発掘されており、本例よりも一回り大きく、弥生時代後期後半の土器や木製品が出土している。



Fig.119 SR01土器出土状況



Fig.120 SR01 (北西から)

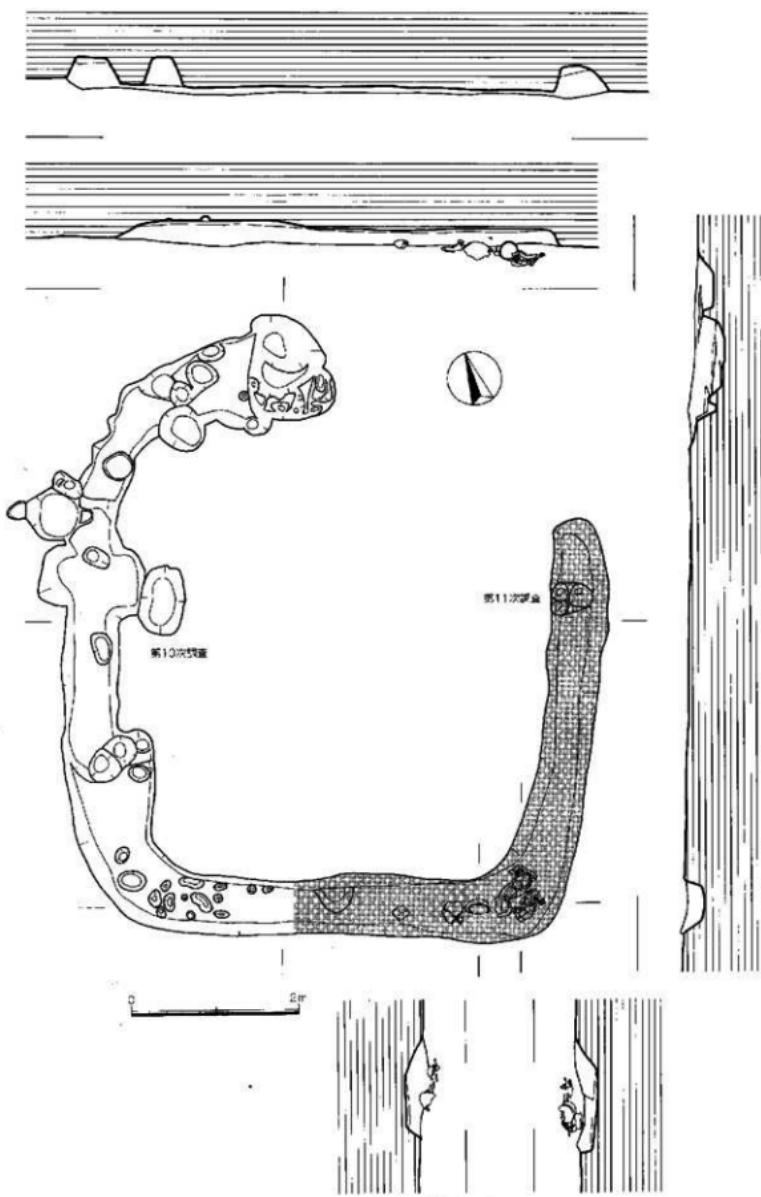


Fig.121 SR01実測図 (縮尺 1/60)



Fig.122 SR01（北西から）



Fig.123 SR01の遺物

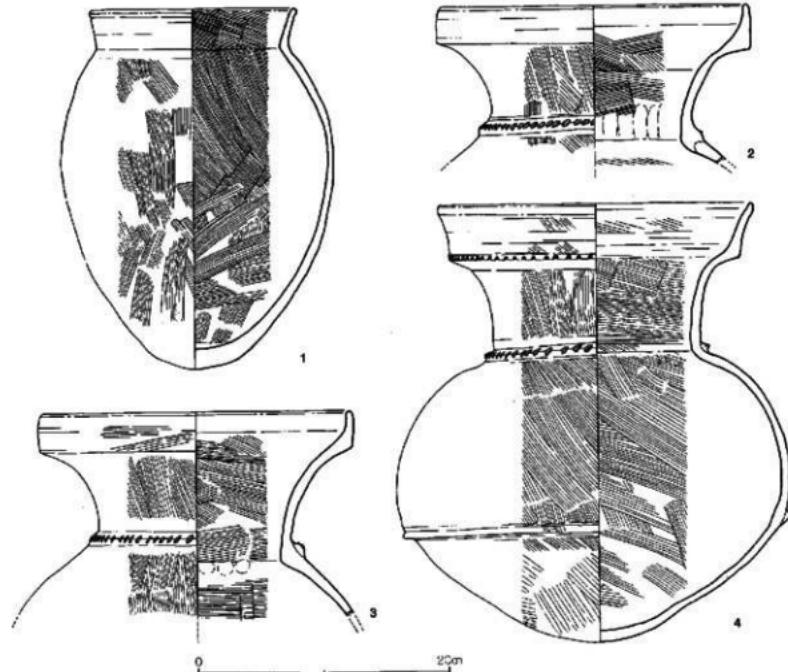


Fig.124 SR01の遺物（縮尺1/4）

出土遺物 土 罐 1~4は古式土師器である。1の長頸壺は、内外面とも不規則なハケ目調整で在地系（A系）である。もともとA系器種は変異が大きく、時期も大まかにしか想定できないが、多くの縄年案はだいたいは頸部最大径位置と底部形態の2つの属性の組み合わせから各型式の変遷を示している。A系壺はⅡA期以降、法量が全体的に縮小し、頸部が次第に縮まって、それにつれて形態も長頸から球形胴へ、上位重心から中位重心、下ぶくれへ、底部は平底の名残りのあるレンズ底から丸底に近いレンズ底や尖底、そして丸底へという傾向が見られる。1は胴部は中位重心、底部形態は尖底である。やや大型で頸部もまだそれほど縮まっておらず、時期としてはⅠB~ⅡA期辺りの可能性が高い。2~4の二重口縁壺は、内外面ともハケ目仕上げで、頸部から二次口縁部までの屈曲部は比較的なだらかで、頸部~胴部の屈曲部や胴下半に突帯が見られるなどの特徴からA系技法である。2と3は形態的にも調整的にもよく似たものである。ただ2の壺の刻目突帯の成形は、他の3、4と違い、突帯を貼付けるのかそうではないのか不明である。4は底部が尖り気味の丸底で、胴部外面下半は太筋タタキによる成形である。A系上器は、時が経つにつれて丸底化し、調整も外面はタタキ技法が現れ、内面はケズリ技法が出現する。外来のB、C、D系などの影響であろうが、このSR01の4つのA系上器に関しては、4の壺に外面タタキ成形技法がわずかに見えるのみで、内面ケズリ技法などはまだ出現していない。変異の大きいA系土器による時期決定は難しいが、時期的にそのような段階なのだとえよう。